筑後北部地区遺跡群 I

福岡県筑後市大字熊野・蔵数所在遺跡の埋蔵文化財調査
筑後市文化財調査報告書
第61集

2005

筑後市教育委員会

筑後北部地区遺跡群 I

福岡県筑後市大字熊野・蔵数所在遺跡の埋蔵文化財調査

・熊野水町遺跡第１次調査
・熊野松ノ下遺跡第１次調査
・熊野五反田遺跡第１次調査
・熊野宮ノ後遺跡第１次調査
・蔵数島崎田遺跡第１次調査

2005

筑後市教育委員会

1　筑後北部地区遺跡群　全景　（熊野松ノ下遺跡上空より西側）

2　筑後北部地区遺跡群　全景　（熊野松ノ下遺跡上空より西南側）

中扉図版

3　筑後北部地区遺跡群　全景　（熊野松ノ下遺跡上空より北西側）

4　筑後北部地区遺跡群　全景　（熊野松ノ下遺跡上空より北東側）

序

筑後平野の中央部、矢部川中流域北岸に位置する筑後市は、古代より水稲耕作の適地として開発が進み、また交通の要衝として多くの人々が往来することにより、歴史を刻んできました。

この度報告する筑後北部地区遺跡群は筑後市の北西部に位置し、筑後市を代表する弥生時代の蔵数森ノ木遺跡、中世広川荘の中心であった坂東寺熊野神社、戦国時代筑後15将のひとつであった西牟田氏の拠点・三潴郡西牟田郷に囲まれた歴史豊かな地区であります。今回の調査では主に中・近世の遺跡が確認され、この地域の開発の歴史を知る上での貴重な資料を得ることが出来ました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、各工事関係者、各関係機関、有識者各位には多大な御協力と御援助を頂きました。ここに心から感謝を表する次第であります。本書が文化財保護への理解を深める一助となり、併せて研究資料として御活用いただければ幸いです。

平成17年３月

筑後市教育委員会

教育長　城戸　一男

例　言

1．本書は県営ほ場整備事業（担い手育成型）筑後北部地区の実施に伴い　福岡県筑後川水系農地開発事務所の依頼を受けて、筑後市教育委員会社会教育課文化スポーツ係が、平成15年度に大字熊野・藏数において実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．本書使用の遺構実測図は小林勇作・上村英士・立石真二が製作し、浄書を平塚あけみ・佐々木寿代が行なった。また遺跡の航空測量は株式会社埋文財サポートシステムに依頼した。

3．本書使用の遺物実測図は佐々木、横井理絵が製作し、浄書を平塚・佐々木が行なった。

4．本書使用の写真は小林・立石が撮影した。なお、遺跡の気球写真は俯空中写真企画に依頼した。

5．本書使用の標高は海抜高であり、方位はG.N.である。

6．本書が使用した座標は世界測地系を使用しているが、従来の国土調査法第II座標系も併記している。

7．本書に掲載した遺構の縮尺は1/40を基本とする。

8．本書に掲載した遺物の縮尺は1/3を基本とする。

9．本書に使用した記号は以下の通りである。

SD ……　溝状遺構　　SE ……　井戸
SK ……　土壙　　SP ……　ピット
SX ……　不明遺構（水田跡・流路・落込み状遺構・溜り状遺構など）

10．本書の執筆は第３章２・４節を小林が、その他を立石が行なった。編集は立石が行なった。

11．本書に関わる図面・写真・遺物などの資料は筑後市教育委員会で保管・管理され、今後公開・活用される予定である。

目　次

第1章　調査経過と組織
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査組織 …… 2
　3　調査経過 …… 3
第2章　位置と環境
　1　地理的環境 …… 5
　2　遺跡地周辺の地理的環境 …… 6
　3　歴史的環境 …… 6
第3章　調査成果
　1　熊野水町遺跡の調査 …… 7
　2　熊野松ノ下遺跡の調査 …… 21
　3　熊野五反田遺跡の調査 …… 27
　4　熊野宮ノ後遺跡の調査 …… 35
　5　蔵敷島崎田遺跡の調査 …… 53
第4章　結語 …… 63

図　版

挿　図　目　次

Fig. 1　筑後北部地区遺跡群　位置図（S＝1/25,000） …… 1
Fig. 2　筑後北部地区遺跡群　平成14・15年度試掘トレンチ位置図（S＝1/12,000） …… 2
Fig. 3　筑後北部地区遺跡群　周辺遺跡位置図（S＝1/25,000） …… 5
Fig. 4　熊野水町遺跡　位置図（S＝1/2,500） …… 7
Fig. 5　A区遺構配置図（S＝1/300） …… 8
Fig. 6　A区　土壙（S＝1/40） …… 9
Fig. 7　A区　溝状遺構（S＝1/40） …… 10
Fig. 8　1SX15土層断面（S＝1/40） …… 11
Fig. 9　B区遺構配置図（S＝1/300） …… 12
Fig. 10　1SD25・30（S＝1/40） …… 13
Fig. 11　1SD35・10（S＝1/40） …… 14
Fig. 12　1SX06・07土層断面（S＝1/40） …… 15
Fig. 13　1SX20土層断面（S＝1/40） …… 16
Fig. 14　出土遺物(1)（S＝1/3） …… 17
Fig. 15　出土遺物(2)（S＝1/3・1/2） …… 18
Fig. 16　調査地点位置図（1/2,500） …… 21
Fig. 17　溝土層断実　測図（1/40） …… 22
Fig. 18　熊野松ノ下遺跡遺構略測図（1/200） …… 23
Fig. 19　出土遺物実測図（1/3） …… 25
Fig. 20　熊野五反田遺跡　位置図（S＝1/2,500） …… 27

Fig. 21　基本層序模式図 …… 27
Fig. 22　熊野五反田遺跡　遺構配置図（S＝1/200） …… 28
Fig. 23　1SD01土層断面（S＝1/50） …… 28
Fig. 24　1SD02・1SK03・1SX04（S＝1/40） …… 29
Fig. 25　1SX05土層断面（S＝1/50） …… 30
Fig. 26　1SD01出土遺物（S＝1/2・1/3） …… 30
Fig. 27　1SX05出土遺物(1)（S＝1/3） …… 31
Fig. 28　1SX05出土遺物(2)（S＝1/3） …… 32
Fig. 29　調査地点位置図（1/2,500） …… 35
Fig. 30　A調査区：1SD30実測図（1/100・1/40） …… 36
Fig. 31　熊野宮ノ後遺跡遺構略測図（1/200） …… 37
Fig. 32　B調査区：1SD01・03・04、1SK02、1SX07実測図（1/100・1/40） …… 39
Fig. 33　B調査区：1SD08・09実測図（1/100・1/40） …… 41
Fig. 34　B調査区：1SD10実測図（1/100・1/40） …… 42
Fig. 35　C調査区　1SK25～28、1SD29実測図（1/40） …… 44
Fig. 36　A調査区出土遺物実測図（1/3・1/2） …… 46
Fig. 37　B・C調査区、表土、[illegible]遺物実測図（1/3・1/2） …… 49
Fig. 38　蔵数鳥崎田遺跡　位置図（S＝1/2,500） …… 53
Fig. 39　蔵数鳥崎田遺跡　遺構配置図（S＝1/250） …… 54
Fig. 40　1SK01（S＝1/40） …… 55
Fig. 41　1SK02（S＝1/40） …… 55
Fig. 42　1SK05・11（S＝1/40） …… 56
Fig. 43　1SD06（S＝1/40） …… 56
Fig. 44　1SX10土層断面（S＝1/40） …… 57
Fig. 45　出土遺物（S＝1/2・1/3） …… 58

付表目次

Tab. 1　熊野水町遺跡　遺構一覧 …… 20
Tab. 2　熊野水町遺跡　出土土器一覧 …… 20
Tab. 3　熊野水町遺跡　出土石器一覧 …… 20
Tab. 4　熊野松ノ下遺跡　遺構番号台帳 …… 23
Tab. 5　熊野松ノ下遺跡　出土遺物観察 …… 26
Tab. 6　熊野五反田遺跡　遺構一覧 …… 34
Tab. 7　熊野五反田遺跡　出土土器一覧 …… 34
Tab. 8　熊野五反田遺跡　出土石器一覧 …… 34
Tab. 9　熊野宮ノ後遺跡　遺構番号台帳 …… 37
Tab. 10　熊野宮ノ後遺跡　出土遺物観察 …… 52
Tab. 11　蔵数鳥崎田遺跡　遺構一覧 …… 62
Tab. 12　蔵数鳥崎田遺跡　出土土器一覧 …… 62
Tab. 13　蔵数鳥崎田遺跡　出土石器一覧 …… 62

図版目次

中扉図版	1	筑後北部地区遺跡群	全景	（熊野松ノ下遺跡上空より西側）
	2	筑後北部地区遺跡群	全景	（熊野松ノ下遺跡上空より南西側）
	3	筑後北部地区遺跡群	全景	（熊野松ノ下遺跡上空より北西側）
	4	筑後北部地区遺跡群	全景	（熊野松ノ下遺跡上空より北東側）
Pla. 1	1	熊野水町遺跡	全景（東から）	
	2	熊野水町遺跡	A区全景（上から）	
Pla. 2	1	熊野水町遺跡	B区全景（上から）	
	2	熊野水町遺跡	C区全景（上から）	
Pla. 3	1	熊野水町遺跡	1SK01検出状況（北から）	
	2	熊野水町遺跡	1SK01土層断面（南から）	
Pla. 4	1	熊野水町遺跡	1SK01完掘状況（南から）	
	2	熊野水町遺跡	1SK04検出状況（北から）	
Pla. 5	1	熊野水町遺跡	1SK04土層断面（南から）	
	2	熊野水町遺跡	1SK04完掘状況（南から）	
Pla. 6	1	熊野水町遺跡	1SD05土層断面（南から）	
	2	熊野水町遺跡	1SD05竹製暗渠出土状況（南から）	
Pla. 7	1	熊野水町遺跡	1SD10土層断面（西から）	
	2	熊野水町遺跡	1SD10完掘状況（西から）	
Pla. 8	1	熊野水町遺跡	1SD25土層断面（北から）	
	2	熊野水町遺跡	1SD25完掘状況（北から）	
Pla. 9	1	熊野水町遺跡	1SD30土層断面（北から）	
	2	熊野水町遺跡	1SD30完掘状況（北から）	
Pla. 10	1	熊野水町遺跡	1SD35土層断面（北から）	
	2	熊野水町遺跡	1SD35完掘状況（北から）	
Pla. 11	1	熊野水町遺跡	出土遺物	
Pla. 12	1	熊野松ノ下遺跡	調査区遠景　空中写真（西から）	
	2	熊野松ノ下遺跡	調査区遠景　空中写真（上から）	
Pla. 13	1	熊野松ノ下遺跡	1SD1土層断面状況（西から）	
	2	熊野松ノ下遺跡	1SD2土層断面状況（西から）	
	3	熊野松ノ下遺跡	1SD3土層断面状況（東から）	
Pla. 14	1	熊野松ノ下遺跡	1SD4東ベルト土層断面状況（西から）	
	2	熊野松ノ下遺跡	1SD4中央ベルト土層断面状況（西から）	
Pla. 15	1	熊野松ノ下遺跡	1SD4西ベルト土層断面状況（西から）	
	2	熊野松ノ下遺跡	1SD5東ベルト土層断面状況（西から）	
Pla. 16	1	熊野松ノ下遺跡	1SD5中央ベルト土層断面状況（西から）	
	2	熊野松ノ下遺跡	1SD5西ベルト土層断面状況（東から）	
Pla. 17	1	熊野松ノ下遺跡	出土遺物	
Pla. 18	1	熊野五反田遺跡	全景（上から）	
	2	調査区より熊野集落を見る（北から）		
Pla. 19	1	熊野五反田遺跡	1SD01土層断面（西から）	
	2	熊野五反田遺跡	1SD01完掘状況（西から）	

Pla. 20	1	熊野五反田遺跡　1SX05土層断面（西から）
	2	熊野五反田遺跡　1SX05完掘状況（東から）
Pla. 21	1	熊野五反田遺跡　1SD02完掘状況（北から）
	2	熊野五反田遺跡　1SK03完掘状況（南西から）
Pla. 22	1	熊野五反田遺跡　1SX04完掘状況（南から）
Pla. 23	1	熊野五反田遺跡　出土遺物
Pla. 24	1	熊野宮ノ後遺跡遠景　空中写真（東から）
	2	熊野宮ノ後遺跡　調査区遠景　空中写真（東から）
Pla. 25	1	熊野宮ノ後遺跡　A調査区全景　空中写真（真上から）
	2	熊野宮ノ後遺跡　B調査区東側　空中写真（真上から）
	3	熊野宮ノ後遺跡　B調査区西側およびC調査区全景　空中写真（真上から）
Pla. 26	1	熊野宮ノ後遺跡　表土除去作業状況（東から）
	2	熊野宮ノ後遺跡　A調査区：冠水状況（西から）
Pla. 27	1	熊野宮ノ後遺跡　B調査区：作業状況（南から）
	2	熊野宮ノ後遺跡　A調査区：1SD30土層断面状況（北から）
Pla. 28	1	熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SD30土層断面状況（北から）
	2	熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SD04土層断面状況（北から）
Pla. 29	1	熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SD08・09土層断面状況（北から）
	2	熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SD10土層断面状況（北から）
Pla. 30	1	熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SX07東壁土層断面状況（西から）
	2	熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SX07北壁土層断面状況（南から）
Pla. 31	1	熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SK02土層断面状況（南西から）
	2	熊野宮ノ後遺跡　B調査区：不明痕跡①
Pla. 32	1	熊野宮ノ後遺跡　B調査区：不明痕跡②
	2	熊野宮ノ後遺跡　B調査区：不明痕跡③
Pla. 33	1	熊野宮ノ後遺跡　出土遺物①
Pla. 34	1	熊野宮ノ後遺跡　出土遺物②
Pla. 35	1	熊野宮ノ後遺跡　出土遺物③
Pla. 36	1	熊野宮ノ後遺跡　出土遺物④
Pla. 37	1	熊野宮ノ後遺跡　出土遺物⑤
Pla. 38	1	藏数島崎田遺跡　全景（上から）
	2	調査区より藏数集落を見る（西から）
Pla. 39	1	藏数島崎田遺跡　調査区南側足跡群（上から）
	2	藏数島崎田遺跡　1SX10完掘状況（上から）
Pla. 40	1	藏数島崎田遺跡　1SX10土層断面①（東から）
	2	藏数島崎田遺跡　1SX10土層断面②（東から）
Pla. 41	1	藏数島崎田遺跡　1SX10土層断面③（東から）
	2	藏数島崎田遺跡　1SX10土層断面④（東から）
Pla. 42	1	藏数島崎田遺跡　1SK01土層断面（東から）
	2	藏数島崎田遺跡　1SK01完掘状況（南から）
Pla. 43	1	藏数島崎田遺跡　1SK02土層断面（東から）
	2	藏数島崎田遺跡　1SK02完掘状況（北から）
Pla. 44	1	藏数島崎田遺跡　1SK11東側土層断面（北から）
	2	藏数島崎田遺跡　1SK11南側土層断面（西から）
Pla. 45	1	藏数島崎田遺跡　1SK11西側土層断面（南から）

	2	蔵数島崎田遺跡	1SK11北側土層断面（東から）
Pla. 46	1	蔵数島崎田遺跡	1SK05東側土層断面（南から）
	2	蔵数島崎田遺跡	1SK05南側土層断面（東から）
Pla. 47	1	蔵数島崎田遺跡	1SK05西側土層断面（北から）
	2	蔵数島崎田遺跡	1SK05北側土層断面（西から）
Pla. 48	1	蔵数島崎田遺跡	1SK05完掘状況（北から）
	2	蔵数島崎田遺跡	1SD06完掘状況（北から）
Pla. 49	1	蔵数島崎田遺跡	出土遺物

第１章　調査経過と組織

１．調査に至る経過

筑後北部地区遺跡群は福岡県筑後市大字熊野・蔵数に所在する。ここは筑後市北西部、標高５～10ｍほどの平野部にあたり、米麦を中心とした二毛作が行なわれる豊かな穀倉地帯である。

平成14年８月19日、この地域を対象とし、筑後川水系農地開発事務所を事業主体とする筑後北部土地改良区（以後「甲」とする）が立ち上がった。同年10月28日、筑後市教育委員会社会教育課文化係（現文化スポーツ係、以後「乙」とする）に対し、「甲」より該当地域に対しての埋蔵文化財の確認依頼がなされた。両者は協議を行い、平成14年度及び15年度の工事対象地域の一部について、工事により破壊が予想される地点について確認調査を行うこととなった。期間は平成14年11月１日より同15日までである。この結果中・近世を中心とした暗黒土の包含層を確認したが、明確な遺構は存在していなかった。この結果を受け、「乙」は対象地区での埋蔵文化財の発掘調査は必要ないとの返答を「甲」に行った。

平成15年10月９日、「甲」より「乙」は対し、平成15年度予定工区の未確認地域と平成16年度工事対象地域に対し、埋蔵文化財の確認依頼がなされた。「乙」は同10月23日より12月１日にかけ対象地域において確認調査を行い、結果中世を中心とした遺跡の存在が認められたことを「甲」に伝えた。両者は協議を行い、平成16年度に確認された５遺跡の発掘調査を行うこととなった。費用負担は８割を筑後川水系農地開発事務所、残り２割を市と地元負担で行うこととなった。調査対象面積は3,120㎡、期間は平成16年４月９日から同７月31日までとした。

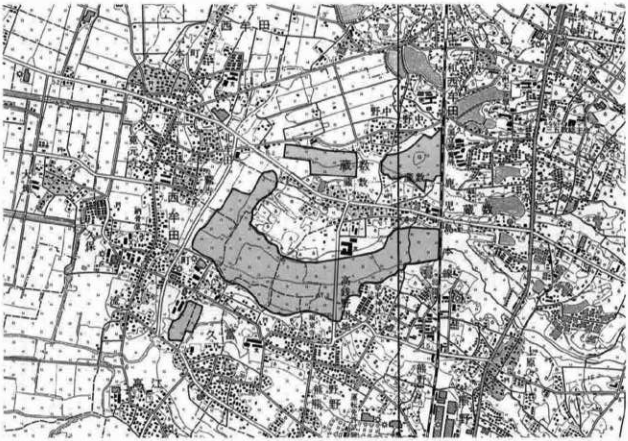


Fig. 1　筑後北部地区遺跡群　位置図（Ｓ＝1/25,000）

2．調査組織

北部地区遺跡群に関する調査組織は以下の通りである。

（1）確認調査体制（平成14～15年度）

調査主体	筑後市教育委員会		
教育長	牟田口和良（～H15.9.30）	城戸　一男（H15.10.1～）	
教育部長	下川　雅晴（～H15.3.31）	蒜原　修（H15.4.1～）	
社会教育課長	松永盛四郎		
社会教育係長	成清　平和		
文化財専門職	永見　秀徳	小林　勇作（H15年度担当）	上村　英士（H14年度担当）
文化財学芸員	柴田　剛	立石　真二	

（2）発掘調査・整理作業体制（平成16年度）

調査主体	筑後市教育委員会		
教育長	城戸　一男		
教育部長	蒜原　修		
社会教育課長	田中　倣一		
文化係長	成清　平和		
文化財専門職	永見　秀徳	小林　勇作（発掘調査担当）	上村　英士
文化財学芸員	立石　真二（発掘調査担当）	阿比留士朗	

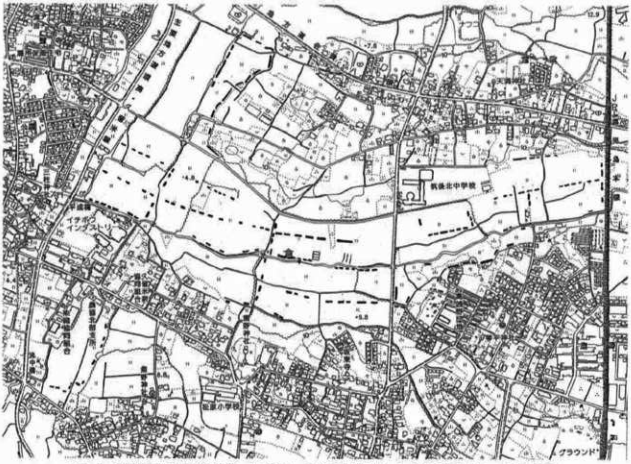


Fig. 2　筑後北部地区遺跡群　平成14・15年度試掘トレンチ位置図（S＝1/12,000）

調査作業	石橋香代美	井上むつ子	今山三咲子	植田　勝子	内野　康隆	
（五十音順）	江崎　米廣	江崎トシ子	奥村　太郎	加藤ちえ子	加藤　礼子	
	川添　幸子	古賀　明美	古賀三ツ保	下川　義文	城崎マスヨ	
	角　聖子	田島　好江	田島ヤス子	辻　名草	辻　勝	
	富永八重子	富安　英子	永井鹿三郎	中村　富男	中村　三男	
	馬場千鶴子	馬場　宏	原　清隆	深町　順子	深町　泰代	
	古江　薫	松尾喜代美	満川香代子	渡辺　茂喜	渡辺　泰子	
整理補助員	仲　文恵	平塚あけみ				
整理作業	石崎　玲子（12月1日～2月28日）			佐々木寿代	野口　晴香	
	野間口靖子（～9月30日）			横井　理絵		

3．調査の経過

今回の調査は、東側から西側へ向かう形で進められた。4月からは熊野水町遺跡（担当：立石）、熊野松ノ下遺跡（担当：小林）で調査を始めたが、時期外れの長雨により思うように調査が進まない状況であった。同遺跡は5月27日に航空測量を行い、調査を終了した。6月からは熊野宮ノ後遺跡（担当：小林）、熊野五反田遺跡（担当：立石）の調査が始められた。この間は梅雨ということもあり、倉目川南岸に位置する熊野宮ノ後遺跡では度々水没する状況であった。面積の小さい熊野五反田遺跡は7月16日に発掘を終了し、8月18日まで蔵数島崎田遺跡（担当：立石）の調査に取りかかった。熊野宮ノ後遺跡・熊野五反田遺跡・蔵数島崎田遺跡は8月20日に航空測量を行い、9月3日までに現場での全工程を終了した。

以下に調査の抄録を記す。

H16.	4．9	熊野水町遺跡、重機搬入
	4．17	熊野松ノ下遺跡、重機搬入
	4．21	熊野水町遺跡、発掘調査開始
	4．23	熊野水町遺跡、1SD10（水路・現代）調査開始
	4．26	熊野松ノ下遺跡、発掘調査開始
	4．30	熊野水町遺跡、1SD05より竹製暗渠（現代）確認
	5．25	熊野水町遺跡・熊野松ノ下遺跡、気球写真撮影
	5．27	熊野水町遺跡・熊野松ノ下遺跡、航空測量
	5．30	熊野水町遺跡・熊野松ノ下遺跡、埋め戻し終了
	6．8	熊野五反田遺跡、重機搬入
	6．10	熊野宮ノ後遺跡、重機搬入
	6．14	熊野五反田遺跡、発掘調査開始
	7．2	熊野宮ノ後遺跡、発掘調査開始
	7．7	蔵数島崎田遺跡、重機搬入
	7．15	熊野五反田遺跡、気球写真撮影
	7．26	蔵数島崎田遺跡、発掘調査開始
	7．27	蔵数島崎田遺跡、S-10（大溝）調査開始
	8．12	熊野宮ノ後遺跡・蔵数島崎田遺跡、気球写真撮影
		蔵数島崎田遺跡、S-12（野井戸）確認
	8．20	熊野五反田遺跡・熊野宮ノ後遺跡・蔵数島崎田遺跡、航空測量
	8．25	熊野五反田遺跡、埋め戻し終了
	8．26	蔵数島崎田遺跡、埋め戻し終了
	9．3	熊野宮ノ後遺跡、埋め戻し終了

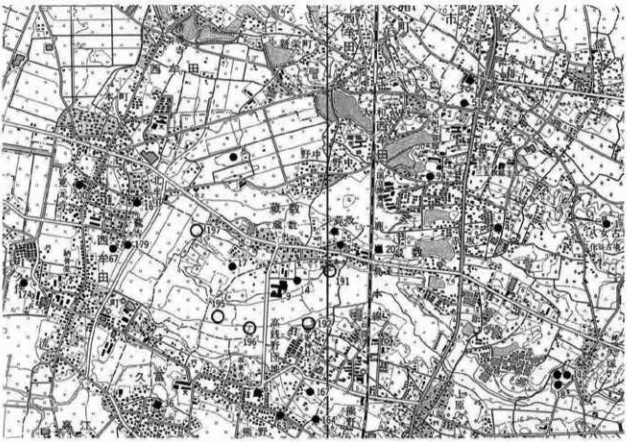
なお、発掘調査および報告書作成に際し、筑後川水系農地開発事務所、徳光重機、各関係機関に多大な御協力を頂いた。また、下記の方々・各機関からは調査・整理作業に際し、貴重な御教示・御指導を頂いた。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。

小川　泰樹、齋部　麻矢（福岡県教育庁）、山村　信榮、井上　信正（太宰府市教育委員会）、堤　雅樹、花田　将明（福岡県立八女工業高等学校教諭）

第２章　位置と環境

１．地理的環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市の北部には倉目川、中央部には花宗川や山ノ井川、南部には一級河川の矢部川があり、それぞれ西流している。北部地域は耳納山地から派生した八女丘陵が西へと延び、潅漑用の溜池が点在している。一方、低位扇状地である東部や低地である南西部には各河川より派生した農業用水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部を中心とする丘陵地帯では果樹園や茶畑、東部や南西部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は市の中央部、国道に沿って形成されている。



1	石人山古墳	17	藏数坂Ⅱ遺跡	63	熊野屋敷遺跡２次	191	熊野水町遺跡
4	境王寺古墳	18	前津塚山遺跡	91	藏数長原山遺跡	192	熊野松ノ下遺跡
5	藏数東野屋敷遺跡１次	36	久富島居遺跡	164	熊野塚横遺跡	195	熊野五反田遺跡
8	田形遺跡	42	藏数赤坂遺跡	167	熊野山ノ前遺跡	196	熊野宮ノ後遺跡
9	藏数森ノ木遺跡１次	59	西牟田清地浦遺跡	173	西牟田小次郎丸遺跡	197	藏数島崎田遺跡
11	欠塚古墳	61	熊野屋敷遺跡１次	174	西牟田上京手遺跡	200	西牟田高元寺遺跡
14	藏数森ノ木遺跡２次	62	藏数東野屋敷遺跡２次	179	西牟田鷲寺東遺跡	202	藏数保古手遺跡
16	西牟田鷲寺遺跡						

Fig. 3　筑後北部地区遺跡群　周辺遺跡位置図（S＝1/25,000）

＊上記遺跡の番号は当市が現用している発掘調査番号による

2．遺跡周辺の地理的環境

筑後北部地区遺跡群は筑後市の北西部に位置する。倉目川・金屋川・境川が西流し、筑後川水系山ノ井川へ合流する。地勢的には八女丘陵から派生した藏数・熊野の微高地（共に約15m以下）に挟まれた谷部からこれを出た平野部にあたり、標高は約5～10m、大部分が水稲と麦の二毛作が行われる水田地帯である。

3．歴史的環境

北に位置する藏数丘陵は、筑後市内でも先史時代遺跡の集中する所として知られている。藏数坂口遺跡（017）からは旧石器（角錐状石器）が出土している。この他、弥生時代中期前半の甕棺を出土した藏数東野屋敷遺跡（005）、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落遺跡である藏数森ノ木遺跡（009）・田佛遺跡（008）、出土した遺物の中に百済系の馬具があるのではと指摘されはじめた5世紀中頃の塚臣寺古墳（円墳、消滅、004）などが代表的なものである。

南の熊野丘陵には、古代より広川荘の支配を行ってきた坂東寺熊野神社がある。この熊野神社は地方へ分霊されたものとしては最古のものといわれ、かつて寺域は現在の熊野集落とほぼ同じと思われる。広川荘は中世には水田荘（筑後市西南部）との境界争いなどを起したが、戦国期には武士の横領により崩壊した。現在熊野神社に伝わる「熊野神社鬼の修生会」（1月5日）は、「久留米大善寺の鬼夜」（国指定無形民俗文化財）よりも古い様相を残すとして、県指定無形民俗文化財に指定されている。

西側の大字西牟田には鎌倉初期に藤原氏の流れをくむ宇津宮氏が西牟田郷の地頭職として下向、以降西牟田氏を名乗り在地領主化する。西牟田氏は西牟田城（字流）を築き城下町（字町）を形成、霊鷲寺（字鷲寺）や寛元寺（字寛元寺）などを建立した。戦国時代には「筑後15将」の1人に数えられ、三潴郡東部（筑後市、久留米市三潴町・城島町、三潴郡大木町）に勢力を誇ったが、戦国時代後期の豊後大友氏・肥前龍造寺氏の争乱により衰退、以降龍造寺氏・鍋島氏の家臣となった。西牟田氏の活躍した地域には彼らにまつわる城館跡、神社仏閣が多く残されている。

近世には領主の交代を幾度か経て有馬氏の支配下となった。2代忠頼は西牟田町の復興、山ノ井川の改修などを行い、4代頼元は西牟田霊鷲寺を松崎に移転。9代頼徳は藏数の赤坂焼に御庭焼の朝妻姥の焼成を行わせ、熊野坂東寺より石造物を持ち出している。熊野ではこの頃久留米藩士師司田中氏により坂東寺焼が行われていた。坂東寺焼は風炉を得意としたが、現在その業は絶えてしまっている。

【注】

1　文章中の遺跡名の後ろにある番号は、筑後市で使用している発掘調査番号である。（筑後市文化財調査報告書第34集を参照）

【参考文献】

川述昭人	『端王寺古墳』	筑後市教育委員会	1984
川述昭人・篇	『前津中の玉遺跡』	筑後市教育委員会	1987
川述昭人	『田佛遺跡』	筑後市教育委員会	1988
佐々木隆彦・篇	『藏数遺跡群』	筑後市教育委員会	1990
筑後市史編さん委員会・篇	『筑後市史』	筑後市史編さん委員会	1995

第3章　調査成果

1．熊野水町遺跡（1次調査）

1）はじめに

熊野水町遺跡は、筑後市大字熊野453外に所在する。八女丘陵より西に突き出た孤数低丘陵の南縁に位置し、西の丘陵上には藏数森ノ木遺跡、南側には倉目川が西流し、その先には熊野松ノ下遺跡、熊野の低丘陵地帯が広がる。標高10m以下の谷地形に立地する。明治15年（1882）字松ノ下より分離した。

試掘調査では、灰黄色の地山に挟まれる形で暗灰色の遺構が中世の遺物と共に確認されたため、中世の水田跡の可能性があるとして発掘調査を行うこととなった。調査対象面積は648m²である。調査は平成16年4月9日より始められ、同年5月30日にこれを終了した。

2）A区の遺構（Fig. 5、Pla. 1-2）

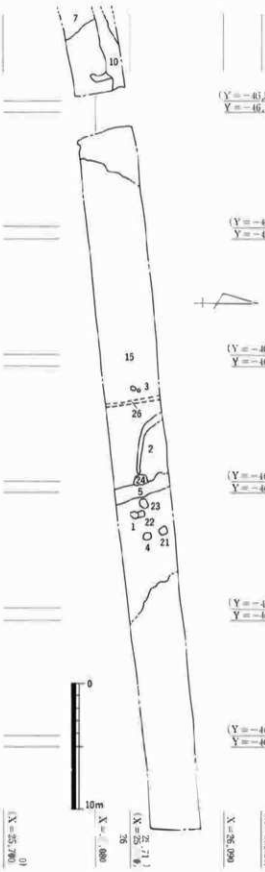
対象地が道路および水路予定地で調査区が細長いため、便宜上東からA・B・C区とする。A区は調査前は丘陵南側の裾野に立地する水田で、表土を0.1mほど掘り下げたところで平坦な遺構面となる。遺構としては土壙6基、溝3条、水田1枚を確認した。

土壙

1SK01（Fig. 6、Pla. 3～4-1）

A区中央部で確認された不定型土壙で、東側に1SK04、西側に1SD05が位置し、北側の1SK22を切る。長

Fig. 4　熊野水町遺跡　位置図　（S＝1/2.500）



※実数は境界測地系、（ ）は日本測地系

Fig. 5　A区遺構配置図　（S＝1/300）

軸約0.7m、短軸約0.5m、深さ約0.15m。主軸の傾きはN—9°—Eを測る。検出時に北寄りに黒色砂質土（1層）を確認したが、土層観察の結果柱穴にはならないと判断した。

この遺構からは土師器片を出土したが、実測しうるものではなかった。

1SK04 (Fig. 6、Pla. 4-2～5)

A区中央部、東寄りに検出された角丸長方形の土壙で、北側に1SK21、西側に1SK01・22が位置する。長軸約0.6m、短軸約0.5m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN—7°—Eを測る。検出時に中央部に黒色砂質土（1層）を確認し、土層観察時に扁平な河原石を確認した。しかしながら、1層と河原石との間には別の埋土も確認でき、河原石も遺構床面には位置していなかった。

この遺構からは土師器片を出土したが、実測しうるものではなかった。

1SK21 (Fig. 6)

A区中央部、東寄りに検出された不定形土壙で、南側に1SK04が位置する。長軸約0.8m、短軸約0.7m、深さ約0.1m。主軸の傾きはN—26°—Wを測る。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

1SK22 (Fig. 6)

A区中央部から検出された楕円形になると思われる土壙である。東側に1SK04、西側に1SD05、北側に1SK23が位置し、南側の1SK01に切られる。残存部での長軸約0.5m、短軸約0.4m、深さ約0.1m。主軸の傾きはN—70°—Wを測る。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

1SK23 (Fig. 6)

A区中央部から検出された不定型土壙で、東側に1SK22、西側に1SD05が位置する。長軸約0.7m、短軸約0.5m、深さ約0.05m。主軸の傾きはN—31°—Eを測る。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

1SK24 (Fig. 6)

A区中央部で検出された土壙で、西側に1SD02が位置し、東側を1SD05によって大きく切られる。残存部での長軸約1.0m、短軸約0.8m、深さ約0.3m。主

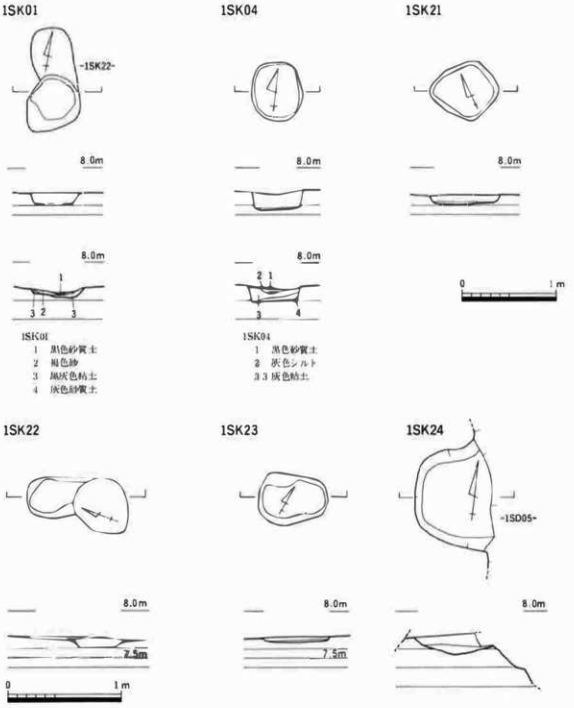


Fig. 6　A区　土壙　（S＝1/40）

軸の傾きはN—7°—Eを測る。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

溝状遺構

1SD02 (Fig. 7)

A区中央部西よりから検出され、東側に1SK24が位置する。北側から東に向かい弧状の平面プランを有し、約4.5mほどを検出した。断面形は皿状で、深さは0.1m以下と浅い。埋土は暗茶色土の単一層であり、

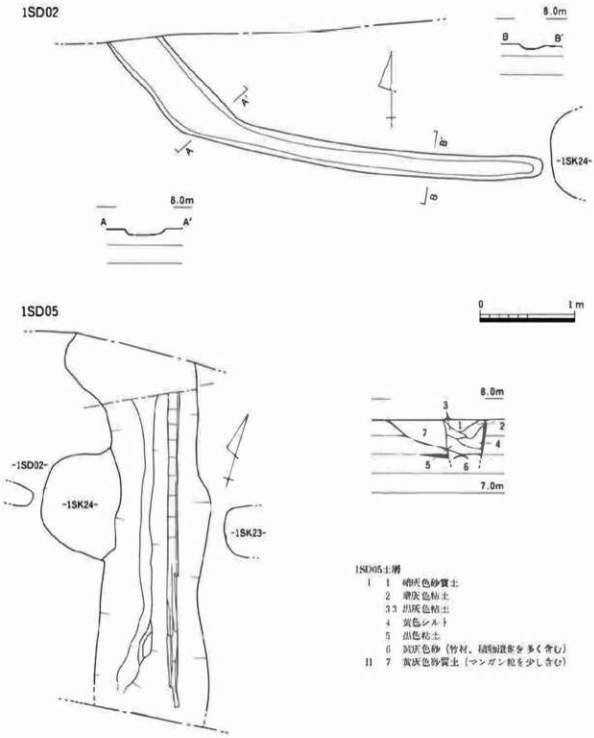
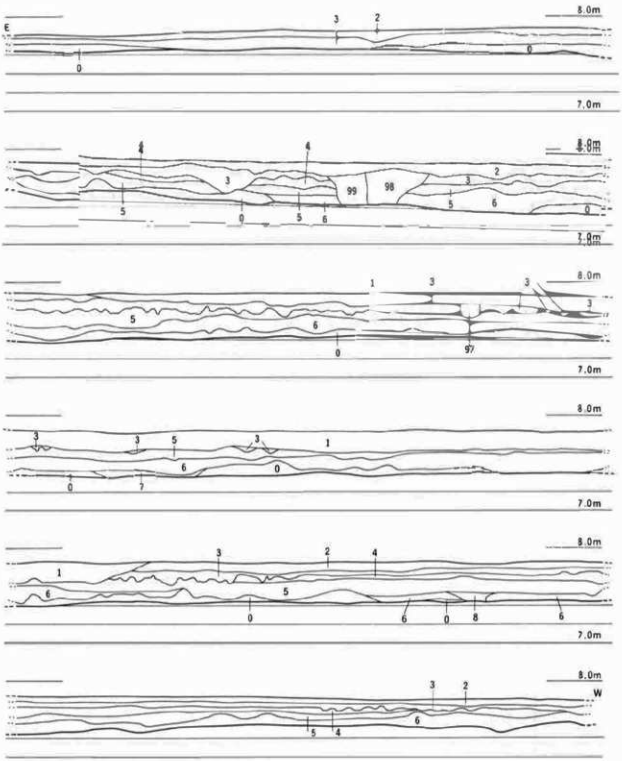


Fig. 7　A区　溝状遺構　（S＝1/40）

滞水などの痕跡は不明である。

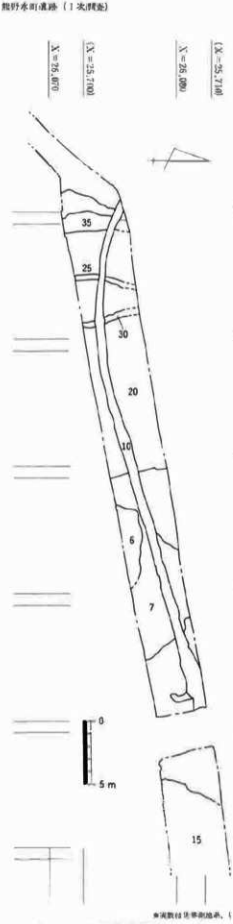
この遺構からは土師器片、瓦器片、磁器片を出土したが、図化しうるものではなかった。



1SX15土層

97	1SD26埋土	1	褐色土（トレンチ痕）	5	黒灰色シルト
98	1SD05西側埋土	2	黄灰色土（耕作土）	6	黄灰色砂
99	1SD05東側埋土（Fig.7参照）	3	灰色土（耕作土）	7	黒色シルト
00	黄白色粘質土（地山土）	4	灰色粘土	8	暗灰色シルト

Fig. 8　1SX15土層断面図　（S＝1/40）



※高数は世界測地系、（ ）は日本測地系

Fig. 9　B区遺構配置図　（S＝1/300）

1SD05 (Fig. 7、Pla. 6)

A区中央部から約3.8m分を検出した調査区を縦断する溝で、東側に1SK01・22・23が位置し、西側の1SK24を切る。幅約1.0m、深さ約0.5m。主軸の傾きはN—17°—Wを測る。断面形は西側は浅い擂鉢状、東側は深い逆台形となる。東側は竹製の暗渠を入れるために掘り直されたもので、人為的な埋没状況が確認された。出土した竹製暗渠は検出時点では良好な形を残しており、この遺構が新しいものであることを物語っている。西側は黄灰色砂質土による単一埋土で、マンガン粒を確認した他は滞水痕跡などは認められなかった。

この遺構からは土師器片、青磁片、染付碗、陶器鉢が出土している（Fig. 14-1・2）。

1SD26 (Fig. 5)

A区西側から約4.0m分を検出した調査区を縦断する溝で、幅約0.2m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN—9°—Wを測る。断面形は底面は凹状で壁面はほぼ垂直となる。この溝は塩化ビニル製の管による暗渠であることが確認できたため、掘り下げなどは行わなかった。

水田遺構

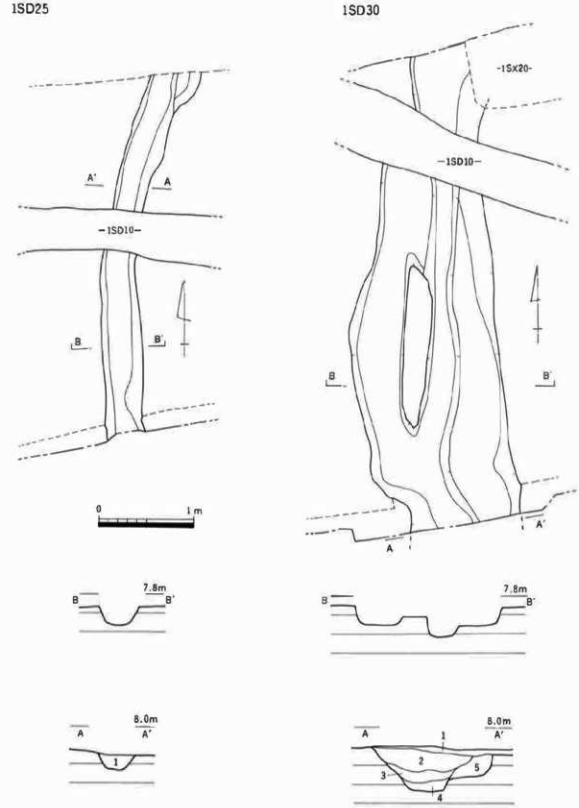
1SX15 (Fig. 5・8)

A区西側～中央部にかけて幅約36.5mが検出された。A区の他の遺構は全てこの1SX15の上に展開する。平面において畦畔などは確認できなかった。土層観察の結果、2層と3層の分層面はほぼ平坦な水平堆積であるのに対し、3層とそれ以下の層との分層面には多くの凹凸が見られる。また、1SD05が掘り込まれているのも3層面である。この事から2層は現況水田に伴う埋土であり、3層は1段階古い水田に伴う埋土と判断する。3層の凹凸は人馬による耕作痕跡であろうか。また、3層以下の観察でも畦畔の痕跡は認められなかった。

この遺構からは磁器の小片と陶器甕の頸部が出土している（Fig. 14-3）。

3）B区の遺構 (Fig. 9、Pla. 2-1)

B区はA区の西側に位置する。調査前は丘陵南側の裾野に立地する水田で、A区よりも一段高いのだが、常に湿気が抜けない状態であった。ここは表土を0.2mほど掘り下げたところで平坦な遺構面となるが、遺構面はA区より約0.1mは高い状況であっ

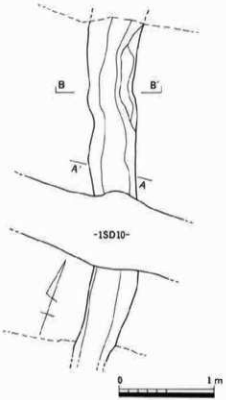


1SD25
1 白色砂

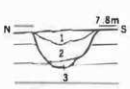
1SD30
1 暗灰色砂質土（マンガン粒多）
2 灰色砂
3 暗灰色砂
4 暗灰色砂（砂粒粗）
5 灰色砂（2層より明）

Fig. 10　1SD25・30　（S＝1/40）

1SD35



1SD35
1　白色砂（マンガン粒少ない）
2　淡白色砂（マンガン粒少ない）
3　暗灰色粘土



1SD10
1　灰色砂質土（マンガン粒多い）
2　灰色砂質土
3　灰色砂質土（しまりゆるい）

Fig. 11　1SD35・10（S＝1/40）

た。ここからは溝4条、溜り状遺構3基を確認した。

溝状遺構

1SD10（Fig. 9・11、Pla. 7）

B区を縦断するような形で検出された遺構で、西側では南側に張り出すような形をとり東側では直線に走る。B区に所在する遺構のほとんどを切り、検出長約42m、幅約0.8m、深さ約0.3m。東側直線部分での主軸の傾きはN—74°—Eを測る。埋土は締まっておらず、その西端は丘陵裾野の用水路に繋がると考えられる。この区画の湿気が多かったのは1SD10の埋土を通して水分がもたらされるためであった。断面形は逆台形となるが、床面は凹凸があり平坦ではない。

この遺構からは須恵器甕、須恵器壺、須恵器鉢、土師器甕、土師器片、五徳、青磁碗、青磁合子、青磁鉢、青磁片、白磁片、染付碗、プリント皿、プリント瓶、陶器瓶、陶器鉢、陶器碗、陶器湯呑、陶器擂鉢、陶器片、丸瓦などを出土した（Fig. 14-4～29）。

1SD25（Fig. 10、Pla. 8）

B区西側で検出された遺構で、西側に張り出すような形で弧状に走る。東側に1SD35、西側に1SD30が位置し、1SX20を切り、1SD10に切られる。検出長約5.0m、幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。断面形はU字状となり、白色砂による単一埋土である。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

1SD30（Fig. 10、Pla. 9）

B区西側で検出された遺構で、南北に縦走する。東側に1SD25が位置し、1SX20を切り、1SD10に切られる。検出長約5.0m、幅約1.6m。主軸はほぼ南北を通る。途中2条に分裂したり、合流しても段差を残しているなど複雑な造りをしているが、主要部分の断面形は逆台形状となる。埋土は全て砂が主体であり、東側の段差は掘り直しに伴うと判断される。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

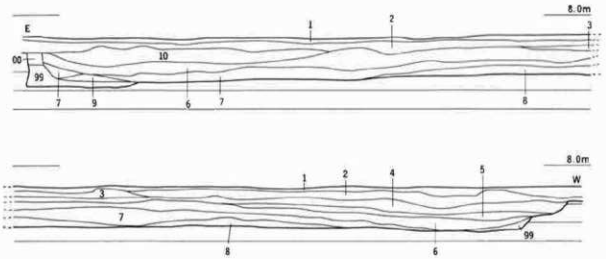
1SD35（Fig. 11、Pla. 10）

B区西側で検出された遺構で、西側に1SD25が位置し、1SX20を切り、1SD10に切られる。検出長約4.7m、幅約0.4m。主軸の傾きはN—19°—Wを測る。断面形は逆台形状となり、埋土は砂を主体とする。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

溜り状遺構

B区で多く確認された遺構である。所々の事情により全てトレンチ調査を行った。



1SX06・07

99 白黄色シルト（地山）	3 紫黒灰色粘土（耕作土）	7 暗黄灰色砂（1SX07、ラミナ堆積）
00 白茶色砂（地山）	4 黒色粘土（1SX06）	8 黄灰色砂（1SX07）
1 茶色土（耕作土）	5 黒色シルト（1SX06）	9 灰色粘土（1SX07）
2 明灰色粘土（耕作土）	6 黒色シルト（1SX07、ラミナ堆積）	10 黒色粘土（1SX07）

Fig. 12　1SX06・07土層断面　（S＝1/40）

1SX06（Fig. 9・12）

B区東側から検出された遺構である。深さは約0.1mと浅い。

この遺構からは須恵器甕を出土した（Fig. 15-30）。

1SX07（Fig. 9・12）

B区東側から検出された遺構で、1SD10、1SX06に切られる。深さは約0.4mを測り、下層ではラミナ状堆積が確認された。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

1SX20（Fig. 9・13）

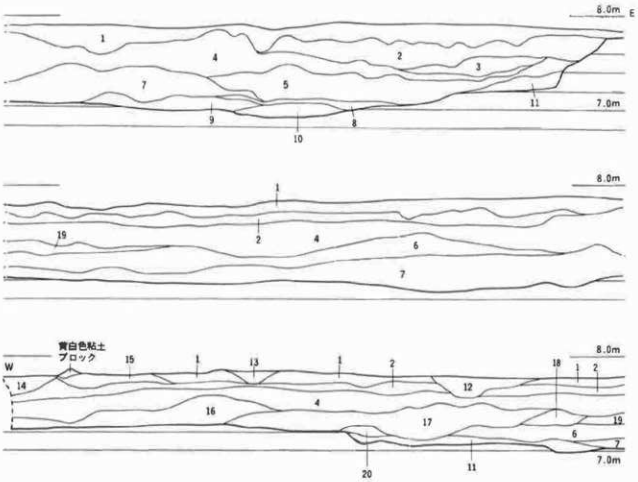
B区西側で検出され、全ての溝状遺構に切られている。試掘当初、水田ではとされた遺構である。土層観察からは溝状遺構が造られる以前に水平堆積をしている事がうかがわれるが、これが水田となる様子は認められなかった。また下位土層に見られるラミナは水平ではなく、若干の傾きを有するものであった。

この遺構からは土師器片、白磁片、磁器片が出土したが、埋化および時期の特定をしうるものではない。

4）C区（Pla. 2-2）

C区は1SX20・1SD30より西側を指す。この一帯は調査区北側を流れる用水路から染み出てくる水により、常に水浸しているような状況であった。また地元の方の話によると、この一帯は以前は池であったといい、調査前は葦が茂っている状態であった。検出時点ではここに大きな溜り状の埋土を確認しているが、所々の事情により発掘調査には至らなかった。

また、遺物の採集もなかった。



1SX20
1　白灰色結質土
2　黒灰色粘土
3　黒灰色粘土＋黄色砂
（ラミナ状堆積、砂和相）
4　暗灰色シルト
5　暗灰色シルト
（4層より明、ラミナ状堆積、砂粒1mm以下）
6　暗灰色シルト
（4層に同じ、ラミナ状堆積）
7　暗灰色砂（ラミナ状堆積）
8　暗灰色砂礫
9　暗灰色シルト（ラミナ状堆積）
10　暗灰色粘土
11　白黄色粘土（地山）
12　白灰色砂（1SD06埋土）
13　茶褐色土（1SD25埋土）
14　黒色砂（1SD06埋土）
15　黄白色粘土ブロック堆積層
16　白灰色砂（ラミナ状堆積）
17　灰色砂（ラミナ状堆積、砂粒1mm以下）
18　黒色砂（ラミナ状堆積）
19　黒色砂＋灰色砂（ラミナ状堆積）
20　黒色粘土

Fig. 13　1SX20土層断面　（S＝1/40）

5）出土遺物（Pla. 11）

出土遺物には須恵器、土師器、陶器、磁器、瓦、石鏃があるが、全体に新しいものが中心である。

1SD05出土遺物（Fig. 14、Pla. 11）

1は染付の碗である。白灰色の素地に明るい青色で筆書きの文様を描き、透明釉を施す。内底面には重ね焼き痕が見られる。

2は陶器の鉢の口縁部である。灰色の素地に茶色味の強い鉄釉を施す。

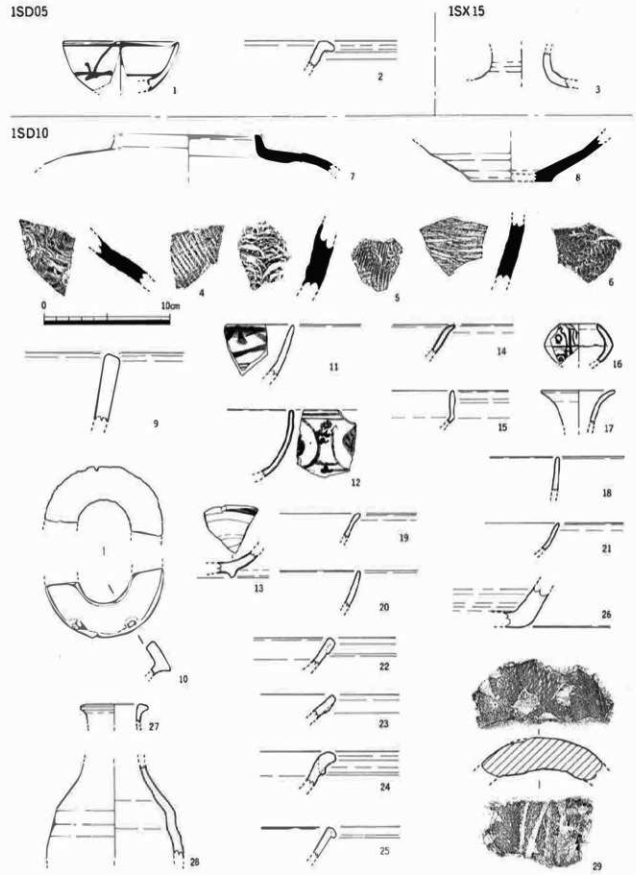


Fig. 14　出土遺物(1)　（S＝1/3）

1SX06

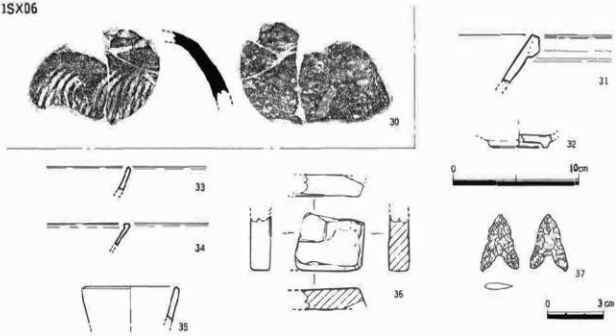


Fig. 15　出土遺物(2)　（S＝1/3・1/2）

1SX15出土遺物（Fig. 14、Pla. 11）

3は陶器の瓶の口縁部である。灰色の素地に暗黄緑色の釉を施している。釉は内面にも見られるが遺存状況は悪く、意図して施釉されたものかは不明である。

1SD10出土遺物（Fig. 14、Pla. 11）

4～6は須恵器の甕の破片である。いずれにも内外面にタタキが見られるが、6は遺元不良で外面の磨滅が激しい。

7は須恵器の短頸壺である。遺元は不良で、内面には工具痕跡が見られる。

8は須恵器の鉢である。

9は土師器の甕の口縁部である。

10は土師器の五徳である。脚の付き方から楕円形で両端に脚を有する可能性もある。

11～13は染付の碗である。11は口禿げで、内面に呉須を用いた粗い筆書きの文様を施す。12は外面に呉須による文様が施されているが、全体に施された透明釉は白い点のような汚れが目立つ。13は内底面および高台底面の釉を掻き取っている。

14は青磁碗の口縁である。文様は見られず、灰色の素地に明青色の透明釉を施す。

15は青磁の鉢と思われる口縁部小片である。灰色の素地に暗黄緑色の透明釉を施すが、外面上部は緑色味が強い。

16は青磁の合子である。白灰色の素地に文様を陽刻した後、暗青緑色の透明釉を施す。

17は白磁の瓶の口縁部である。

18は陶器の湯飲である。灰色の素地に暗黄茶色を下地とした白色の釉を施す。

19～21は陶器の碗である。19には表面に釉が施されていない。

22～26は陶器の鉢である。22は無釉、その他は茶色系の釉が施されている。

27・28は陶器の瓶である。28は上部に暗青色釉、下部は白色粘土で文様を描いた後暗黄緑色釉を施している。

29は丸瓦で、内面は布目、外面には縄目が見られる。

1SX06出土遺物（Fig. 15、Pla. 11）

30は須恵器の壺の肩部破片である。

表採遺物（Fig. 15）

31は土鍋の口縁部である。

32は土師器の椀の底部で、内底面に重ね焼きによる粘土痕跡が見られる。

33は白磁碗の口縁である。文様はなく、白灰色の素地に透明釉を施している。

34は磁器の碗口縁部である。内側に粘土貼り付けによるつぶ出しが見られる。

35は陶器の碗である。口縁部は無釉で、黄白色の素地に透明釉を施す。

36は現代瓦の破片である。

37は黒曜石製の石鏃である。弥生時代のものか。

6）小結

前述したように、今回の調査は一目瞭に行われたとは言えない状況である。

A区については、出土遺物少なく結論を出し難い状況であるが、検出面が表土からあまり下がらない事や検出された水田（1SX15）が1面のみであること、古い時期と思われる遺物が見られないことなどいから、近現代の遺構と判断する。

B区については遺物を多く出土した1SD10が、ほぼ現状の地割りと大きく変わらない点と出土遺物に筑後の赤坂焼に似た破片やプリント柄の磁器が見られた事から、これを近代以降のものと判断する。調査区を縦走する1SD25・30・35からは出土遺物が見られず、1SX20からは瓦器の小片と薄い磁器の破片を出土しているが、出土遺物の総数が5点と少なく、これらのものだけでは時代の特定は出来ない。

本調査区は南側の熊野集落より北側の蔵数集落に近く、耕作者も蔵数居住の方が多い。蔵数はもともと熊野集落の西側に所在したといわれ、この辺りには「元蔵数」という地名が残っている。元蔵数には坂東熊野神社の末寺であった「宗西寺」が所在したといわれ現在その跡には「元蔵数の観音堂」が残されている。蔵数に集落が移転したのは、蔵数天満神社が開かれた元禄13年（1700）前後、その要因として北部の開発と溜め池の設置により農業基盤が整備されたためとされる。これを考慮すれば比較的新しい時期の遺物が多く見られることは自然な事と解釈できる。

しかし、中世頃の須恵器も散在していることから、熊野神社との関係も検討しなければならない。1SX06はトレンチ調査で、この時代の遺物1点のみの出土である。遺物の磨滅具合から流れ込みや開発による土の移動なども考えられるが、今回の調査では結論は出せなかった。この点は周辺調査の進展に期待する所である。

【参考文献】

佐々木扇亭	『蔵数遺跡群　―森ノ木遺跡の調査―』	1980	筑後市教育委員会
筑後市史編さん委員会・編	『筑後市史』	1998	筑後市
永見　秀徳	『筑後市内遺跡群　Ⅰ』	1999	筑後市教育委員会

Tab. 1　熊野水町遺跡　遺構一覧

図No.	写真番号	遺構番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸	平面形状	断面形状	出土遺物	時期	備考
6	1	1SB02	0.7	0.5	0.15	N-7°-E	不定型	皿状	土師器片		SX15→SB02→SE27
7	2	1SB02	(1.3)	(0.5→0.3)	0.1		楕円	皿状	土師器片、瓦器片、磁器片		SX15→
	3	1SB02	0.3	0.3	0.15		円形		円形		SX15→
8	4	1SB04	0.6	0.5	0.2	N-7°-E	角丸長方形	逆台形	土師器片		SX15→
7	5	1SB05	(1.5)	1.0	0.5	N-17°-W		逆台形→凹凸状	土師器片、青磁片、須恵器、陶器類	現代	SX25、SK23→
12	6	1SK06	——	——	——	——	——	——	須恵器類		SX67→
12	7	1SX07	——	——	——	——	——	——	NON		→SB06、SE05
		ポット列第									
11	10	1SP40	(42.0)	0.8	0.3	N-74°-E	弧状	逆台形	青磁碗、土師器、陶磁器、瓦	近現代	SX07、70、SB25、36、35→
		11～14列番									
8	15	1SX15	——	——	——	——	——	——	陶磁器片	現代	SX04、7、12、23、31、SB02、25、26→
		16～19列番									
13	20	1SX20	——	——	——	——	——	——	土師器片、白磁片、磁器片		→SB04、25、30、35
6	21	1SK21	0.8	0.7	0.1	N-26°-W	不定型	逆台形	NON		SX15→
6	22	1SK22	(1.5)	(0.4)	0.1	N-7°-W	楕円形	皿状	NON		SX25→SK22→SK40
6	23	1SK23	0.7	0.5	0.05	南-北-E	不定型	皿状	NON		SX15→
6	24	1SK24	(1.0)	(0.8)	0.3	N-7°-E	円角長方形	皿状	NON		SX05→SK24→SD25
19	25	1SK25	(3.0)	0.6	0.2		弧状	凹平状	NON		SX40→SK26→SE10
7	26	1SK26	(4.0)	0.2	0.2	N-9°-W			〈石臼〉	現代	SX15→
		27～29列番									
10	30	1SE30	(5.0)	1.0	——	長辺		不定型	NON		SX20→SL30→SE40
		31～34列番									
11	35	1SE35	(4.5)	0.4	0.25	N-10°-W		逆台形	NON		SX20→SK35→SD36

Tab. 2　熊野水町遺跡　出土土器一覧

図No.	写真No.	遺構	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	色調(外面)	特徴	時代	備考
14	1	1SD05	須恵	鉢				口縁部片	暗灰色(暗灰色)	黒色微粒子多い。	古代	内面施文（ロクロ？）
14	2	1SD05	陶器	鉢				口縁部小片	明褐色(明褐色)	1 mm大の砂粒多い。	古代	
14	3	1SK05	陶器	鉢				胴部小片	明褐色(明褐色)	精良。	古代	
14	4	1SD10	須恵器	壺				胴部小片	灰褐色	1 mm大の白色砂粒、白英を含む。	中世	外面格子タタキ、内面押圧痕
14	5	1SD10	須恵器	壺				胴部小片	暗褐色(明褐色)	1～2 mm大の白色砂粒、白英を含む。	中世	外面平行タタキ、内面押圧痕
14	6	1SD10	須恵器	壺				胴部小片	褐灰色(明褐色)	1～2 mm大の白色砂粒、白色砂粒、白英を含む。	不明	内面平行タタキ
14	7	1SD10	須恵器	壺	底部			口縁部片	黒褐色(暗褐色)	1～2 mm大の白色砂粒、白英、角閃石を含む。	中世	内面横撫調整痕、工具痕
14	8	1SD10	須恵器	鉢		(8.8)		底部片	明褐色	1 mm大の白色砂粒、白英を含む。	中世	
14	9	1SD10	土師器	壺				口縁部小片	赤褐色	1～2 mm大の白色砂粒、白英、角閃石、雲母を含む。	中世	内面工具痕
14	10	1SD13	土師器	台盤				口縁部小片	暗褐色～明赤褐色	精良。	古代	器形は不明瞭。
14	11	1SD20	瓦器	椀				口縁部小片	白灰色(暗褐色)	精良。	古代	口縁、内面施文（ヨコ）
14	12	1SD40	瓦器	椀				口縁部小片	暗褐色(明褐色)	精良。	古代	口縁部直下に凹線、外面施文（横ヘラ）
14	13	1SD40	瓦器	椀				底部小片	白色(暗褐色)	精良。	古代	内面施文（平行）、外底部ヘラ切り、底部施文
14	14	1SD40	瓦器	椀				口縁部小片	褐色(明褐色)	微細な砂粒多く含む。	古代	施文
14	15	1SD40	瓦器	鍋？				口縁部小片	白色(暗褐色)	精良。	古代	
14	16	1SD40	瓦器	皿？	(15.0)			口縁部小片	白色(暗褐色)	黒色微粒子を含む。	古代	縁帯、横撫内面施文
14	17	1SD40	白磁	椀	(5.8)			口縁部小片	白色(白色)	黒色微粒子を含む。	古代	
14	18	1SD40	陶器	鉢				口縁部小片	褐色(暗褐色)	精良。	古代	
14	19	1SD40	陶器	鉢				口縁部小片	褐灰色	精良。	中～古代	沖縄？ 2号甕に類似中世？
14	20	1SD04	陶器	鉢				口縁部小片	明赤褐色(明赤褐色)	精良。	古代	
14	21	1SD09	陶器	鉢				口縁部小片	褐灰色(暗褐色)	精良。	古代	
14	22	1SD40	陶器	鉢				口縁部小片	暗赤褐色	精良。	古代	瓦器
14	23	1SD40	陶器	鉢				口縁部小片	褐灰色(暗褐色)	精良。	古代	
14	24	1SD40	陶器	鉢				口縁部小片	暗赤褐色(暗褐色)	口縁部下を凹凸ハケ目。	古代	
14	25	1SD40	陶器	鉢				口縁部小片	褐灰色(暗褐色)	精良。	古代	
14	26	1SD40	陶器	鉢				口縁部小片	灰色(暗褐色)	精良。	古代	
14	27	1SD40	陶器	甕				口縁部小片	灰色(暗褐色)	精良。	古代	
14	28	1SD40	陶器	甕				胴部片	灰色(暗褐色)	1 mm大の砂粒を含む。	古代	縦ハケ目で調整
14	29	1SD40	瓦	丸瓦					明灰白色	精良。	古代	内面ナデ、外面縦ヘラ削り
15	30	1SD40	須恵器	壺				胴部小片	暗褐色(暗褐色)	1～3 mm大の砂粒を含む。	不明	格子目タタキ
15	31	熊野神遺跡	土師器	鍋				口縁部小片	暗褐色(暗褐色)	1～3 mm大の白色砂粒、白英、角閃石を含む。	古代	
15	32	熊野神遺跡	土師器	鍋？		(4.2)		底部片	明白色	1 mm大の白色砂粒、白英、角閃石を含む。	古代	
15	33	熊野神遺跡	瓦器	椀				口縁部小片	白色(明赤褐色)	精良。	古代	施文
15	34	熊野神遺跡	瓦器	椀				口縁部小片	白色(暗赤褐色)	精良。	古代	第A類
15	35	熊野神遺跡	陶器	鉢				口縁部小片	褐赤色(白色)	精良。	古代	第A類
15	36	熊野神遺跡	瓦	平瓦					明灰色	精良。	古代	現代瓦

Tab. 3　熊野水町遺跡　出土石器一覧

Fig.	No.	遺構	種別	器種	全長(cm)	全幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	石材	産地	加工痕	備考
15	37	熊野神遺跡	打製石器		3.0	2.1	0.4	1.5	頁岩	頁岩		剥片

2．熊野松ノ下遺跡（1次調査）

1）はじめに（Fig. 16）

当遺跡は筑後市大字熊野字松ノ下1183-1に所在する。標高9ｍ以下の低地に立地し、調査区北部には倉目川が西流する。試掘調査は平成15年度に行われ、当地からは細長い溝と土師器が認められた。その後、関係者と協議を重ねたところ、新設の水路工事予定箇所及び頭工事によって削平を受ける箇所の646㎡を発掘調査対象として筑後市教育委員会が実施することとなった。調査は平成16年4月16日から同年5月30日まで行い、この間重機による表土除去（有限会社徳光建設に委託）、遺構の検出、掘削、測量（水準点設置作業はアジア航測株式会社に委託）、実測（遺構平面図作成は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託）、写真撮影（遺構全体写真撮影は有限会社空中写真企画に委託）等を実施した。発掘調査は小林勇作が担当した。

Fig. 16　調査地点位置図（1/2,500）

2）検出遺構

溝

1SD1（Fig. 17、Pla. 13）

調査区北東部に位置する。やや蛇行した東西溝で、遺構上半部を大きく削平されているためか約12.5ｍ分を確認したところで終息する。溝幅は0.6ｍ前後、遺構面からの深さは約0.07ｍを測り、埋土は濃黒茶色土を呈する。溝底はほぼフラットな状態を示しており、遺構の所々は現代の耕作による撹乱を著しく受けている。遺物は土師器（小皿）1点と小片が出土しており、中世以降の時期が想定される。

1SD2（Fig. 17、Pla. 13）

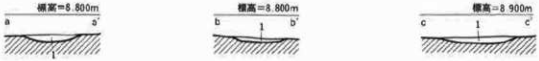
1SD1とほぼ平行した東西溝で調査区北東部に位置する。検出長約7ｍ、溝幅0.55ｍ前後、遺構検出面からの深さは約0.05ｍと浅く、僅かに溝底部を残存するのみである。埋土は1SD1と類似した濃黒茶色土であり、遺物は僅かに土師器（小皿）2点が認められている。中世以降の埋没であろう。

1SD3（Fig. 17、Pla. 13）

1SD1の南側で検出した。検出長約10ｍを測り、中央東部は一端途切れている。溝幅は最大で0.80ｍ前後、遺構検出面からの深さは0.08ｍを測り、埋土は濃黒茶色土を呈する。当溝からは土師器小片が出土しており、検出された1SD1・2と同じ性格を有する同時期の溝である可能性が想定される。

1SD4（Fig. 17、Pla. 14・15）

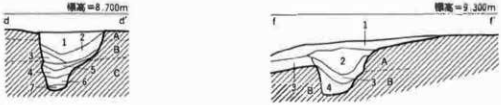
調査区南東部で検出した東西方向の溝で、遺構東端部は調査区外へ転じ、西端部は丘陵の谷部へと落ち込む。ほぼ直線的な溝で西部は途中1SD5へと分岐する。当溝と1SD5の切り合いについて、堆積土の状況からは先後関係がなく、埋没時期までは分岐していたと思われる。土層観察から溝の構造について着目すると、上半部は断面がU字状（幅0.50～0.70ｍ×深さ0.40ｍ前後）、下半部は断面が縦長の逆台形状（幅0.35～0.40ｍ×深さ0.20～0.30ｍ）を呈する溝であった。また、埋土には砂が混入しない粘質土の堆積層



1SD1 a-a'
1　濃黒茶色土（根株の灰色土を多く含む）
地山：淡茶褐色土

1SD2 b-b'
1　濃黒茶色土（根株の灰色土を多く含む）
地山：淡茶褐色土

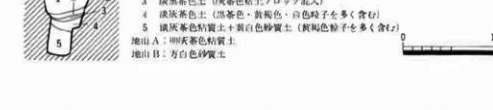
1SD3 c-c'
1　濃黒茶色土（根株の灰色土を多く含む）
地山：淡茶褐色土



1SD4 d-d'
4　暗黒茶色土
2　淡黒茶色土
3　淡灰茶色粘土（地山ブロックを少し含む）
4　淡灰茶色粘土（黒茶色粒子を多く含む）
5　明灰茶色粘土
6　暗灰茶色粘土（黒茶色土を多く含む）
7　暗灰茶色粘土（白色粘土ブロック混）
地山A：淡茶褐色土
地山B：明灰茶褐色粘質土
地山C：黄白色砂質土

1SD4 f-f'
1　明黒茶色土（根株を多く含む）
2　暗黒茶色土
3　淡黒茶色土（茶色・黄白色粒子を僅かに含む）
4　黄白色砂質土＋淡黒茶色粘土
5　濃黒茶色土
地山A：明灰茶色粘質土
地山B：黄白色砂質土

1SD4 e-e'
1　暗黒茶色土
2　淡黒茶色土
3　淡黒茶色土（灰茶色粘土ブロック混入）
4　淡灰茶色土（黒茶色・黄褐色・白色粒子を多く含む）
5　淡灰茶色粘質土＋黄白色砂質土（黄褐色粒子を多く含む）
地山A：明灰茶色粘質土
地山B：黄白色砂質土



1SD5 g-g'
1　暗黒茶色土
2　淡黒茶色土
地山A：明灰茶色粘質土
地山B：黄白色砂質土

1SD6 h-h'
1　暗黒色土
2　明灰黒色土（黒色粒子を少し含む）
地山：黄白色砂質土

1SD5 i-i'
1．炭褐色土（表土）
2．暗黒色土
3．暗黒茶色土（黄白色粒子を少量含む）
地山A：明灰茶色粘質土
地山B：黄白色砂質土

Fig. 17　溝土層断面実測図（1/40）

が看取されたことから水流を殆ど伴わない水路であったと推測でき、水路としての機能を持続するための補修や清掃が幾度となく行われたものと想定される。出土遺物は中世の土師器小片、白磁片が僅かに認められているのみである。

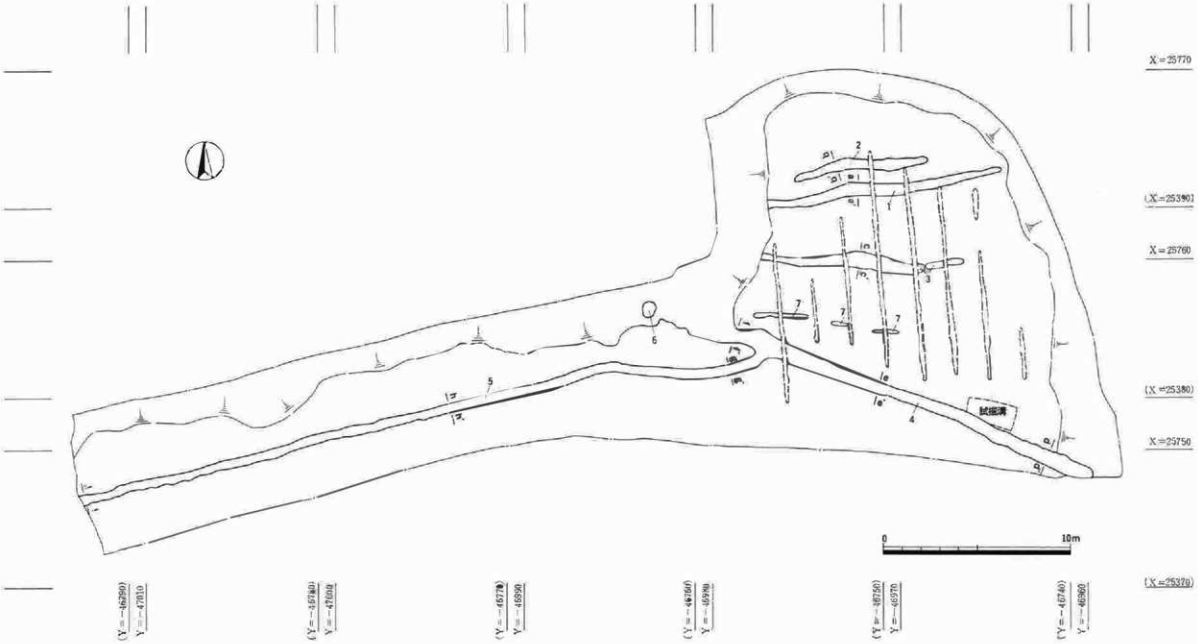


Fig. 18　熊野松ノ下遺跡遺構略測図（1/200）

※座標
（ ）　日本測地系
（ ）なし　世界測地系

S-番号	遺構番号	性　格
1	1SD1	溝
2	1SD2	〃
3	1SD3	〃
4	1SD4	〃
5	1SD5	〃
6	1SK6	土坑
7	1SD7	溝

Tab. 4　遺構番号台帳

1SD5（Fig. 17、Pla. 15・16）

調査区東部から西部へかけて検出された東西溝である。当溝と1SD4の切り合い関係については先述したとおりで、当溝の東端は1SD4より分岐する。幅0.45～0.60m、深さ0.28～0.43mを測り、溝の断面形は逆台形状を呈する。概ね黒色土と黒茶色土の2層が堆積し、遺物は古代の土師器片（丸坏）が出土しているが流れ込みによるものと思われる。なお、1SD4から1SD5へと分岐したルートは、南側に現存する用水路とほぼ平行する位置関係にあり、当溝は現存溝の前進であった可能性が考えられる。

1SK6

1SD4西端部の溝底で確認した溜まり状の土坑で幅0.7m前後を測る。平面形は不定円形状を呈し、埋土は暗黒茶色粘質土を基調とする。出土遺物は皆無である。

3）出土遺物

溝

1SD1（Fig. 19、Pla. 17）

土師器

皿（1）　底部細片で底径は8.0cmを復原する。底部外面は糸切りで底部内面はナデ、体部下位の内外面はヨコナデを施す。明白橙色を呈し、胎土は微砂粒・角閃石・金雲母を含む。焼成良好。

1SD2（Fig. 19、Pla. 17）

土師器

豆皿（2）　底部細片で底径5.8cmを復原する。底部外面は糸切り、体部下位の外面は調整不明、内面はヨコナデを施す。淡白茶色を呈し、胎土に微砂粒・黒色粒子・金雲母を含む。焼成はほぼ良好である。

小皿×坏（3）　口縁部細片で内外面はヨコナデを施す。淡白茶色を呈し、黒色及び白色粒子・角閃石・金雲母を含む。焼成良好。

1SD5（Fig. 19、Pla. 17）

土師器

丸坏（4）　体部細片の資料で法量は測定不能である。表面は著しく摩耗しているが、底部内面の一部に顔料痕跡が僅かに認められる。淡黄茶色を呈し、胎土に赤色及び黒色粒子・金雲母を多く含む。

表土採集（Fig. 19、Pla. 17）

磁器

碗（5）　口径10.2cm、器高6.2cm、高台径4.1cmを復原する。淡青白色の呉須で手描きによる文様が外面に3箇所、見込みに1箇所施され、高台畳付け以外の内外面に透明釉をかける。

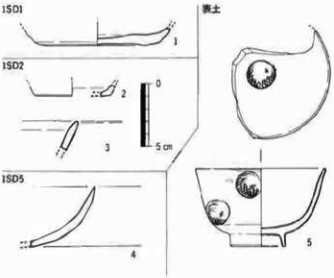


Fig. 19　出土遺物実測図（1/3）

4）小結

今次調査の成果について振り返る。

調査区北東部に位置する1SD1～3はほぼ平行する蛇行した東西溝であった。各々の溝は埋土の状況、残存状況、出土遺物等において類似する点が所々に見られ、同時期に同じ性格で存在していた可能性が想定される。しかし、今回はあまりにも残存状況が悪いため性格の位置付けに至ることはできなかった。なお、時期については各溝からの出土遺物に土師器片が認められており概ね中世の遺構と思われる。

次に調査区南部で検出された東西溝の1SD4及び1SD5についてふれる。調査成果から両溝には溝底レベ

ルに30cm程度の高低差が生じており、浅いISD5はISD4から分岐した溝と思われる。また流水の方向については各々の溝底レベル差から東方→西方と考えられ、これについては調査区南端にある現況水路の流水方向と合致する。なお、ISD4・5は現況水路の前身である内容については本文中でも記載したところであり、溝の性格については土地境界を示すための区画溝や田畑に供給するための用排水路であったことが想定される。遺物ではISD5から古墳時代の土師器丸坏が出土したが、ISD4では中世の遺物が主体であり、埋没時期を中世と考えておきたい。

当地周辺では、これまでの試掘調査資料もあまり蓄積されておらず、埋蔵文化財については空白の地域となっている。今回の調査成果はその第1歩となる貴重な資料であり、今後に生かされることであろう。今後に期待したい。

【長さの単位はcm、○は復原値を示す】

Fig. No.一遺物No.	遺構番号	R番号	名称	器形	口径		底径(高台径)		器高	備考
19 — 1	1SD1	1	土師器	皿			○	8.0		小片
19 — 2	1SD2	2	〃	豆皿			○	5.8		小片
19 — 3	〃	1	〃	小皿×坏						小片
19 — 4	1SD5	1	〃	丸坏			○	(10.4)		小片
19 — 5	表土採集	1	磁器	碗	○	10.2		4.1	6.2	1/4残存

Tab. 5　出土遺物観察

3．熊野五反田遺跡（1次調査）

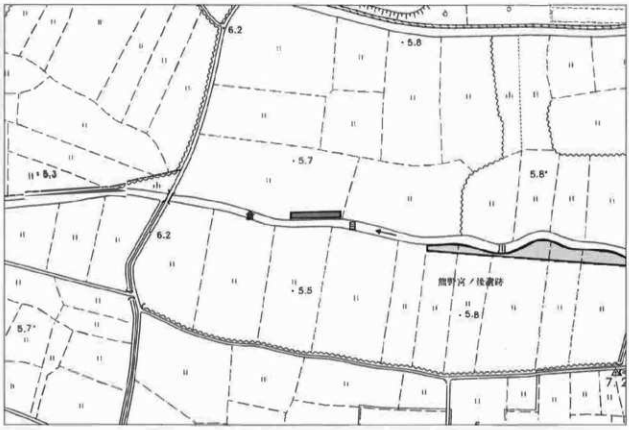


Fig. 20　熊野五反田遺跡　位置図　（S＝1/2,500）

1）はじめに

熊野五反田遺跡は筑後市大字熊野517に所在する。倉目川右岸に位置し、対岸には熊野宮ノ後遺跡が所在する。標高6mほどの平地だが、熊野・蔵数の微丘陵に挟まれた谷地形でもある。護岸工事のためか倉目川による河岸段丘の発達は確認されない。明治14年以前は西側の字「沖」の一部であった。

試掘調査では、大型の溝状遺構2本が中世の遺物と共に確認された。調査対象面積は175m²である。調査は平成16年6月8日より始められ、同年8月25日にこれを終了した。

2）基本層序

今回の調査区は水田として利用されていた。表土を0.1mほど掘り下げたところで昭和40年代もしくは昭和60年代に行われた河川改修工事に伴う埋土が確認された。この埋土は南側に向かい厚く堆積しており、更に0.4mほど掘り下げると黄白色砂質土の地山となる。遺構面は約5.0～5.2mである。

1　黒褐色土（耕作土）
2　灰黒色土（表土）
3　暗灰色土（遺土、ゴミを多く含む）
4　白黄色砂質土（地山）

Fig. 21　基本層序模式図

3）検出遺構

遺構は倉目川の流路とこれに平走する水路群、両者を結ぶ小

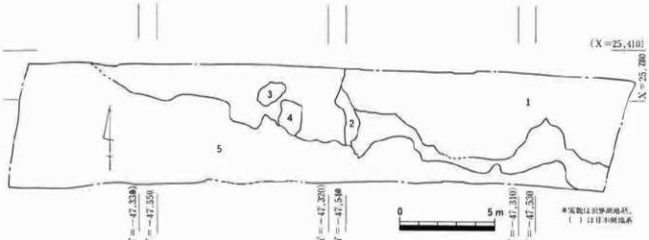


Fig. 22　熊野五反田遺跡　遺構配置図　（S＝1/200）

水路1条、土壙1基、溜り状遺構1基が確認された。

水　路

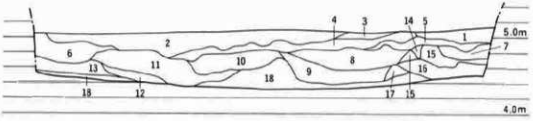
1SD01 (Fig. 23、Pla. 19)

調査区北東側で約14.2mほどが確認された水路で、1SX05に平走する。当初、一つの大溝として調査を行ったが、土層観察によりこれが複数の溝の集合体であり、幾たびかの掘り直しも行われていることが確認された。その方向はまちまちであるが、東側から西側へ南に張り出すような大きな溝が存在し、東側において小さな水路がこれに接続するのが基本的なものと考えている。

ここからは土師器高坏片、土師器片、黒曜石製石鏃、黒曜石片、チャートが出土した(Fig. 26)。大半が埋土上部からの出土で混入品である。チャート原石（Fig. 26-3）は11・12層埋土下部より出土している。

1SD02 (Fig. 24、Pla. 21-1)

1SD01と1SD05を結ぶかのように掘られた小さな溝で、西側に1SX04が位置する。全長約3.1m、幅約



1SD01

1　黄灰色砂（軽石含む）
2　暗色砂（流木が見られる）
3　暗黄灰色砂
4　暗灰色砂礫（3mm大の粒子が見られる）
5　赤褐色砂礫（4層と同じだが鉄分沈着が強い）
6　暗灰色粘土
7　暗灰色シルト
8　暗灰色シルト（ラミナ状堆積発達、流水含む）
9　暗灰色シルト（層下部に砂を多く含む）
10　暗灰色シルト（ラミナ若干発達）
11　黄灰色砂（ラミナ発達、砂粒は1～3mm大、層下部ほど大）
12　黒灰色粘土
13　黄灰色粘土（ラミナ弱い、砂粒1mm大）
14　黒灰色粘土（動物糞か？）
15　灰色砂（地山、畦か？）
16　青灰色粘土（地山）
17　黒色土・青灰色粘土混合層（流水による抉れ込みか？）
18　灰色砂（地山、畦か？、15層より色調暗）

Fig. 23　1SD01土層断面　（S＝1/50）

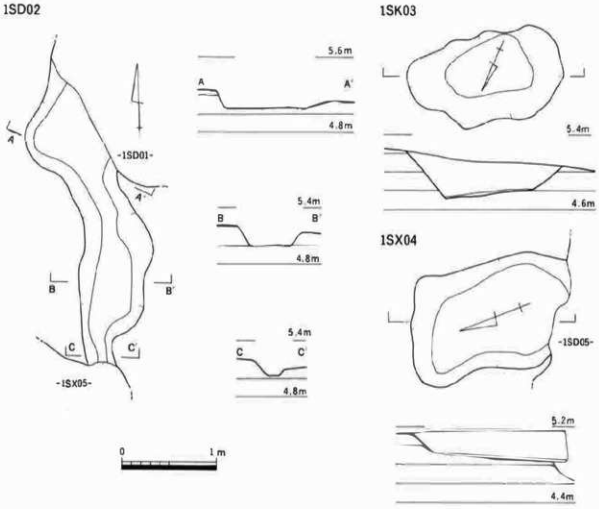


Fig. 24　1SD02・1SK03・1SX04　(S＝1/40)

0.3～1.2m。深さは約0.2mで底面はほぼ平坦あるが、水準高は僅かに1SD01側（北側）が高い。主軸の傾きはN－2°－Eを測る。埋土は黄灰色の単一埋土であった。

ここからの遺物の出土はなかった。

土壙

1SK03 (Fig. 24、Pla. 21-2)

調査区中央部で検出された土壙で、南側に1SX04・05が位置する。全長約1.6m、幅約1.0m、深さ約0.5m。主軸の傾きはN－67°－Eを測る。埋土は褐色砂質土を主体とするが、細かな観察は行っていない。

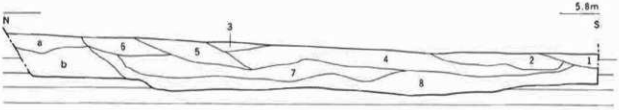
この遺構からの出土遺物はなかった。

溜り状遺構

1SX04 (Fig. 24、Pla. 22)

調査区中央部で検出された遺構で、北側に1SK03が位置し、南側の1SX05に切られている。当初、上部に1SX05の埋土が覆い被さっていたので同一遺構として調査を行っている。検出長約1.5m、幅約1.2m、深さ約0.3m。主軸の傾きはN－21°－Eを測る。

この遺構からの出土遺物は、前述の理由により不明である。



1SD05
1　黄灰色砂（ラミナ発達）
2　白色砂礫（1cm大の砂礫多い）
3　灰色シルト（ラミナ発達）
4　暗灰色砂礫（2～3cm大の石が多い、遺物・黒曜石を含む）
5　暗茶灰色砂（ラミナ発達）
6　暗茶灰色砂（ラミナ弱い、5層とは堆積方向が異なる）
7　黄灰色砂（ラミナ発達、下部には2cm大の石を含む）
a　黒灰色粘土（砂礫とのラミナが見られる、粘質強）
b　白灰色シルト（地山）

Fig. 25　1SX05土層断面　（S＝1/50）

流路

1SX05（Fig. 25、Pla. 20）

調査区南西側で約30.5m分が確認された倉目川の旧流路で、北側へ向かい張り出している。東側の細長い部分は別遺構の可能性も残るが検出時に分離できなかったため同一遺構とした。埋土は砂・シルト・砂

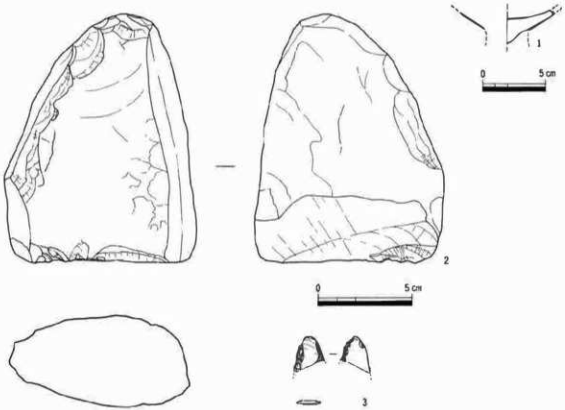


Fig. 26　1SD01出土遺物　（S＝1/2・1/3）

礫層が交互に堆積しており、各々ラミナ状堆積が発達している。7層（黄灰色砂）下部には2cm大の小石も見られ、この下から16世紀の青磁碗(Fig. 28-30) が出土している。

出土遺物には須恵器皿、須恵器鉢、土師器坏、土師器鉢、土師器甕、土師器大甕、土師器皿、土師器高坏、土師器片、瓦器碗、青磁碗、青磁皿、白磁碗、陶器碗、陶器片、サヌカイト片、黒曜石片、チャート片が見られた。(Fig. 27・28)

4）出土遺物 (Pla. 23)

1SD01出土遺物 (Fig. 26、Pla. 23)

1は高坏の坏底部で、全体に磨滅を受けている。

2はチャートの原石である。この辺りでは見かけないもので、搬入された可能性が高い。

3は剥片鐵の先端部である。縞模様のある黒曜石製で、若干風化が進んでいる。丁寧な造りである。

1SX05出土遺物 (Fig. 27・28、Pla. 23)

1～3は須恵器の鉢の口縁部である。1・2は東播系。3は焼成不良により赤味が強い。

4は須恵器　皿のある。底部糸切へラ切り。

5～12は土師皿である。大半が磨滅をしているが、5・9・10・12は廻転糸切りの痕跡がある。

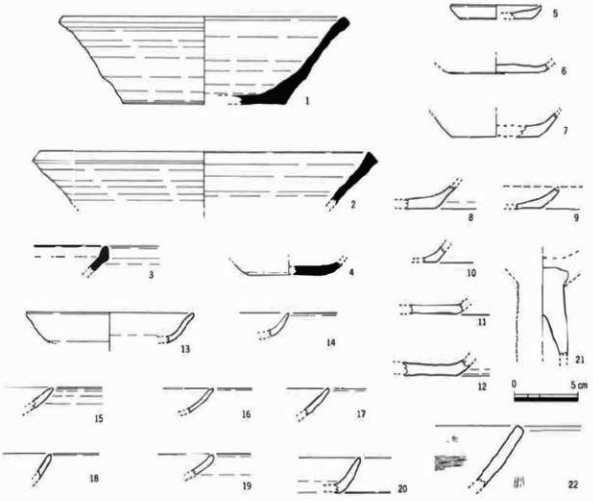


Fig. 27　1SX05出土遺物(1)　(S＝1/3)

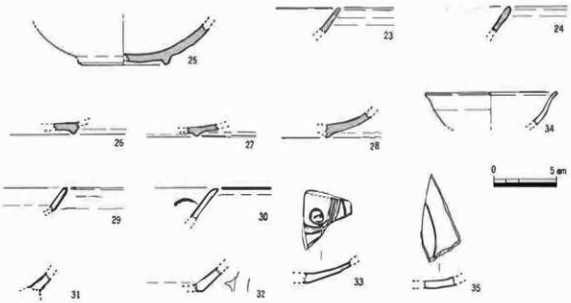


Fig. 28　1SX05出土遺物(2)　（S＝1/3）

13～20は土師器の坏である。全て磨滅しており、調整は不明。

21は土師器の高坏の脚部である。全体に磨滅が激しく調整不明。

22は土師器の鉢である。磨滅しているが、内外面にハケ目が見られる。

23～28は瓦器椀で、23・24は口縁部、その他は底部である。いずれも磨滅が激しく調整不明。

29は青磁皿の口縁部である。黒色粒子を含む灰色の素地に青色透明釉を薄く施し、器壁立ち上がり部分に貫入が発達している。外面には1条の沈線を施している。

30～33は青磁碗である。30は口縁部片で洪水による堆積層と思われる7層直下より出土。僅かに黒色粒子を含む灰色の素地に晴めの緑がかった透明釉を施し貫入が見られる。内面は口縁部に1条の沈線を施し、その中に文様を施している。31は碗の体部で、器壁の立ち上がり部分である。明灰色の素地に明るく青味がかった緑色の半透明釉を施す。内面見込み部分には円圏が施され、外面には蓮弁を施す。小片であるため明確ではないが、蓮弁は立体的に表現されている。32も碗の立ち上がり部分であるが、31と比べて整形はかなり雑である。灰色の素地に灰色がかった緑色透明釉を施すが、外面には露胎部分が見られる。この露胎部分は整形された様子は見られない。外面には文様を施したと思われる凹凸が見られるが、小片のため不明である。33は青磁碗の体部である。本来はもう少し立ち上がると思われる。灰色の素地に緑がかった透明釉を施し、内面にヘラ描きで文様を施す。

34・35は白磁碗である。34は黒色粒子を含む白色の素地に透明釉を施すが、口縁端部および内面3mmほどは露胎。35は見込み部分の破片で、明灰色の生地に白色釉を施すが外面高台付近は露胎。内面には円圏が見られる。

5）小結

遺跡のまとめの前に倉目川について概略する。倉目川は熊野丘陵と蔵敷丘陵の間を流れる自然河川で、現在は谷頭に構築された八女市の二重堤（1684築堤）や坂田溜池（1900）・昭和池（1950）などを水源としている。これらの溜池が造られる前は季節による水量の増減が大きく、農業用水としては心もとない状況であったと言われる。しかし、大雨に見舞われると一気に水量が増し、現在でも周辺に用の水が溢れ出す状況である。また小河川であるため河川改良などの記録は残っていないが、昭和40年代と60年代に河川改

良工事が行われたということである。調査開始時に確認された改良工事の埋土には肥料を容れたビニール袋が見られたので、後者のものであろう。

今回の調査では主に水路群と倉目川旧流路を確認したが、前者からの遺物出土はこれが所属する時代を決定しうる資料とはなりえなかった。しかしながら、1SD02の存在は、両者が同時期に機能していた可能性を示すものである。1SX05の出土遺物は主に中世後半のものである。前述のように洪水による堆積の可能性を述べたが、須恵器や青磁などは割れ口はしっかりしており、瓦器や土師器なども磨滅具合は弱い。磨滅が激しいのは混入していた弥生後期～古墳時代初頭と思われる高坏（Fig. 26-1、27-21）ぐらいである。遺物の主体は中世後半であり、この時期に河川に対しこれらを投げ込むような存在が、調査区付近に存在したと考えられる。

そこで先ず思い付かれるのは広川荘を管理した坂東寺熊野神社である。

広川荘は天永元年（1131）待賢門院を領家として立荘、天保4年（1138）に熊野宮に寄進された。鎌倉時代を通じ発展を続け、元弘の乱の頃（1333）に神社仏閣を焼失するも再興されている。南北朝期（1369）には南の水田荘と境界争いを起し、戦国期（16ct代）には三光坊（山光坊）などの僧兵が歳数に居を構えるなど勢力を誇るが、大友氏と周辺諸勢力の争いが激化していく中、武士の所領横領により解体されていった。

本調査区はこの坂東寺熊野神社の北に位置するのだが、出土遺物該当期やその前後に、調査区周辺での坂東寺熊野神社関連の史跡の存在は知られていない。西側に隣接する三潴荘に対しては下蔵数の宗西寺があるが、両者の争いは記録には残っていない所である。南側の熊野宮ノ後遺跡の調査成果と照らし合わせる必要があるが、現時点ではどのような施設が存在していたか、想定すら出来ない状況である。

今後の周辺での調査事例に課題を残す所である。

【参考文献】

右田乙次郎	『筑後市むらの生いたちの記』第3集	1976	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
右田乙次郎	『筑後松原郷土史』	1988	筑後市老人会・筑後郷土史研究会
筑後市史編さん委員会	『筑後市史』	1990	筑後市

Tab. 6　熊野五反田遺跡　遺構一覧

Fig.	番号	遺構番号	グリット	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸	平面形状	断面形状	出土遺物	時期	備考
22	1	15D01	土師器	高杯	(14.2)	——	——	——		土師器、須恵器、石材		古墳時代後期か
22	2	15D02			3.3	0.3～1.2	0.2	N-2°-E	楕円	須恵		N53W
22	3	15K03			1.6	1.0	0.5	N-65°-E	不定形	須恵器		N53W
22	4	15X04			(1.5)	1.2	0.3	N-23°-E	楕円(不整)	須恵器		N35E
22	5	15X05			(30.5)	——	——	——				→X5E05
22										須恵器、土師器、土器、木材、石材、鉄製、石材	中世	倉庫か掘立柱建物

Tab. 7　熊野五反田遺跡　出土土器一覧

Fig.	No	遺構	種別	器種	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	胎土	色調(外/内)	焼成	備考
26	1	15D01	土師器	高杯				1～2mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	明赤褐色	良好	
27	1	15X05	須恵器	杯	(75.6)	(13.4)	6.9	1/4	黄灰色	良好	
27	2	15X05	須恵器	杯	(22.4)			口縁部1/10	灰白色	1～4mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	やや良	東播系
27	3	15X05	須恵器	杯				口縁部小片	淡赤褐色	1～2mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	やや良	東播系
27	4	15X05	須恵器	甕		(16.0)		底部1/2	明灰色	1mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	やや良	
27	5	15X05	土師器	甕	(17.1)	(5.4)	1.1	1/4	淡灰黄色	1mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	良好	
27	6	15X05	土師器	甕		(7.0)		底部	赤褐色	1～2mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	良好	
27	7	15X05	土師器	甕		(6.6)		底部1/4	褐灰黄色	1mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	良好	
27	8	15X05	土師器	甕				底部破片	明黄褐色	1～2mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	良好	
27	9	15X05	土師器	甕				底部破片	褐灰色	1mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	良好	
27	10	15X05	土師器	甕				底部破片	淡褐橙色/淡灰黄色	1mm大の白色砂粒、石英、角閃石、金雲母を含む	良好	
27	11	15X05	土師器	甕				底部破片	淡灰黄色	1～2mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	やや良	
27	12	15X05	土師器	甕				底部破片	淡赤褐色	1mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	不良	
27	13	15X05	土師器	甕	(13.4)			口縁部1/8	淡褐橙色	1mm大の石英、角閃石、金雲母を含む	やや良	
27	14	15X05	土師器	甕				口縁部破片	橙黄褐色	1mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	やや良	
27	15	15X05	土師器	甕				口縁部破片	淡橙赤色	1～2mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	やや良	
27	16	15X05	土師器	甕				口縁部破片	淡橙赤色	1mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	やや良	
27	17	15X05	土師器	甕				口縁部破片	淡黄橙色	1mm大の白色砂粒、石英を含む	良	
27	18	15X05	土師器	甕				口縁部破片	淡橙赤色	1～2mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	不良	
27	19	15X05	土師器	甕			2.8	口縁部破片	橙褐黄色	1～2mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	不良	
27	21	15X05	土師器	高杯				脚部	淡橙褐色	1～2mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	不良	赤褐
27	22	15X05	土師器	甕				口縁部破片	明褐色	1～2mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	不良	外面黒斑有
28	23	15X05	瓦器	鍋				口縁部破片	明灰色	1～2mm大の白色砂粒、石英を含む	良好	
28	24	15X05	瓦器	鍋				口縁部破片	白灰色/明灰色	1mm大の白色砂粒、石英を含む	不良	
28	25	15X05	瓦器	鍋		(7.1)		底部1/2	淡褐色	1～2mm大の白色砂粒、石英を含む	やや良	
28	26	15X05	瓦器	鍋				底部破片	淡灰色	1mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	不良	赤褐
28	27	15X05	瓦器	鍋				底部破片	明灰色	1mm大の白色砂粒、石英を含む	不良	赤褐
28	28	15X05	瓦器	鍋				口縁部破片	明灰色/明赤褐色	1mm大の白色砂粒、石英、角閃石を含む	良好	
28	29	15X05	瓦器	鍋				口縁部破片	明灰色/明赤褐色	1mm大の白色砂粒、石英を含む	良好	
28	30	15X05	瓦器	鍋				脚部破片	白灰色/明赤褐色	微細砂粒を多く含む	良好	外面剥離
28	31	15X05	瓦器	鍋				脚部破片	明灰色/明赤褐色	微細砂粒を多く含む	良好	外面剥離か？
28	32	15X05	瓦器	鍋				脚部破片	明灰色/明赤褐色	微細砂粒を多く含む	やや良	外面剥離か？
28	33	15X05	瓦器	鍋				脚部破片	明褐色/明赤褐色	砂粒	良好	内面剥離か
28	34	15X05	白磁	碗		(10.5)		口縁部1/8	明白灰色/淡黄褐	微細砂粒を多く含む	良好	日産
28	35	15X05	白磁	碗				脚部破片	明白灰色/淡黄褐	微細砂粒を多く含む	良好	内面剥離

Tab. 8　熊野五反田遺跡　出土石器一覧

Fig.	No	遺構	種別		全長(mm)	全幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石材	遺存度	焼成痕	備考
26	2	15D01	石材？		13.1	10.0	4.8	890	チャート（青白色）			
26	3	15D01	打製石鏃		1.9	1.6	0.6		黒曜石（半透明、縞状）	先端部		

4．熊野宮ノ後遺跡（1次調査）

1）はじめに（Fig. 29）

当遺跡は筑後市大字熊野字宮ノ後647・651～654・655の6筆に所在する。標高9m以下の低地に立地し、調査区の北側には西流する倉目川が隣接する。試掘調査は平成15年度に行われ、当地からは溝と多量の遺物が認められた。この結果をもとに関係者と協議を重ねたところ、新設の水路工事予定箇所（1,317㎡）を調査対象とし、発掘調査は筑後市教育委員会が実施することとなった。平成16年6月10日から重機による表土除去（有限会社徳光建設に委託）、遺構の検出、掘削、測量（水準点設置作業はアジア航測株式会社に委託）、実測（遺構平面図作成は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託）、写真撮影（遺構全体写真撮影は有限会社空中写真企画に委託）等を実施し、平成16年8月20日をもって終了した。なお、調査は小林勇作が担当し、一部で上村英士、阿比留士朗の協力を得た。また、調査区については現況水路や埋設物の関係で3区画に分断されたので、便宜上、東側よりA調査区・B調査区・C調査区と称し報告する。

Fig. 29　調査地点位置図（1/2,500）

2）検出遺構

基本土層

調査前、当地は水田又は畑などの耕作地として利用されており、耕作土は表土（約0.2m）と床土（約0.1m）で形成されている。耕作土を除去すると中世の遺物を豊富に包含する暗茶褐色砂質土が堆積しており、この包含層土直下で今回の遺構が検出された。遺構検出面となる地山は淡灰色砂質土を呈し、これより約0.3～0.5mの深さでは濃灰黄色砂の堆積層が確認される。

A調査区

溝

1SD30（Fig. 30、Pla. 27）

調査区東端部に位置した南北溝で、北部は西流する倉目川に隣接する。検出長は約7.0m、上幅1.9～4.4m、下幅1.2～3.6m、深さ0.5m前後を測る。溝の平面プランは著しく凹凸した不定型なものであった。溝中央部の両岸壁においては複数のピットやテラスが集中して確認されるなどやや不安定な状態を呈する。また、溝底に至っても不安定な状態は変わらず、浅く蛇行した溝状の遺構と若干窪んだピット状痕跡が認められる。堆積土は黒灰色砂質土を基調とするものであり、流水を伴っていたことが観察される。更に、溝底で確認された溝との関係については、切り合いを確認することから新規掘削溝の存在、或いは埋没過程にできた自然流路の痕跡とも考えられる。当溝の出土遺物は、各層から散在的に土師器（小皿・坏）、白磁（皿）、青磁（碗）、瓦（平瓦・丸瓦）が認められている。

1SD32（付図4）

調査区中央部で検出した検出長約15.0m、幅0.3m前後のやや蛇行した東西溝である。深さは0.05m程度と残存状況は極めて悪く、全体的に不安定な状態で確認された。堆積土は黒灰色砂質土を基調とし、出土遺物は須恵器（片）、土師器（小皿・土鍋・片）、白磁（碗・片）、青磁（片）、染付（片）、石器（石鏃・砥石・黒曜石片）、瓦（片）など多くの遺物が認められている。

土坑

1SK31（付図4）

1SD30の西隣で検出した不定楕円形状の土坑である。径は0.85～0.98m、深さは0.36mを測る。底部はほぼフラットな状態である。埋土は黒灰色砂質土を呈し、出土遺物は皆無であった。

1SK34（付図4）

1SK31の南側で検出した楕円形状を呈した土坑であり、長軸1.40m、短軸0.85mを測る。遺構内部の南北2箇所にテラスを有し、中央部は深さ0.15mを測る。埋土は黒灰色砂質土を呈し、出土遺物は認められていない。

落ち込み状遺構

1SX33（付図4）

A調査区の西端部に位置する。当遺構はA区とB区の調査区間に存在する南北方向の現況水路に向かって徐々に落ち込んだ痕跡であり、旧河川若しくは自然流路の痕跡であった可能性が考えられる。堆積土は黒灰色砂質土を呈し、出土遺物は堆積土中に包含する摩滅した土器片が認められたのみであった。

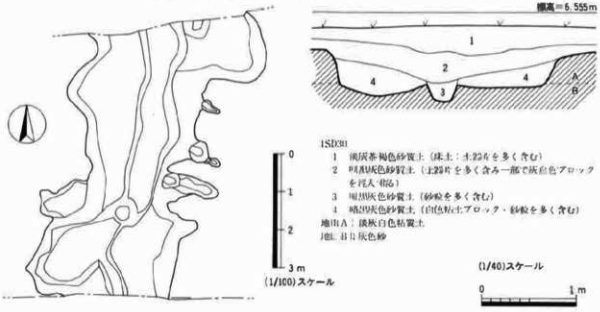


Fig. 30　A調査区：1SD30実測図（1/1 00 1/40）

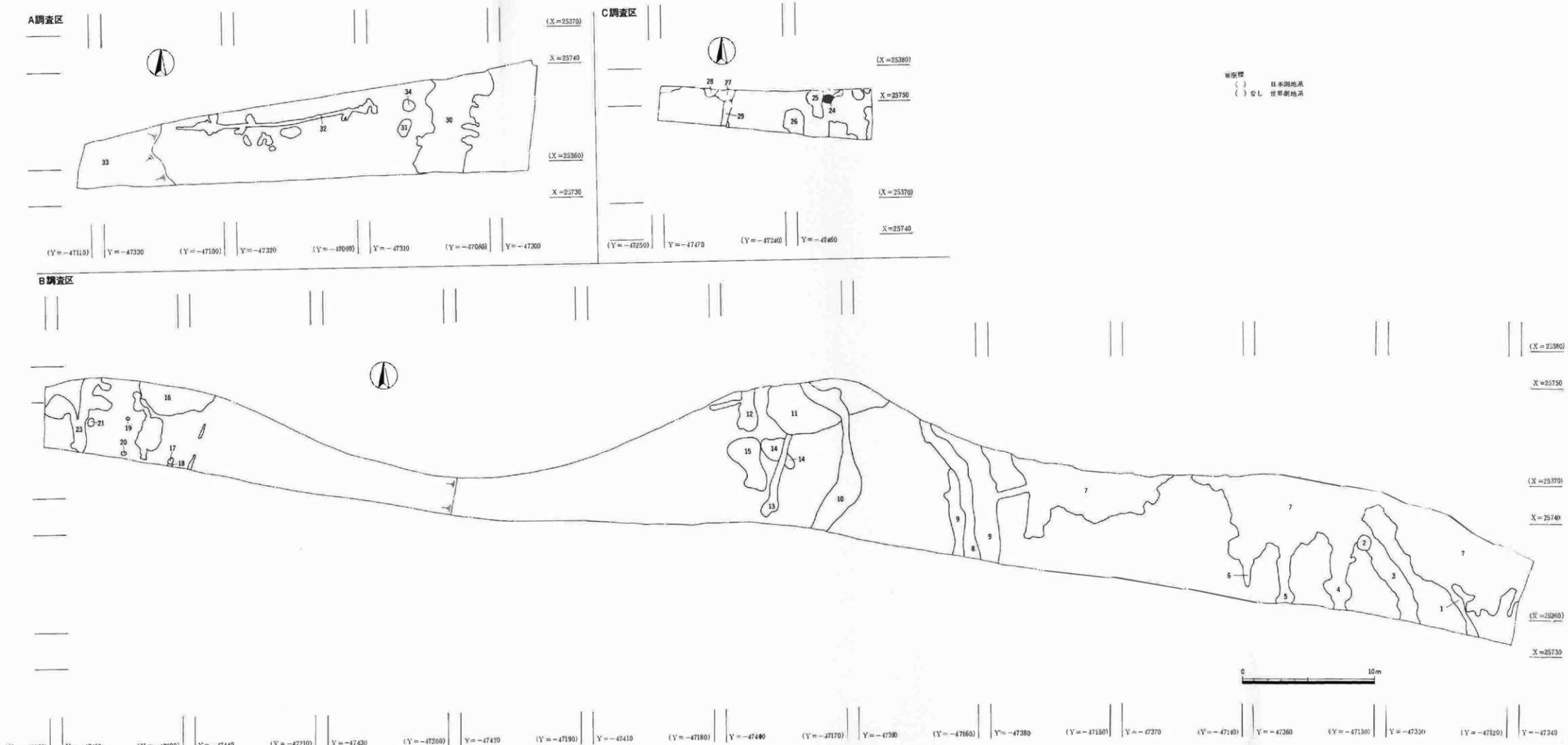
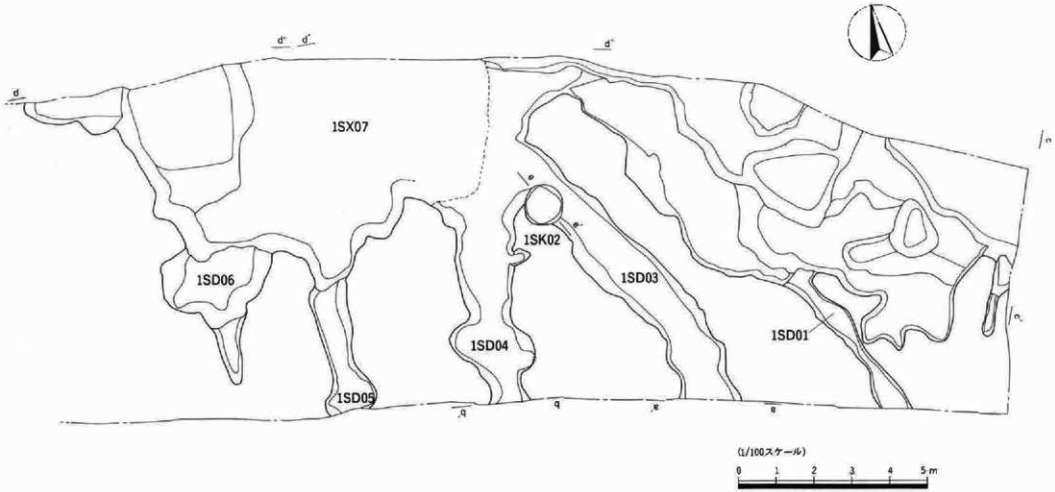
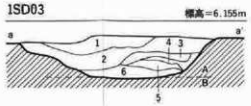
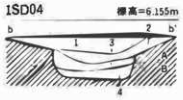


Fig. 31 熊野宮ノ後遺跡遺構略測図 (1/200)

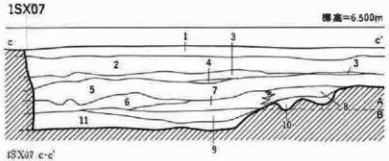




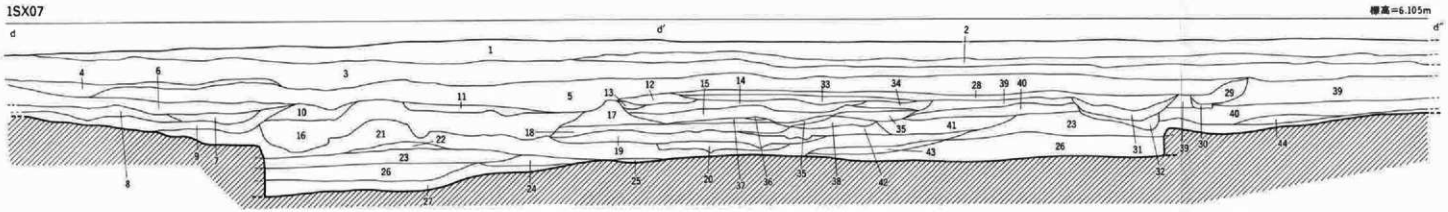
1SD03 a-a'
1 淡黄茶褐色砂質土
2 淡黒茶色砂質土（白色ブロック・砂粒を多く含む）
3 淡灰色砂
4 濃黒茶色砂質土（白色ブロック混入）
5 淡灰褐色砂
6 濃黒褐色砂質土（茶色粒子を多く含む）
地山A：乳灰白色粘質土
地山B：灰褐色砂



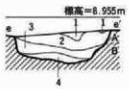
1SD04 b-b'
1 淡黄茶褐色砂質土（土器片・茶色粒子・砂粒を多く含む）
2 淡黒茶色砂質土（灰色砂粒を多く含む）
3 濃黒茶色砂質土（白色・灰色ブロック多く混入する）
4 暗黒茶色粘質土（白色ブロック・灰色砂粒を多く含む）
地山A：乳灰白色粘質土
地山B：灰褐色砂



1SX07 c-c'
1 灰茶褐色砂質土（包含層：土器片を多く含む）
2 暗茶褐色砂質土（包含層：土器片を多く含む）
3 淡茶褐色土（包含層：土器片を多く含む）
4 淡灰色砂
5 暗黒灰色粘土（土器片を微かに含む）
6 暗灰色砂（小石を多く含む）
7 6と同じ
8 濃黒灰色粘土（やや砂質土混入）
9 濃灰青色砂
10 濃灰色粘土（やや砂質土混入）
11 濃灰青色砂（小石を多く含む）
地山A：淡灰色砂質土
地山B：濃灰黄色砂



1SX07 d-d'-d"
1 淡灰褐色土（表土）
2 淡褐茶褐色土（床土）
3 濃灰茶褐色土（包含層）
4 明灰茶褐色土（包含層：多くの小石を含む）
5 暗灰茶褐色土（包含層：多くの土器片を含む）
6 明灰茶色砂質土
7 淡灰茶色砂
8 淡灰茶色砂（黒灰色粘土を多く含む）
9 暗黒灰色砂質土
10 明灰茶褐色砂質土（多量の砂混入）
11 暗灰茶色砂質土（茶褐色粒子を多く含む）
12 淡灰白色砂
13 淡黒灰色粘土（白色・茶色粒子を多く混入）
14 淡黒灰色砂質土（白色・茶色を多く混入する）
15 淡灰茶色砂（多量の砂を混入する）
16 灰白色粘土＋黒色粘土
17 明灰色砂
18 暗灰色砂
19 淡灰褐色砂（黒色砂質土を含む）
20 淡灰褐色砂
21 濃灰褐色砂
22 淡黒白色砂
23 淡灰褐色砂利
24 淡灰茶色砂
25 21と同じ
26 暗青茶褐色砂利
27 淡青灰色砂
28 暗灰茶色砂質土（少量の土器片を含む）
29 暗灰茶色砂質土
30 暗灰茶色砂質土（白色砂粒を多く含む）
31 明黒茶色砂質土（茶色粒子を少し含む）
32 明黒茶色砂質土（灰色砂利を多く含む）
33 灰白色砂
34 明黒茶色砂質土（白色粒子を多く含む）
35 淡灰茶色砂（灰色砂利を多く含む）
36 黒色砂質土
37 17と同じ
38 17と同じ
39 暗黒色粘土
40 暗灰茶色粘土
41 暗灰黄色砂質土（白色・黒色粒子を多く含む）
42 淡灰茶色砂（黒色砂質土混入）
43 淡灰茶色砂利
44 暗灰茶色砂利



1SK02
1 包含層（小円形状痕跡）
2 淡灰褐色砂質土（茶色・灰色粒子を多く混入する）
3 暗黒茶色粘質土
4 淡灰色砂（土器片を少量含む）
地山A：乳灰白色粘質土
地山B：灰褐色砂

Fig. 32 B調査区：1SD01・03・04、1SK02、1SX07実測図（1/100、1/40）

B調査区

溝

1SD01（Fig. 32）

当溝はB調査区殷東端の南部に位置し、検出長4.5m、幅0.4m前後、深さ0.02～0.13mを測る。南東—北西方向を示し、溝の北端部は倉目川の河川跡である1SX07へと向かっている。当溝は1SX07の先後関係については把握できていないが、1SX07土層断面において包含層である暗灰茶褐色土を貫通していることが観察された（1SX07－29・30層）。当溝の堆積土は暗灰茶色砂質土を基調とし、最下層に白色砂粒を多く含んでいることから流水があったものと判断され、溝底の高低差より南東→北西への流れであったと考えられる。遺物は須恵器（甕・鉢）、土師器（小皿）、石製品（石鍋）が出土した。

1SD03（Fig. 32、Pla. 28）

当溝は1SD01とほぼ平行する南東—北西方向の溝で、途中は1SK02に切られる。これより北端部は河川跡（1SX07）及び1SD04と接するが切り合いについては不明である。検出長約8.5m、幅1.1～1.5m、深さ0.28～0.52mを測る。溝底及び両岸はほぼ安定しており、断面形は緩やかな逆台形状を呈する。堆積土は中層域（3・4層）で乱れており、一定量の流水があったものと想定される。土師器片が出土した。

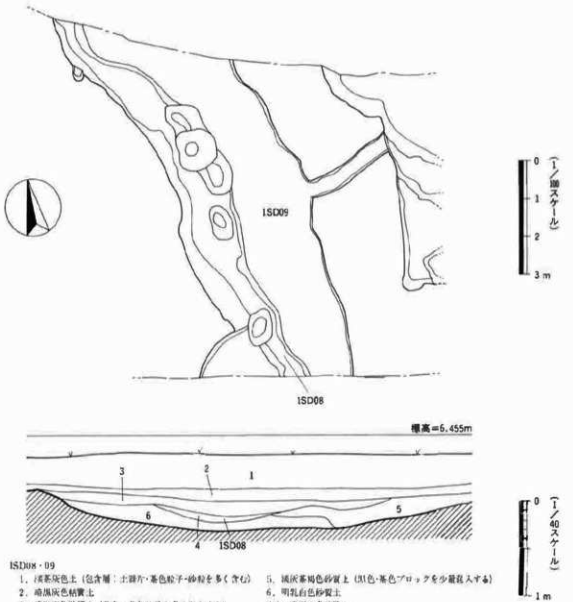


Fig. 33　B調査区：1SD08・09実測図（1/100・1/40）

1SD04 (Fig. 32、Pla. 28)

調査区東端部で確認した南北方向の溝であり、北部は1SX07と1SD03に接する。遺構間の明確な切り合いは確認できていないが、1SX07土層断面において黒茶色砂質土を基調とする埋土（1SX07－31・32層）が確認されており、1SD01と同様に河川跡の1SX07を貫通していることが考えられる。検出長約5.2m、幅0.8～2.0m、深さ0.21～0.42mを測る。溝の平面プランは不安定でやや乱れていたが、下位は比較的安定しており、堆積土に多くの砂を含むことから一定量の流水があったものと想定される。須恵器（常滑系甕）、土師器、輸入陶磁器が出土した。

1SD05 (Fig. 32)

1SD04の西隣で確認した南北溝である。先述してきた溝と同様に北部は1SX07に接する。堆積土は黒茶色砂質土の単一層で残存状況は悪く、検出長約3.3m、幅0.6～1.4m、深さ0.08mを測る。

1SD06 (Fig. 32)

1SD05の西側に位置し溝の北部は1SX07に接する。遺構は痕跡を僅かに留めるのみで検出長1.7mを測る。遺物は出土していない。

1SD08 (Fig. 33、Pla. 29)

B調査区中央部のやや東よりに位置し、1SD09のほぼ中央を南北方向に走る。埋土は暗灰褐色砂質土を呈し、1SD09を切るように検出されたが、1SD09埋没過程の一部である可能性も考えられる。検出長約11m、幅0.6～1.1m前後、深さ0.3m前後を測る。土師器片が出土する。

1SD09 (Fig. 33、Pla. 29)

1SD08と切り合った南北溝で、途中1SX07へと分岐する。溝の断面形は緩やかなU字状を呈し、溝底にはピット状の窪みが認められる。主体の溝は検出長約11m、幅3.0～4.0m、深さ0.4～0.13m前後、分岐した溝は検出長約2.3m、幅0.4m前後、深さ0.03m前後を測る。出土遺物はない。

1SD10 (Fig. 34、Pla. 29)

B調査区中央部のやや東よりで検出した南北方向の溝で、北部は後述する河川跡（1SX11）を切り込む。

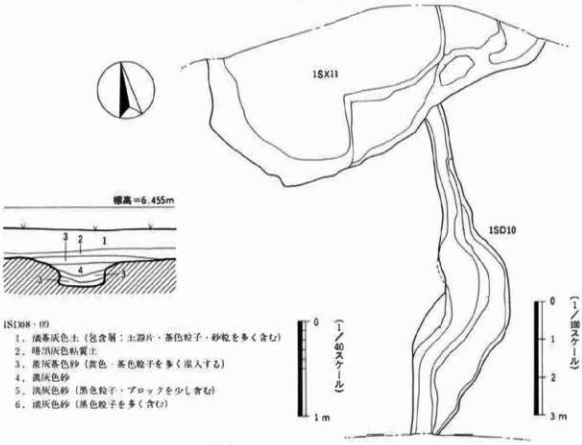


Fig. 34　B調査区：1SD10実測図（1/100・1/40）

蛇行した溝で検出長12.5m、幅0.5~2.1m、深さ0.26~0.52mを測る。埋土は淡灰茶色砂がレンズ状に堆積しており、西岸部溝底が抉られていることから一定量の流水があったものと判断される。

1SD13（付図4）

1SD10の西側で検出した南北溝で検出長4.5mを測る。溝の北端部は1SX14を切り、南端部は楕円状に広がって終息する。残存状況は極めて悪く深さは0.17m程度であった。埋土は灰茶色砂質土であった。

1SD23（付図4）

B調査区の西端部に位置する。溝は途中分岐しており、平面プランは非常に乱れた状態で検出された。溝底は著しく段差を認め、深さは0.09~0.30mを測る。埋土は灰茶色砂質土を呈し、遺物は土師器（小皿）、瓦器（椀）、青磁片を認めた。

流路

1SX07（Fig. 32、Pla. 30）

当遺構は北側を西流する倉目川の痕跡と考えられ、平面プランは不整に入り組んだ形状を呈している。B調査区東側に位置し、便宜上東半部と西半部に分けて報告する。遺構は一見溝が集結した溜まり状の遺構と捉えられるが、殆どの溝は切合いを切っていることが確認されている（先後関係については各溝の稿を参照されたい）。土層観察について、東半部東壁（c−c′）では概ね南部からの流れ込みによる堆積層が確認されたが7・8層では攪乱された砂層が看取されており、一定量の流水があったものと推測される。更に東半部北壁土層断面（d−d′−d″）では東側から西側へ折り重なる堆積層が看取されたことにより、流水は現在の倉目川と同様に西流していたことが窺える。西半部についてはその幅12.2m、幅4.0m分を検出し、深さは最大で1m程度を測る。両半部ともに出土遺物はなく、唯一底部の床面から細材の自然流木が認められた。

1SX11（Fig. 34）

当遺構はB調査区中央部やや東よりに位置した流路痕跡遺構で1SX07と同様の河川跡と考えられる。1SD10に中央部を貫通され、長さ8.7m、幅3.9m分を検出した。遺構底部は西半部に向かって落ち込んでおり、深さは最大で0.51mを測る。土師器片、青磁片を出土した。

1SX16（付図4）

B調査区西部に位置した半円状の遺構で、先述した1SX07・11と同様の河川跡と考えられる。他遺構との切合いはなく、長さ5.8m、幅2.2m分を検出する。遺構底部はほぼフラットな状態を示しており、深さは0.21mを測る。出土遺物は皆無であった。

土坑

1SK02（Fig. 32、Pla. 31）

1SD03の北端部を切るように検出した楕円形状の土坑で径は1.1m前後、深さは0.35mを測る。埋土は概ね3層に分層でき、上層から淡灰褐色砂質土→暗黒茶色粘質土→淡灰色砂（摩滅した土器片を少量含む）がレンズ状に堆積する。また、最上層には後に述べる不明痕跡（小円形状痕跡）土層が看取される。東播系鉢、土師器（小皿）、輸入陶磁器が出土した。

溜まり状遺構

1SX12（付図4）

B調査区中央の1SX11西隣に位置した不定長方形状の遺構で、人為的遺構とは捉え難く、溜まり状遺構として報告した。規模は長軸3.0m、幅1.1m、深さ0.3mを測り、後述する1SX14・15と同類の性格が考えられる。須恵器片、土師器片、瓦器（椀）、輸入陶磁器が出土遺物として認められた。

1SX14（付図4）

1SD13に切られた不整形状の遺構である。規模は長軸2.9m、幅0.7m、底部はピット状の凹凸が認められ、最大で0.32mを測る。遺構は人為的に掘削された可能性は低いが、埋没時に混入したとみられる土師器（小皿）、輸入陶磁器が認められている。

1SX15（付図4）

1SX12の南隣で検出した不整形状の遺構で、長軸4.1m、幅1.0~2.7m、深さ0.08mを測る。先述した1

SX12・14と同類の性格が考えられる。東播系鉢、常滑産甕、土師器片、瓦器（椀）、輸入陶磁器、石製品（砥石・黒曜石片）が出土した。

その他の遺構

不明痕跡（付図４、Pla. 31・32）

B調査区からは、小円形状を呈する痕跡（以下、小円形状痕跡）並びに細く筋状に延びる痕跡（以下、筋状痕跡）が遺構検出面で集中して確認された。各痕跡のプランについて、まず小円形状痕跡は径５～10程度、深さ10cm以内を測り、平面は小円形状、底部はすり鉢状若しくは若干窪んだ状態を呈する。検出面ではこの小円形状痕跡が単体のものと密集してある程度グループ化したものが確認されており、群を呈した痕跡は楕円形状・不整円形状・連鎖状に確認される。なお、底部は凹凸状を示す。一方の筋状痕跡は直線的に延びるもの、細かく蛇行して延びるものがあり、何れも幅は５～10cm程度、深さは10cm以内を呈する。埋土について、両痕跡は何れも包含層土に類似した暗茶褐色砂質土を基調としており、各単体によって若干の土壌に変化が認められる。更に分布状況について、小円形状痕跡は調査区内全域に広く分布しているのに対し、筋状痕跡は現倉目川との境界付近で認められている。

小円形状痕跡・筋状痕跡については今回不明遺構として報告したが、当地が永年にわたって耕作地として活用されていた状況を踏まえると小円形状痕跡は耕作時に人や動物（牛・馬）が残した歩行痕跡、筋状痕跡は鋤や鍬などの道具で掘割された痕跡と推測される。

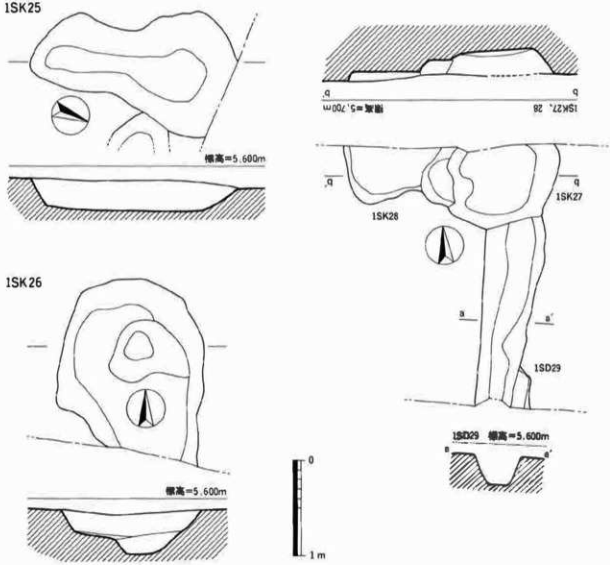


Fig. 35　C調査区：1SK25～28、1SD29実測図（1/40）

C調査区

溝

1SD29 (Fig. 35)

C調査区の西部に位置し、北端部は1SK27に切られる。ほぼ直線的に延びる溝で検出長約2m、幅0.45～0.60m、深さ0.3mを測る。黒灰茶色土を呈し、出土した遺物はない。

土坑

1SK25 (Fig. 35)

平面プランは楕円形状を呈し、長軸2.[illegible]m、短軸0.7m、深さ0.25mを測る。底部はほぼフラットな状態を呈し、黒茶色砂質土を基調とした埋土であった。弥生土器片、土師器片が出土。

1SK26 (Fig. 35)

先述した1SK25の南側で検出したもので平面プランは不整楕円形状を呈する。長さ2.0m、幅1.6m分を検出し、底部中央にはピット状の窪みが認められる。深さは0.26～0.42mを測り、埋土は黒茶色砂質土を呈する。須恵器片、土師器片が出土した。

1SK27 (Fig. 35)

当遺構は1SK28の東側に隣接し、1SD29を切る。平面プランは半楕円形状を呈し、幅1.3m、深さ0.21mを測る。内部の西側にはテラスを呈し、埋土は黒茶色砂質土を基調とする。土師器（小皿）が出土。

1SK28 (Fig. 35)

当遺構は1SK27の西側に隣接する。深さは0.02mと極めて残存状態が悪く、上層部の[illegible]圧若しくは包含層土が残存した痕跡の可能性が想定される。埋土は黒茶色砂質土を基調としており、遺物は土師器（小皿）が出土した。

3）出土遺物

A調査区

溝

1SD30 (Fig. 36、Pla. 33・34)

土師器

小皿（1～5）　[illegible]は淡橙白色を呈し、口径8.0cm、底径6.0cm、器高2.0cmを復原する。外底は糸切りで内外面の調整はヨコナデを施す。2は淡橙白色を呈し、[illegible]径6.0cmを復原する。摩耗のため調整不明であるが外底に糸切り痕が僅かに残る。3は淡赤橙色を呈し、底径8.0cm　を復原する。摩耗のため調整不明瞭だが内[illegible]面にはヨコナデ、外底には糸切り痕跡が看取される。4は底径8.0cmを復原する。淡黄橙色を呈し、外面下位はヨコナデ、その他は摩耗のため調整不明。5は淡白茶色を呈し、口径10.0cm、底径7.2cm、器高1.8cmを復原する。外底糸切り、内外面はヨコナデ。

皿（6）　口径11.0cm、底径10.0cm、器高1.3cmを復原する。外底は糸切り、内外面はヨコナデで見込みの一部でナデ調整が施される。胎土に黒色粒子、赤色粒子、雲母を含み、焼成はほぼ良好である。

坏（7～9）　7は底部細片で底径8.0cmを復原する。内外面はヨコナデ、外底は糸切りを施し、胎土に黒色粒子、赤色粒子、雲母を含む。色調は淡茶色を呈し、焼成は良好である。8は口径13.2cm、底径9.0cm、器高2.8cmを復原する。底部から体部にかけては内湾気味に立ち上がり口縁部はやや外反する。外底は糸切りで内面はヨコナデ、外面は摩耗のため調整不明である。胎土に黒色粒子、赤色粒子、雲母を含み、焼成は良好である。9は底部細片で底径9.0cmを復原する。著しく摩耗しており、内面一部にヨ コナデ痕跡が僅かに認められたのみである。

白磁

皿（10）　太宰府IX-1類に相当し、底径6.0cmを復原する。暗灰白色を呈した釉を全面施釉し、素地は暗灰白色を呈する。

同安窯系青磁

小碗（11）　底部細片で高台径5.0cmを復原する。素地は淡乳茶色を呈し、胎土に黒色粒子を少量含む。高

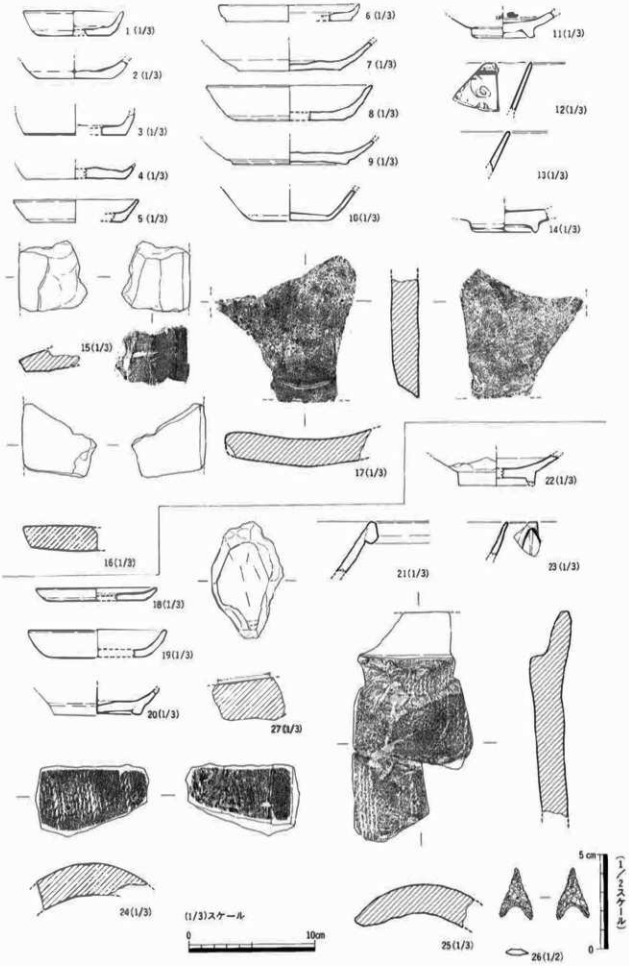


Fig. 36　A調査区出土遺物実測図（1/3・1/2）

台湖と体部外面は露胎で内面には淡緑茶色の透明釉を施す。外底中央部は削られ、見込みには貫入が認められる。太宰府Ⅰ類と思われる。

龍泉窯系青磁

碗（12～14）　12は外面無文、内面に花文を施す口縁部細片で太宰府Ⅰ-2類に相当する。13は細片で明白灰色の素地に暗茶緑色釉を施す。全体に貫入を認める。14は高台径5.0cmを復原する。畳付及び高台内は露胎で淡灰色の素地に淡青緑色釉を厚くかける。

瓦

丸瓦（15）　胴部の細片である。側面はヘラ切り後ヨコナデ、胴部の凸面及び凹面側縁はナデ、胴部凹面は布目痕跡が認められる。胎土は微砂粒、白色粒子、金雲母を含み、焼成は良好である。色調は暗灰黒色を呈する。

平瓦（16・17）　ともに胴部細片である。16は摩耗のため調整不明で色調は淡茶白色を呈する。胎土は1～2mm程度の砂粒、角閃石、金雲母を含み焼成は良好。17は側面ヨコナデ、胴部凹凸面はナデの調整痕が認められる。淡茶灰色を呈し、側面の一部に煤が付着する。胎土は細砂粒、金雲母を含み、離れ砂の角閃石が表面に付着する。

1SD32 (Fig. 36、Pla. 34)

土師器

小皿（18・19）　18は浅い小皿で口径9.6cm、底径8.0cm、器高1.0cmを復原する。摩耗のため調整不明であるが、外底には僅かに糸切り痕跡が残る。淡乳橙色を呈し、黒色・赤色粒子を含む。焼成は良好。19は口径10.8cm、底径7.4cm、器高2.2cmを復原する。淡灰茶色を呈し、体部から口縁部にかけては緩やかに内湾し立ち上がる。胎土は黒色粒子、金雲母、角閃石を少量含み、焼成は良好である。

坏×椀（20）　底部に高台が付着する。高台径7.0cmを復原し、外底はナデ、畳付けから体部にかけてはヨコナデ、体部内面はヨコナデ、見込みはナデの調整を施す。

土鍋（21）　口縁部細片で鍔部は玉縁状を呈する。外面はヨコナデ、内面は摩耗のため調整不明。微砂粒、金雲母を含み、焼成は良好である。外面に煤が付着する。

白磁

碗（22）　底部細片で素地は淡白灰色を呈し、淡白灰色の釉を高台部以外に施釉する。高台部は露胎である。

龍泉窯系青磁

碗（23）　口縁部細片で太宰府Ⅱ-b類に相当する。外面に鎬蓮弁を施し、明白灰色の素地に淡灰緑色の釉を内外面に施釉する。

瓦

丸瓦（24・25）　24は胴部細片で凸面には縄目叩き痕跡が認められる。凹面側縁はヘラ切り、凹面は布目痕跡が残る。淡白灰色を呈し、胎土は微砂粒、黒色粒子、金雲母を多く含む。表面には角閃石が付着し、焼成は良好である。25は胴部から玉縁部にかけての破片で胴部凸部に縄目叩き痕跡が残る。調整は表面が著しく摩耗しているため明らかではないが、胴部凹面はナデ、凹面玉縁面はヨコナデと思われる。淡乳茶色を呈し、微砂粒、金雲母、黒色粒子を少量含む。

石器

石鏃（26）　完形の石鏃で石材はサヌカイト製である。抉りの深い二等辺三角形を呈し、縁部に細かいリタッチを加えて刃部を造り出す。裏面中央には斜め方向からの剥離によるポジティブ面が残る。長さ2.75cm、最大厚0.3cm、重さ0.7gを計測する。

砥石（27）　天草産砂岩を石材とする。重さは176.3gを量る。表面を砥面としている。

B調査区

溝

1SD01 (Fig. 37、Pla. 34)

須恵器

鉢（28）　東播系片口鉢で色調は淡青灰色を呈する。

1SD04（Fig. 37、Pla. 34・35）

土師器

小皿（29～32）　口径7.8～9.4cm、底径6.8～8.0cm、器高1.2～1.5cmを測る。何れも外底糸切りで内外面はヨコナデ調整を施す。

坏（33）　口径13.5cm、底径9.1cm、器高 .7cmを測る。淡茶色を呈し、体部内外面はヨコナデ、底部内面はヨコナデ後ナデ、外底は糸切りで板状圧痕が認められる。

須恵器

鉢（34）　焼成不良で淡茶灰色を呈する片口鉢である。摩耗のため調整不明。

陶器

甕（35）　常滑産甕と思われ、肩部細片で格子押印文が施される。外面は暗赤茶色、芯は明灰茶色を呈する。

白磁

皿（36）　高台径4.0cmを復原する。淡灰色の素地に淡灰白色釉を内面及び体部外面に施釉する。内面見込みは蛇ノ目状に釉を掻き取る。太宰府III-1類。

龍泉窯系青磁

碗（37）　口縁部細片で外面に連弁文を描く。太宰府II-a 類。

1SD23（Fig. 37、Pla. 35）

土師器

小皿（38）　淡茶褐色を呈し、口径8.0cm、底径6.6cm、器高1.3cmを復原する。外底は糸切りで内外面はヨコナデを施す。

坏（39）　淡橙褐色を呈し、内外面はヨコナデを施す。外底は糸切りで板状圧痕を認める。

須恵器

鉢（40）　東播系の片口鉢である。淡灰色を呈し、内外面はヨコナデを施す。

瓦器

椀（41）　高台径7.1cmを復原する。内面は白灰色、外面は暗灰色を呈し、調整は著しく摩耗しているため不明である。

青磁

碗（42）　口縁部細片で淡灰色の素地に暗緑色の透明釉をかけるが端部は釉が薄い。

土坑

1SK02（Fig. 37、Pla. 35）

土師器

小皿（43）　淡灰茶色を呈し、口径10.0cm、底径8.7cm、器高1.5cmを復原する。外底は糸切り内外面はヨコナデ調整を施す。

青磁

碗（44）　口縁部細片で外面に鎬連弁文が描され、淡灰色の素地に暗緑色釉をやや厚めにかける。太宰府II-b 類。

流路

1SX12（Fig. 37、Pla. 35）

瓦器

椀（45）　高台径7.0cmを復原する。暗灰色を呈し、調整については摩耗のため不明。

白磁

皿（46）　口縁部細片で淡灰色の素地に淡緑白色の透明釉をかける。全体に貫入を認め、内面見込みに花文を描く。太宰府VIII-1b か。

青磁

碗（47）　淡白色の素地に青緑色の透明釉を施し、内面に花文を描く。太宰府 I -3a。

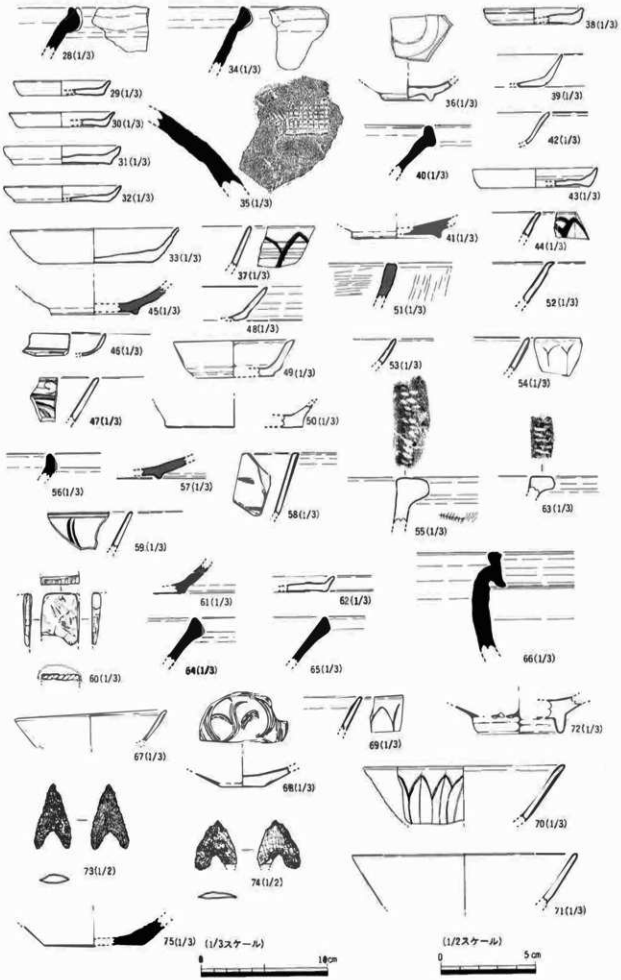


Fig. 37　B・C調査区、表土、包含層出土遺物実測図（1/3・1/2）

1SX14（Fig. 37、Pla. 35・36）

土師器

坏（48）　体部細片で表面摩耗のため調整不明。胎土は黒色粒子、赤色粒子を含み焼成はやや不良である。色調は淡橙白色を呈する。

小坏（49）　淡白茶色を呈し、口径9.6cm、底径6.4cm、器高2.9cmを復原する。外底は糸切り、内外面はヨコナデである。

坏×椀（50）　底部細片で底径11.0cmを復原する。休部下位にヨコナデ調整痕が僅かに残り、他は調整は摩耗のため不明。淡茶白色を呈し、微砂粒、黒色粒子、角閃石を少量含む。

瓦質土器

火鉢（51）　淡灰茶色を呈し、口縁端部はヨコナデ、内外面は刷毛目を施す。

白磁

碗（52）　淡灰白色の素地に暗灰緑色釉を施す。太宰府Ⅴまたは Ⅷ類。

龍泉窯系青磁

碗（53・54）　ともに口縁部細片で53は無文であるが、54は外面に鎬連弁文が施される。54は太宰府Ⅱ-b類。

1SX15（Fig. 37、Pla. 36）

土師器

土鍋（55）　口縁端部形は台形状を呈し、端部に糾目文が施される。

須恵器

鉢（56）　口縁部細片で玉縁状を呈する。東播系か。

瓦器

椀（57）　底部細片で調整は摩耗のため不明。色調は淡白灰色を呈する。

白磁

碗（58）　淡灰白色の素地に暗灰緑色釉を施す。太宰府Ⅴまたは Ⅷ類。

龍泉窯系青磁

碗（59）　口縁部細片で淡灰白色の素地に淡青緑色の透明釉を施す。

石器

砥石（60）　泥岩製の砥石で表面及び側面の3面を砥面として使用し、細かな線刻が残る。

ピット

1SP20（Fig. 37、Pla. 36）

瓦器

椀（61）　底部細片で摩耗のため調整不明。色調は淡茶灰色を呈する。

C調査区

土坑

1SK27（Fig. 37、Pla. 36）

土師器

小皿（62）　底部細片で外底は糸切り、内外面はヨコナデか。

表土（Fig. 37、Pla. 36・37）

土師器

土鍋（63）　口縁部上端面に糾目文を施し、断面形は台形状を呈する。

須恵器

鉢（64・65）　ともに東播系と思われ、口縁端部が玉縁状を呈する。64は淡白灰色を呈し、胎土に微砂粒、黒色粒子、白色粒子を含む。焼成は良好である。65は図面上で復原していないが口径は26.0cm前後と思われる。淡茶灰色を呈し、胎土は微砂粒、黒色粒子、白色粒子を少量含む。焼成良好。

陶器

甕（66）　常滑産と思われ、口縁部形状は「N」字状を呈する。色調は明黒灰色を呈し、内外面はヨコナデを施す。

白磁

碗（67）　口縁部細片で口径12.0cmを復原する。口縁端部は口禿げを呈し、明白灰色の素地に明青白色釉を施す太宰府IX類。

龍泉窯系青磁

皿（68）　底径3.4cmを復原する。内面見込みに花文が施される。明灰色の素地に暗茶緑色釉の透明釉を外底以外に施釉する。太宰府Ⅰ-2類。

碗（69～71）　69は外面に連弁文を施し、明白灰色の素地に淡灰緑色の釉を内外面に施釉する。70は外面に鎬連弁文を施し、明灰白色の素地に暗緑色釉（暗く）施釉する。71は内外面無文で淡灰色の素地に暗茶緑色釉を施釉する。69はⅡ-a類、70はⅡ-b類、71はⅡ-1類に相当する。

鉢（72）　高台径6.4cmを復原し、素地は明茶灰色を呈する。高台内は露胎で、暗青緑色釉を厚く施釉する。

石器

石鍋（73・74）　73はやや厚めの素材を利用した完形の石鍋で石材は黒曜石製である。抉りの深い二等辺三角形を呈し、表裏面に細かいリ　ッチを加えて剥離面を除去する。長さ3.4cm、最大厚0.5cm、重さ1.7gを計測する。74はやや薄めの剥片を利用した黒曜石製石鍋で右側脚を僅かに欠損する。表面の右半部はポジティヴ面　裏面の左半部はネガティヴ面を大きく残す。重さは1.3gを量る。

包含層（Fig. 37、Pla. 37）

須恵器

鉢（75）　東播系と思われ、底径は8.0cmを復原する。明白灰色を呈し、胎土に微砂粒、黒色・白色粒子、金雲母を含む。焼成は良好である。

4）小結

溝

当調査区は北部と南部に存在する丘陵に挟まれた谷部にあたり、西流する倉目川の南岸に隣接した標高5～6ｍの低地にある。両期になると東部及び南部からの排水が集中する場所でもあり、調査中においても幾度となく現場内が水没する環境にあった。当地は以前からこういった悪条件の環境にあったためか、調査区内から検出した多くの溝（1SD01・03～06・08～10・23・29・30）は、何れも南方の丘陵部から北方の河川へと流れ込む南北溝（　　）、発掘した調査成果を踏まえると遺構は雨水などの排水路として機能していた可能性が想定されるものである。今回確認した溝の残存状況からは、人工的に掘削されたと考えられる1SD03・04・29・30と自然流路と想定される1SD01・05・06・08～10・13・23が存在していたものと思われ、これらは区画溝としての機能も持ち合わせられていたことも想定される。各溝の年代については流れ込みによる出土遺物が殆どであったので特定に至ることはできないが、出土遺物から13Ｃ後半以降の埋没であったと考えておきたい。なお、年代観の指標としては包含層土に中世以降の遺物が認められることから、検出された遺構は全てこれより遡るものと捉えることができる。

出土遺物

当地より南方約300ｍ地点には上妻郡広川荘の鎮守社である熊野神社とその神宮寺である坂東寺が点在する。何れも創建年代は不詳であるが、画期を向かえるのは広川荘が熊野社領となった保延四年（1138）以降で　あ、坂東寺境内には筑後地方で最古の記念銘「貞永元年（1232）」を有する石造五重塔（県指定建造物）が存在する。当調査区からは当該期に比定される輸入陶磁器や瓦が僅かながら認められいることからも、今後これらとの関連が期待される。

【注】

・今回使用した陶磁器分類は以下の文献を指標として表記した。

「太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－」『太宰府市の文化財第49集』太宰府市教育委員会（2000）

【長さの単位はcm、○）は推定値を示す】

Fig. No — 遺物No	遺構番号	R番号	名称	器形	口径		底径(高台径)		器高	備考
36 — 1	ISD30	8	土師器	小皿	○	8.0	○	6.0	2.0	外底：糸切り
36 — 2	〃	7	〃	〃			○	6.0		〃
36 — 3	〃	3	〃	〃			○	8.0		〃
36 — 4	〃	2	〃	〃			○	8.0		〃
36 — 5	〃	14	〃	〃	○	10.0	○	7.2	1.8	〃
36 — 6	〃	1	〃	皿	○	11.0	○	10.0	1.3	〃
36 — 7	〃	4	〃	坏			○	8.0		〃
36 — 8	〃	6	〃	〃	○	13.2	○	9.0	2.8	〃
36 — 9	〃	5	〃	〃			○	9.0		〃
36 — 10	〃	9	白磁	皿			○	6.0		
36 — 11	〃	10	河床瓶系青磁	碗			○	5.0		太宰府Ⅱ-b類
36 — 12	〃	17	龍泉窯系青磁	〃						太宰府Ⅰ類
36 — 13	〃	15	〃	〃						太宰府Ⅰ類？
36 — 14	〃	16	青磁	〃						
36 — 15	〃	13	瓦	丸瓦						
36 — 16	〃	12	〃	平瓦						
36 — 17	〃	11	〃	〃						
36 — 18	ISD32	1	土師器	小皿	○	9.6	○	8.0	1.0	外底：糸切り
36 — 19	〃	2	〃	〃	○	10.8	○	7.4	2.2	〃
36 — 20	〃	3	〃	坏×椀			○	7.0		
36 — 21	〃	4	〃	土錘						
36 — 22	〃	5	白磁	〃						
36 — 23	〃	6	龍泉窯系青磁	椀						太宰府Ⅱ-b類
36 — 24	〃	7	瓦	丸瓦						
36 — 25	〃	8	〃	〃						
36 — 26	〃	10	石器	石臼						
36 — 27	〃	9	〃	砥石						大板成
37 — 28	ISD01	1	須恵器	鉢						東播系
37 — 29	ISD04	3	土師器	小皿	○	7.8	○	6.8	1.2	外底：糸切り
37 — 30	〃	2	〃	〃	○	8.4	○	7.0	1.2	〃
37 — 31	〃	4	〃	〃	○	9.4	○	8.0	1.5	〃
37 — 32	〃	1	〃	〃	○	9.4	○	7.6	1.2	〃
37 — 33	〃	5	〃	坏		13.5		9.1	2.7	〃
37 — 34	〃	6	須恵器	鉢						東播系
37 — 35	〃	7	陶器	壺						常滑系
37 — 36	〃	8	白磁	皿			○	4.0		太宰府Ⅱ-1類
37 — 37	〃	9	龍泉窯系青磁	碗						太宰府Ⅰ-a類
37 — 38	ISD23	1	土師器	小皿	○	8.0	○	6.6	1.3	外底：糸切り
37 — 39	〃	2	〃	〃						外底：糸切り及び破状圧痕
37 — 40	〃	5	須恵器	鉢						東播系
37 — 41	〃	3	瓦器	椀			○	7.1		
37 — 42	〃	4	青磁	碗						
37 — 43	ISK02	1	土師器	小皿	○	10.0	○	8.7		外底：糸切り
37 — 44	〃	2	龍泉窯系青磁	碗						太宰府Ⅰ-b類
37 — 45	ISX12	3	瓦器	椀			○	7.0		
37 — 46	〃	1	白磁	皿						太宰府Ⅱ類-1b類
37 — 47	〃	2	龍泉窯系青磁	碗						太宰府Ⅰ-3a類
37 — 48	ISX14	1	土師器	小皿						外底：糸切り
37 — 49	〃	3	〃	小皿	○	9.6	○	6.4	2.9	〃
37 — 50	〃	2	〃	坏			○	11.0		
37 — 51	〃	4	瓦質土器	すり鉢						
37 — 52	〃	5	白磁	碗						太宰府Ⅴ類b-1類
37 — 53	〃	6	龍泉窯系青磁	〃						
37 — 54	〃	7	〃	〃						太宰府Ⅰ-b類
37 — 55	ISX15	1	土師器	土錘						端部に縄目文
37 — 56	〃	3	須恵器	鉢						東播系
37 — 57	〃	2	瓦器	椀						
37 — 58	〃	4	白磁	碗						太宰府Ⅴ類b-1類
37 — 59	〃	5	龍泉窯系青磁	〃						太宰府Ⅰ-4類
37 — 60	〃	6	石器	砥石						花崗製
37 — 61	ISP20	1	瓦器	椀						
37 — 62	ISK27	1	土師器	小皿						外底：糸切り
37 — 63	表土	3	〃	土錘						〃
37 — 64	〃	2	須恵器	鉢						東播系
37 — 65	〃	1	〃	〃						〃
37 — 66	〃	6	陶器	壺						常滑系
37 — 67	〃	7	白磁	皿	●	12.0				太宰府Ⅸ類
37 — 68	〃	11	龍泉窯系青磁	〃			○	3.4		太宰府Ⅰ-2類
37 — 69	〃	4	〃	碗						
37 — 70	〃	10	〃	〃	○	16.0				太宰府Ⅰ-b類
37 — 71	〃	8	〃	〃	○	18.0				
37 — 72	〃	9	〃	鉢			○	6.4		
37 — 73	〃	5	石器	石臼						
37 — 74	〃	12	〃	〃						
37 — 75	包含層	1	須恵器	鉢			●	8.0		東播系

Tab. 10　出土遺物観察

5．蔵数島崎田遺跡（1次調査）

1）はじめに

蔵数島崎田遺跡は筑後市大字蔵数95に所在する。境川左岸、蔵数の微丘陵先端部の谷地形の出口にあたる標高6mほどの平地である。明治14年以前は「島崎」という小字であった。

試掘調査では、大型の溝状遺構が確認された。調査対象面積は315㎡である。調査は平成16年7月7日より始められ、同年8月26日にこれを終了した。

2）検出遺構

耕作土を南で0.1mほど、北側はさらに0.2mほど掘り下げると灰白色の遺構面となる。遺構は土壙4、溝状遺構4、井戸1、溜り状遺構1、ピット群を確認した。

土壙

1SK01（Fig. 40、Pla. 42）

調査区北端で確認された不定形土壙で、北側へ延びる。西側に1SK02、南側に1SX03・04が位置する。土層観察の結果、北側に攪乱が存在することが判明しており、掘削時にはここから大量の水が沸き出している。断面図からは判りにくいが、遺構床面はこの攪乱に向かい擂鉢状に緩やかに傾斜している。この事から野井戸の可能性もある。

この遺構からは須恵器擂鉢、須恵器片、土鍋、土師器坏、土師器不明片、土師器片、瓦器片、青磁片、砥石石材、瓦片、骨片などを出土している。

Fig. 38　蔵数島崎田遺跡　位置図　（S＝1/2,500）

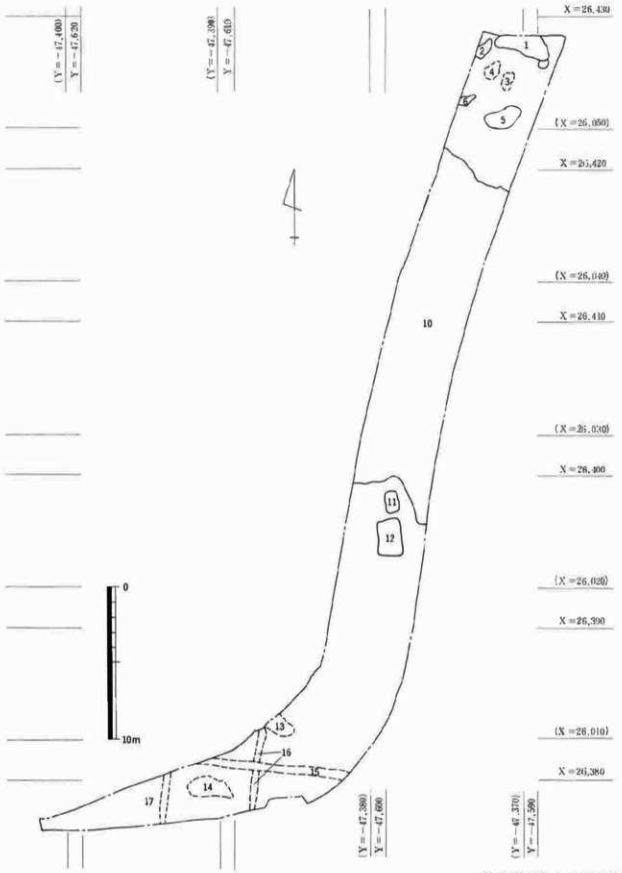


Fig. 39　蔵数島崎田遺跡　遺構配置図　（S＝1/250）

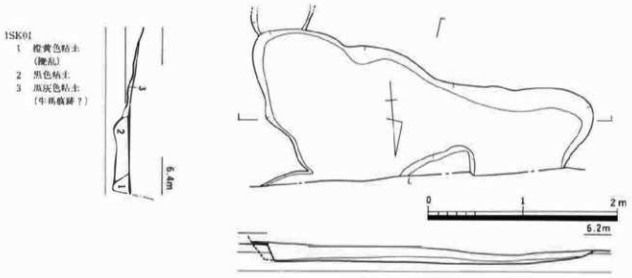


Fig. 40　1SK01　(S＝1/40)

1SK02 (Fig. 41、Pla. 43)

調査区北側で確認された楕円型土壙で、東側に1SK01、南側に1SD06が位置し、一部は調査区西側に延びる。長軸約1.6m、短軸約0.7m、深さ約0.1m。主軸の傾きはN—22°—Eを測る。埋土は暗灰色粘質土による単一埋土であり、遺構の輪郭は牛馬蹄跡により乱れている。

この遺構からは須恵器坏、須恵器片、土師皿、土鍋、土師器片、砥石を出土したが、いずれも図化しうる物ではなかった。

1SK05 (Fig. 42、Pla. 46～48-1)

調査区北側で確認された楕円形の土壙で、北側に1SX02・03、西側に1SD06、南側に1SX10が位置する。長軸約2.5m、短軸約1.0m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN—72°—Eを測る。平面形は複雑だが、土層からは1・2層による自然埋没と考えられる。

この遺構からは土鍋、土師皿、土師器片、白磁碗、白磁片、青磁片、骨片が出土している。(Fig. 45)

1SK11 (Fig. 42、Pla. 44～45)

調査区中央部で確認された角丸長方形の土壙で、北側に1SX10、南側に1SE12が位置する。長軸約1.2m、短軸約0.8m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN—10°—Eを測る。埋土は黒灰色粘質土を基本としている。

この遺構からは土師器坏、土師皿、土師器片、石材を出土している。(Fig. 45)

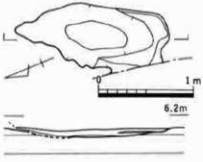


Fig. 41　1SK02　(S＝1/40)

溝状遺構

1SD06 (Fig. 43、Pla. 48-2)

調査区北側をN—70°—Eに走る溝で、約1.3m分を確認した。深さ約0.2m。大部分は西側へ延びると考えられる。北側に1SK02、東側に1SK05、南側に1SX10が位置する。埋土は暗茶灰色粘質土の単一埋土である。

この遺構からは土師器片、瓦器片、石材を出土したが、図化

1SK05
1 暗灰茶色土
2 黒茶色粘質土
3 茶色土
4 黒色土・灰色粘土混合層
5 黒茶色土
6 暗灰茶色土（半焼痕？）
7 灰色粘質土

1SK11
1 灰色粘土
2 黒灰色粘質土

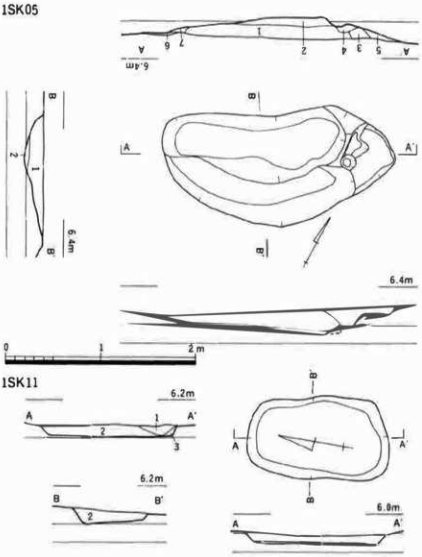


Fig. 42　1SK05・11　(S＝1/40)

しうる物ではではなかった。

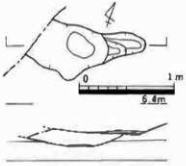
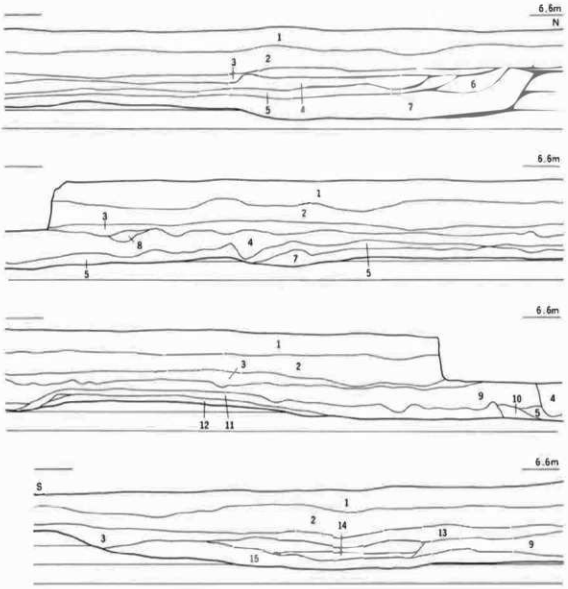


Fig. 43　1SD06
(S＝1/40)

1SD15 (Fig. 39)

調査区南側で約9.5m分を検出した。主軸の傾きはN—84°—Wを測る。堀土は地山の灰色粘質土と表土の褐色土から成る混合土である。この遺構からは土管を出土した。この土管は地元の方によると藏敷集落から発し西へ延びているとのことであった。そのため現代の遺構と判断した。

ここからは弥生土器片、土師器片、瓦器片、青磁片、プリント柄磁器片、陶器片、黒曜石片、土管などが出土した。プリント柄磁器片と土管以外は混入品と考えている。遺物はいずれも図化しうる物ではなかった。



1SX10

1	暗黄色土（耕作土、中世遺物含む）	6	暗黄灰色粘土	11	暗灰色粘土
2	灰色土（耕作土、中世遺物含む）	7	黒色粘土	12	青灰色粘土（地山）
3	暗灰色砂質土（耕作土）	8	暗灰色粘土	13	黒色粘土
4	灰色粘土（植物遺体含む）	9	灰色粘土	14	オリーブ色粘土
5	赤灰色粘土	10	明灰色シルト	15	青灰色シルト（粒子粗。植物遺体含む）

Fig. 44　1SX10土層断面　（S＝1/40）

1SD16（Fig. 39）

調査区南側で約5.5m分を検出した。主軸の傾きはN－7°－Eを測り、1SD15に切られている。埋土は地山の灰色粘質土と表土の褐色土から成る単一の混合土で、1SD15より色調が暗い程度であった。調査の結果、竹製の暗渠を確認した。竹材は腐敗が進み、底部を残すのみであった。このためこの遺構は近現代の物と判断した。

この遺構からの出土遺物はなかった。

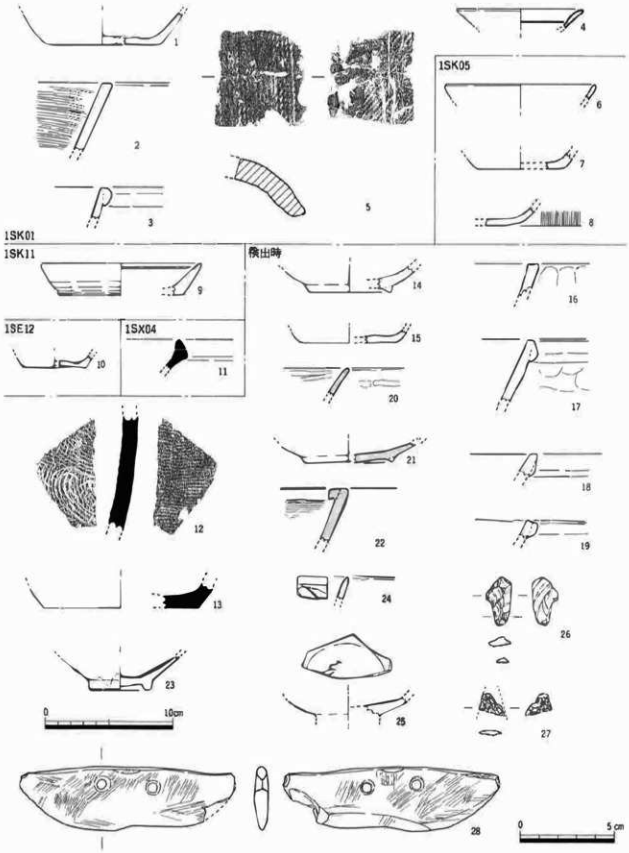


Fig. 45　出土遺物　（S＝1/2・1/3）

1SD17（Fig. 39）

調査区南側で約3.4m分を検出した。主軸の傾きはN－5°－Eを測り、1SD16とほぼ平行となる。埋土の状況も同じであったため近現代の遺構と判断し、精査は行っていない。

上記の理由から出土遺物は不明である。

井戸

1SE12（Fig. 39）

調査区南側で検出された、角丸長方形の遺構である。北側に1SX10・1SK11が位置する。長軸約2.4m、短軸約1.5m、主軸の傾きはN－5°－Wを測る。1mほど掘り下げたところで湧水が多くなり精査できないと判断、作業を中断した。埋土は暗灰色粘質土の単一であり、埋没状況を推測できない。現時点ではこの遺構を「野井戸」と判断している。

この遺構からは須恵器片、土師皿、土師器坏、土師器片、黒曜石片が出土している。

溜り状遺構

1SX10（Fig. 44、Pla. 39-2～41）

調査区北側～中程にかけ、約22.8m分を確認した。地元の方の話によると、この辺りには池もしくは沼があったとの事であり、これに相当する可能性もある。土層観察の結果、北側、中央部、南側の3ケ所に落ちが確認できる。北側および中央部は自然堆積の後一度西側と同時に掘り直しがなされている。南側についても同様の堆積状況を示す。遺構の落ち床面はいずれも湧水が確認できたが、南側は東から西へと水が流れ出す状況であった。

この遺構からは弥生土器片、黒曜石片を数点確認したのみで、いずれも図化しうる物ではなかった。

足跡痕跡（Pla. 39-1）

この調査区では遺構面北側と南側で多くの足跡痕跡を確認した。埋土はいずれも黒色粘質土～褐色粘質土である。内北側の集中部分を1SX02・03とし土層観察を試みたが、いずれも浅く、すぐに地山となった。

南側では1SD15・16周辺で多くの足跡を確認、1段下がったところで茶褐色の溜り状の部分を1SX13・14として半裁した。結果、足跡が集中しているのみと判断した。これらの遺構については1SD15などとの切り合いなどは不明確ではあるが、埋土はいずれも黒色粘質土～褐色粘質土であり、同時期のものと判断した。

これら足跡群については平面および立面は残していない。遺物は土師器を中心としたものを出土したが、図化しうるものではなかった。

3）出土遺物（Fig. 45、Pla. 49）

1SK01出土遺物（Fig. 45、Pla. 49）

1は土師器の坏の底部片である。底部廻転糸切り。

3は土鍋の口縁部小片である。玉縁状口縁を有し、外面には煤の付着が見られる。

2は土師器の鉢の口縁部小片である。内面はハケ目が残るが外面は磨滅が激しい。

4は青磁皿の口縁部破片である。淡青灰色の素地に明緑色の透明釉を施す。底部付近には貫入が発達している。

5は丸瓦の小片である。内面工具ナデ、外面は縄目ののちナデが施されている。

1SK05出土遺物（Fig. 45）

6は土師器の坏の口縁部破片である。

7は土師器の皿の底部破片である。底部廻転糸切り。

8は土鍋もしくは土製の焙烙の底部小片である。

1SK11出土遺物（Fig. 45）

9は土師器の坏の破片である。底部廻転糸切り。

1SE12出土遺物（Fig. 45、Pla. 49）

10は土師器の皿の底部破片である。底部廻転糸切り。

1SX04出土遺物（Fig. 45、Pla. 49）

11は須恵器の鉢の口縁部小片である。東播系。

検出面出土遺物（Fig. 45、Pla. 49）

12は須恵器の甕の胴部小片である。外面平行タタキ、内面同心円文。

13は須恵器の壺の底部破片である。

14は土師器の埦の底部破片である底部貼付け高台。

15は土師器の皿の底部破片である。底部廻転糸切り。

16は土師器の鉢もしくは素口縁の土鍋の口縁部小片である。外面には煤が付着している。

17～19は土鍋の口縁部小片である。いずれも玉縁状の口縁を有する。

20は瓦器埦の口縁部小片である。

21は瓦器埦の底部破片である。磨滅が激しく、内面の芯黒が表面に現れている。

22は瓦器の鉢の口縁部小片である。

23は白磁の小碗の底部である。外面高台部分は無釉。内面は高台径より小さい円圏を有するが、沈線状の部分と1段削られたように見える部分とがある。乳灰色の素地に青味を有する濁った釉を施している。

24は青磁の碗の口縁部小片である。内面には片切彫と沈線により文様が施されている。外面には細い貫入が発達し、口唇部の釉は磨滅の為か傷んでいる。淡灰色の素地に暗緑色の透明釉を施している。竜泉系か。

25は青磁の碗の底部小片である。内面見込に花文のスタンプを施している。淡茶灰色の素地に緑青色の透明釉を施している。釉は内外面ともに貫入が発達している。

26は石錐の軸部と思われる破片である。サヌカイト製。

27は石鋲の胴部片である。黒曜石製。

28は石包丁である。一部を欠損するがほぼ完形で、刃部は内彎する。使用痕はほとんど観察できない。輝緑凝灰岩製。

4）小結

この調査区は藏数丘陵上に所在する弥生～古墳時代の藏数遺跡の周縁部にあたる。検出時に出土した弥生時代の石器はここからの流入品であろう。検出時に採集された中世遺物は表土にも同時期のものが見られたため、これに起因するものと考えられる。1SK11・1SE12は1SX10の上層埋土の下から検出されているが、遺構出土の遺物は総じて小片で数も少ないため限定しうるものではない。

藏数地区は、中世戦国時代、坂東寺熊野神社の三光坊なる人物が藏数に僧坊を設け、僧兵を抱え肥前龍造寺氏と対立し滅ぼされたという伝承がある。ここは三瀦荘西牟田郷に近く、中世期には三光坊に代表されるような他勢力を警戒するような存在があったと想像できる。

近世になると藏数周辺では溜め池の建設や水路の開削に伴い農地が開発されていく。調査区西側を流れる境川は井原堤（松尾溜池、1754）を水源とし、調査区を潤していた水路は大堤や河原池（築堤年代は不明だがともに落政期）を水源としている。藏数周辺の開発が元禄期（1688～1703）より前に始められているが、この時期の水田開発に伴う土砂の移動の可能性は、1SX10の埋土状況や地元の方の、この付近に池もしくは沼があったという話から低いと思われる。

本調査区においては人の生活痕跡は認められたが、それ以外は判断することができない。ただ水田化す

る際の土は瓢箪丘陵上からもたらされたという推論のみの結果である。

【参考文献】
有田乙次郎　『筑後松原郷土史』　1988　筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
佐々木隆彦　『瓢箪山古墳群一瓢ノ木遺跡の調査』　2000　筑後市教育委員会
筑後市史編さん委員会　『筑後市史』　1998　筑後市

Tab. 11　蔵数島崎田遺跡　遺構一覧

Fig.	番号	遺構番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	主軸	平面形状	断面形状	出土遺物	時期	備考
40	1	ISK01		——	——	——	——	不定形	不明	須恵器、土師器、土製、青磁、丸瓦、骨片		
41	2	ISK03		1.6	0.7	0.1	N-32°-E	楕円形	皿状	須恵器、土師器、鉄釘		
39	3	ISK04		1.4	0.8	0.0	N-32°-E	不定形	不定形	土師器		牛角底部
39	4	ISK04		1.2	0.8	0.0	N-7°-E	不定形	不定形	須恵器		牛角底部
41	5	ISK05		2.6	1.0	0.2	N-72°-E	楕円形	不定形	土師器、白磁、青磁、骨片		
41	6	ISK06		11.30	6.2	0.2	N-70°-E	楕円	凹字型	土師器、瓦器		
		７～９丸穴										
41	10	ISK10								弥生土器、須恵器片		
42	11	ISK11		1.2	0.8	0.2	N-10°-E	不定形(方形)	皿状	土師器		
39	12	ISK12		2.4	1.5	——	N-5°-E	角丸長方形	凹字型	須恵器、土師器、須磨石片		牛角付き
39	13	ISK13		11.5	1.1	——	——	不定形	不定形	土師器、白磁、鉄釘片		牛角底部
39	14	ISK14		3.1	1.3	——	——	不定形	不定形	弥生土器、土師器		牛角底部
39	15	ISK15		(9.5)	0.5	——	N-84°-W	——	(1)等高線	弥生土器、土師器、S.D.、弓道、鉄釘、須恵器	現代	地鎮祭
39	16	ISK16		(3.4)	0.4	——	N-7°-E	——	溝状	N.D.	現代	暗渠
39	17	ISK17		(3.3)	0.4	——	N-5°-E	——	(土)面	NDN(土)面	現代	土面(土)(1)(2)対(1)面上
											現代	

Tab. 12　蔵数島崎田遺跡　出土土器一覧

Fig.	No	遺構	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	色調(外/内)	胎土	焼成	備考
45	1	ISK01	土師器	坏		(9.0)		底部1/4	橙赤色	精良、赤色粒子多く含む	不良	底部糸切り
45	2	ISK01	土師器	鍋				口縁部破片	淡黄色	1～2mmの砂粒多く含む	やや良	
45	3	ISK01	土師器	鍋				口縁部破片	淡褐色	細砂粒、金雲母多	良好	玉縁状口縁、外面格子目痕
45	4	ISK01	須恵	甕	(10.0)			口縁部1/8	淡黄灰色/明緑灰色	精良	良好	底部付近は第七期遺
45	5	ISK01	瓦	丸瓦				縁片	明色	砂粒ごく少量	良好	外面横位のたたき、内面工具痕
45	6	ISK05	土師器	坏	(12.4)			口縁部1/10	淡黄茶色	砂粒多く	不良	
45	7	ISK05	土師器	鉢		(7.0)		底部1/3	淡黄茶色	微細砂粒含む	不良	
45	8	ISK05	土師器	鍋(坏?)				底部破片	黒茶色	細砂粒、金雲母、角閃石を含む	やや良	外底部糸切り
45	9	ISK11	土師器	坏	(12.6)	(10.6)	2.5	1/12	淡黄色	微細砂少量	不良	底部糸切り
45	10	ISK12	土師器	甕		(5.2)		底部1/3	淡黄色	微細砂少量	不良	底部糸切り
45	11	ISK04	須恵器	鉢				口縁部破片	明黄色	微細砂粒少量	良好	重複部、遺構は中世中頃
45	12	検出時表採	須恵器	甕				胴部破片	灰色	砂粒含まず	良好	外面平行タタキ、内面同心円文
45	13	検出時表採	須恵器	壺		(12.6)		底部1/3	暗青灰色	砂粒含まず	良好	
45	14	検出時表採	土師器	坏		(6.4)		底部1/5	淡黄茶色	砂粒含まず	不良	高台あり
45	15	検出時表採	土師器	鉢		(7.2)		底部1/5	淡黄茶色	砂粒含まず	不良	底部糸切り
45	16	検出時表採	土師器	鍋(鉢)				口縁部破片	明褐色	細砂粒少量、金雲母含	やや良	外面横位痕
45	17	検出時表採	土師器	鍋				口縁部破片	黒褐色/茶褐色	細砂粒少量、金雲母・角閃石多	良好	玉縁状口縁
45	18	検出時表採	土師器	鍋				口縁部破片	淡黄茶色	1～2mm砂粒多く、角閃石	やや良	玉縁状口縁
45	19	検出時表採	土師器	鍋				口縁部破片	淡茶褐色	1mm砂粒少量、金雲母多	やや良	玉縁状口縁
45	20	検出時表採	瓦器	鍋				口縁部破片	暗黒色～黒灰色	精良	良好	縁・・・ケズ
45	21	検出時表採	瓦器	鍋		(7.0)		底部1/3	精良	砂粒含まず	不良	表面剥落激しい
45	22	検出時表採	瓦器	鉢				口縁部破片	明色	砂粒含まず	やや良	
45	23	検出時表採	白磁	小碗		(5.0)		底部1/3	乳白色(青白磁風)	精良	良好	外底部無釉、見込みに沈線で圏線
45	24	検出時表採	青磁	鍋				口縁部破片	明灰色/明緑灰色	精良	良好	色調は、明緑灰色は第7～8期、明灰色は第4
45	25	検出時表採	青磁	鍋				底部1/3	明灰色/緑灰色釉	精良	良好	色調は、明灰色は第4～5期、緑灰色は第6期

Tab. 13　蔵数島崎田遺跡　出土石器一覧

Fig.	No	遺構	種別		全長(cm)	全幅(cm)	厚厚(cm)	重量(g)	石材	使用痕	新補痕	備考
45	26	検出時表採	石鏃		——	1.3	0.5	1.2	サヌカイト	極微		
45	27	検出時表採	石鏃		——	——	0.3	0.4	無斑石	無微(先端はよく使用痕大)		
45	28	検出時表採	石製工		11.4	3.4	0.7	34.8	輝緑凝灰岩	一般大側		

第4章　結語

今回の調査は、北と南の地点でその様相に違いを見いだせる。

北側2遺跡（熊野水町遺跡、瀧数島崎田遺跡）においては中世にさかのぼれそうな遺構は無く、近代の所産と思われる遺構が中心である。これは本報告でも述べているように、海概施設の充実に伴う瀧数集落（元瀧数）の移動とこれに伴う開発に由来するものと考えられる。

一方南側の3遺跡（熊野松ノ下遺跡、熊野五反田遺跡、熊野宮ノ後遺跡）からは中世遺物が多く出土し、南側に位置する坂東寺熊野神社（単に「熊野神社と呼ばれる）とその神宮寺・坂東寺との関連が想定される。坂東寺は伝教大師・最澄による創建伝承を有する寺院で、明治以前は熊野集落は坂東寺村とも称している。また熊野神社初期の文書においても「坂東寺村」という記述が見られるため、熊野神社よりは創建は古いと考えられる。一方の熊野神社は広川荘が熊野社領となった保延4年（1138）以降に勧請されたもので、戦国期に武士の横領により広川荘が崩壊するまでその中心として勢力を誇っている。しかしながら、倉目川流域において坂東寺熊野神社に関する施設の伝承はなく、これら3遺跡の成果は広い意味での文化財の空白地帯であった波当地においての重要な成果であったといえよう。ただ、調査区が狭小なため、その性格や細かな時期判定までは出来ないのが難点となっている。

は場整備事業は今後倉目川上流と瀧数丘陵北部（境川流域）に沿って進められる予定となっており、これから先に埋蔵文化財が新たに確認される可能性がある。今回の調査は今後この地域の調査が実施される際に遺跡の時代背景を考えるための1つの指標となり、今回明確に出来なかった報告遺跡の性格等が解明される事を期待し、今回の報告としたい。

【註】

「坂東寺熊野神社」とは、宮内に多く存在する「熊野神社」と区別するため熊野集落の由来であった「坂東寺村」の地名を頭に冠しただけで、熊野神社の正式呼称ではない。

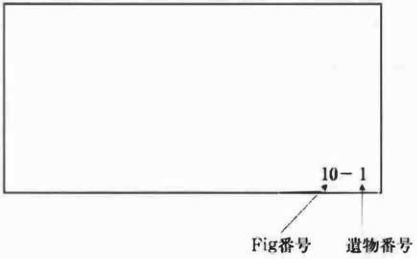
【参考文献】

筑後市史編さん委員会・編　『筑後市史』　筑後市史編さん委員会　1995

PLATE

凡　例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



1　熊野水町遺跡　全景（東から）

2　熊野水町遺跡　A区　全景（上から）

1　熊野水町遺跡　B区　全景（上から）

2　熊野水町遺跡　C区　全景（上から）

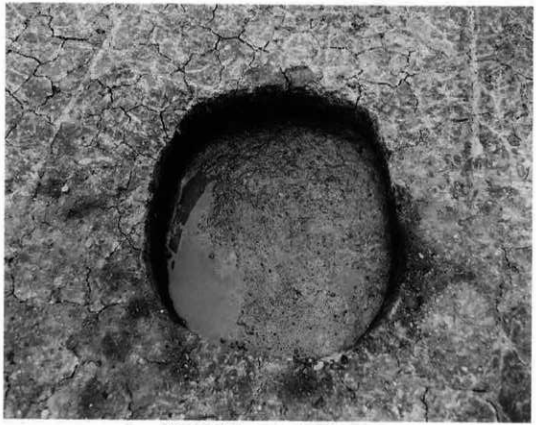
1　熊野水町遺跡　1SK01検出状況（北から）

2　熊野水町遺跡　1SK01土層断面（南から）

1　熊野ヵ水町遺跡　1SK01完掘状況（南から）

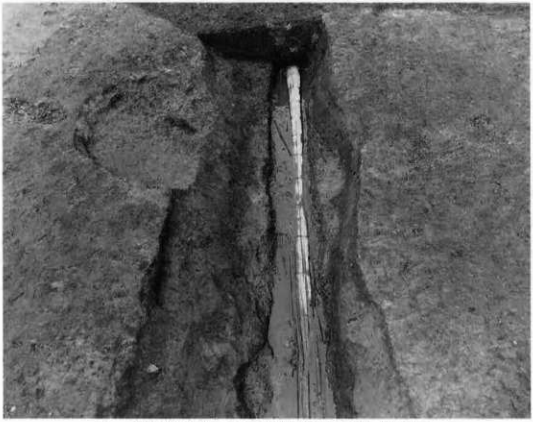
2　熊野ヵ水町遺跡　1SK04検出状況（北から）

1　熊野水町遺跡　1SK04土層断面（南から）



2　熊野水町遺跡　1SK04完掘状況（南から）

1　熊野水町遺跡　1SD05土層断面（南から）



2　熊野水町遺跡　1SD05竹製暗渠出土状況（南から）

1　熊野水町遺跡　1SD10土層断面（西から）

2　熊野水町遺跡　1SD10完掘状況（西から）

1　熊野水町遺跡　1SD25土層断面（北から）

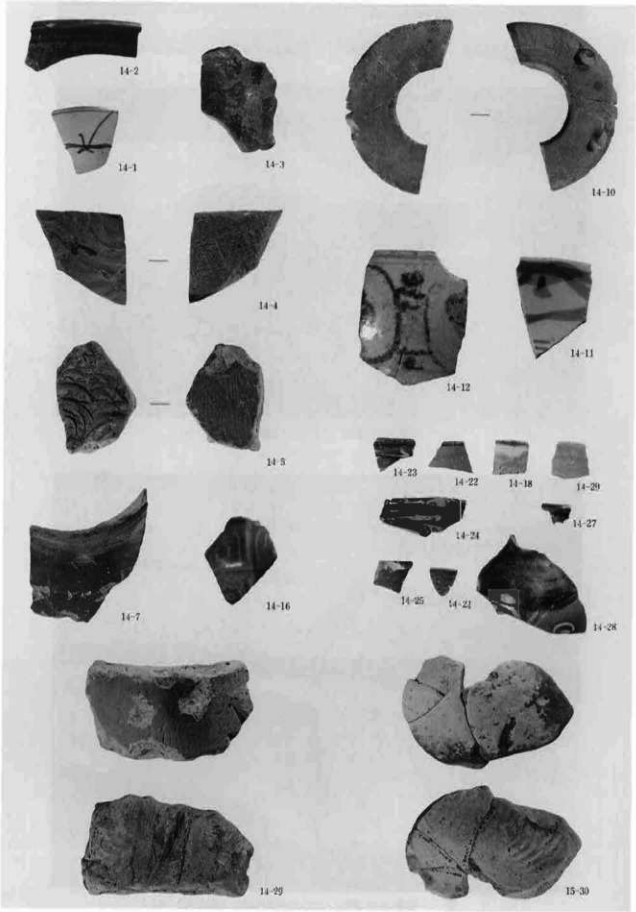
2　熊野水町遺跡　1SD25完掘状況（北から）

1　熊野水町遺跡　1SD30土層断面（北から）

2　熊野水町遺跡　1SD30完掘状況（北から）

1　熊野水町遺跡　1SD35土層断面（北から）

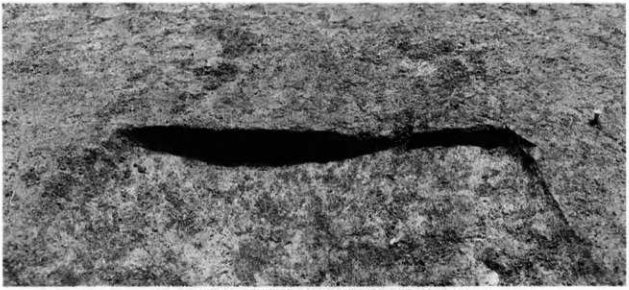
2　熊野水町遺跡　1SD35完掘状況（北から）



1　熊野水町遺跡　出土遺物

1　熊野松ノ下遺跡　調査区遠景　空中写真（西から）

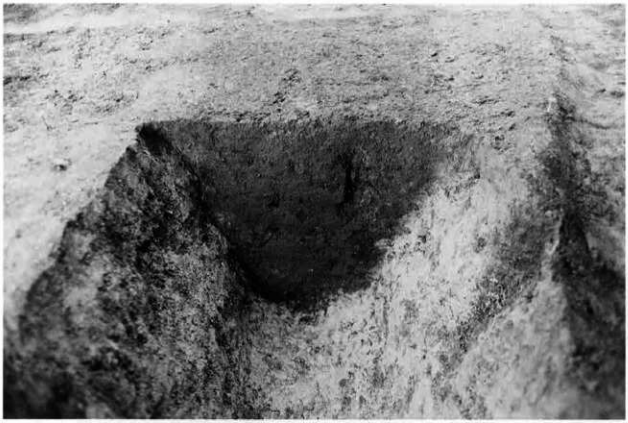
2　熊野松ノ下遺跡　調査区遠景　空中写真（真上から）



1　熊野松ノ下遺跡　1SD1土層断面状況（西から）

2　熊野松ノ下遺跡　1SD2土層断面状況（東から）

3　熊野松ノ下遺跡　1SD3土層断面状況（東から）

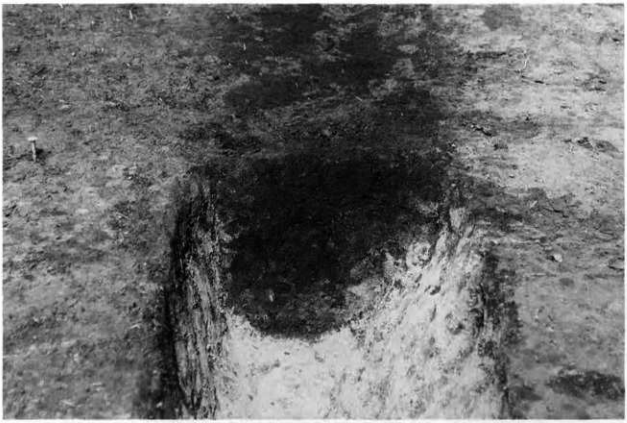


1　熊野松ノ下遺跡　1SD4東ベルト土層断面状況（西から）

2　熊野松ノ下遺跡　1SD4中央ベルト土層断面状況（西から）

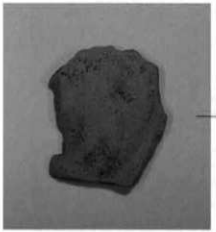
1　熊野松ノ下遺跡　1SD4西ベルト土層断面状況（西から）

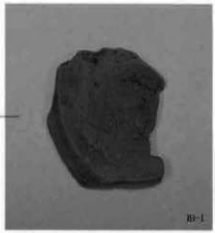
2　熊野松ノ下遺跡　1SD5東ベルト土層断面状況（西から）

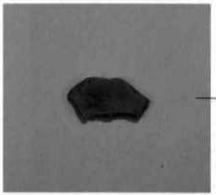


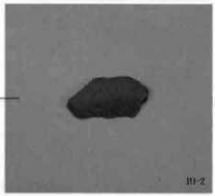
1　熊野松ノ下遺跡　1SD5中央ベルト土層断面状況（西から）

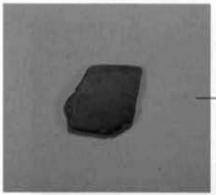
2　熊野松ノ下遺跡　1SD5西ベルト土層断面状況（東から）

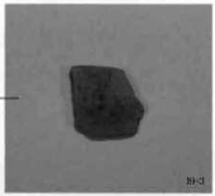


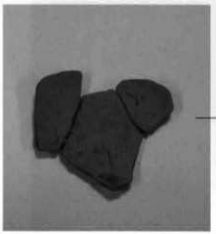


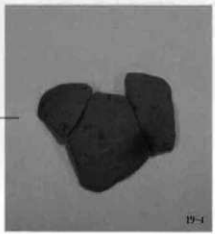












1　熊野松ノ下遺跡　出土遺物

1　熊野五反田遺跡　全景（上から）

2　調査区より熊野集落を見る（北から）

1　熊野五反田遺跡　1SD01土層断面（西から）

2　熊野五反田遺跡　1SD01完掘状況（西から）

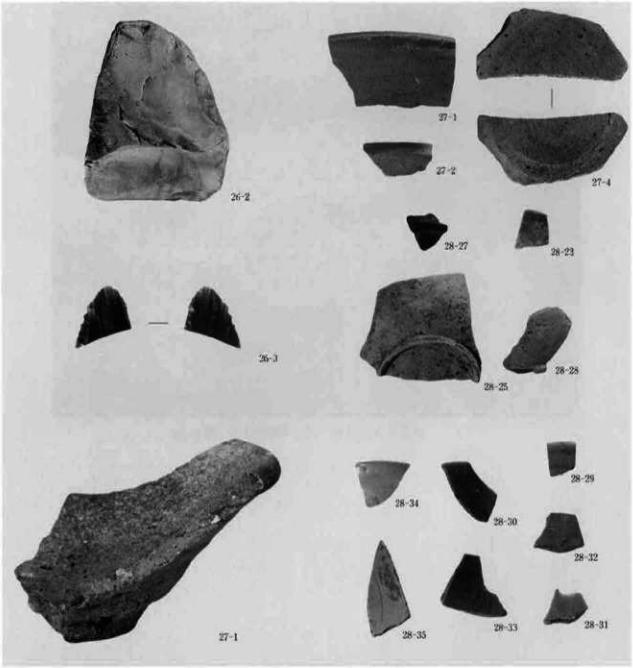
1　熊野五反田遺跡　1SX05土層断面（西から）

2　熊野五反田遺跡　1SX05完掘状況（東から）

1　熊野五反田遺跡　1SD02完掘状況（北から）

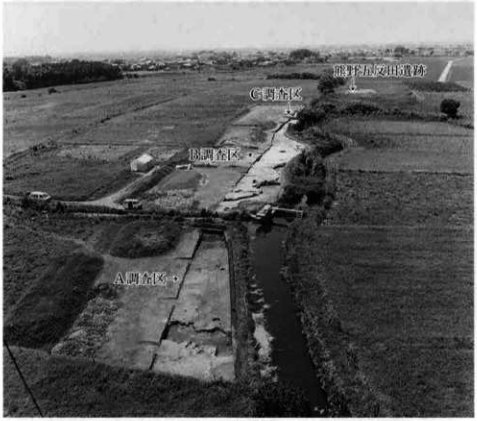
2　熊野五反田遺跡　1SK03完掘状況（南西から）

1　熊野五反田遺跡　1SX04完掘状況（南から）



1　熊野五反田遺跡　出土遺物

1　熊野宮ノ後遺跡遠景　空中写真（東から）



2　熊野宮ノ後遺跡　調査区遠景　空中写真（東から）

1　熊野宮ノ後遺跡　A調査区全景　空中写真（上が北）

2　熊野宮ノ後遺跡　B調査区東側　空中写真（上が北）

3　熊野宮ノ後遺跡　B調査区西側およびC調査区全景　空中写真（上が北）

1　熊野宮ノ後遺跡　表土除去作業状況（東から）

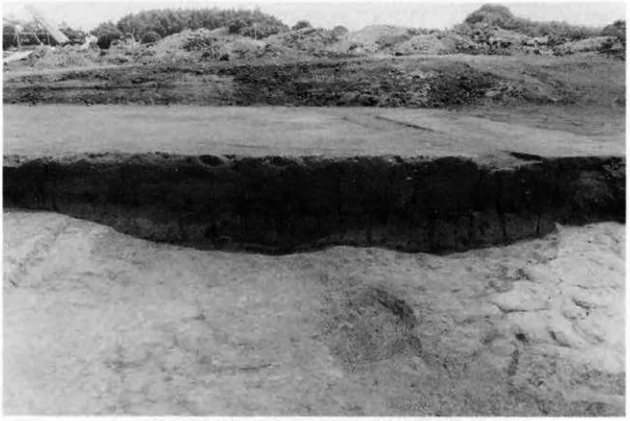
2　熊野宮ノ後遺跡　A調査区：冠水状況（西から）

1　熊野宮ノ後遺跡　B調査区：作業状況（南から）

2　熊野宮ノ後遺跡　A調査区：1SD30土層断面状況（北から）

1　熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SD03土層断面状況（北から）

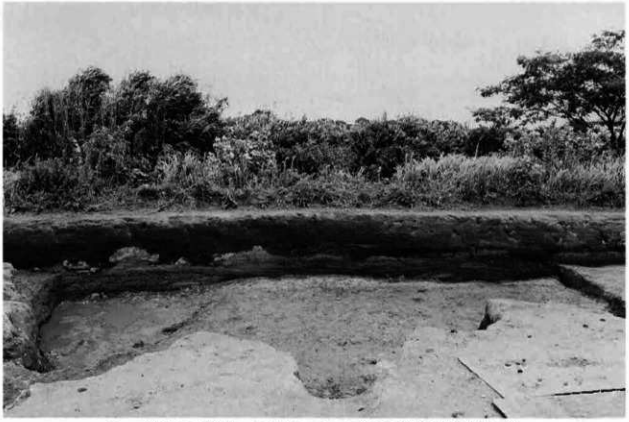
2　熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SD04土層断面状況（北から）



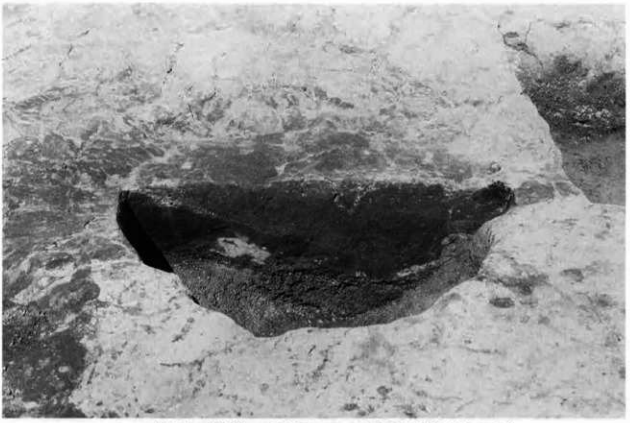
1　熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SD08・09土層断面状況（北から）

2　熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SD10土層断面状況（北から）

1　熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SX07東盤土層断面状況（西から）

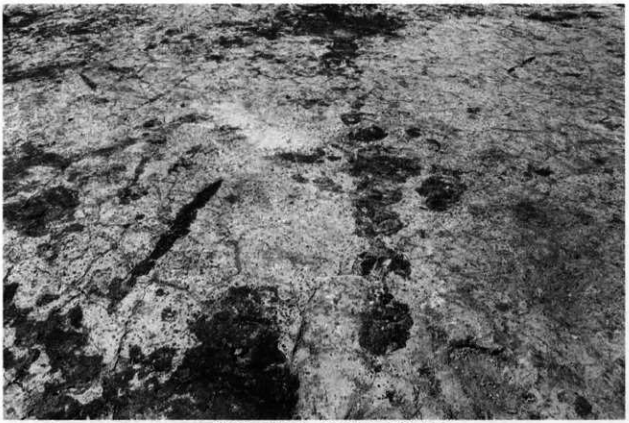


2　熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SX07北盤土層断面状況（南から）



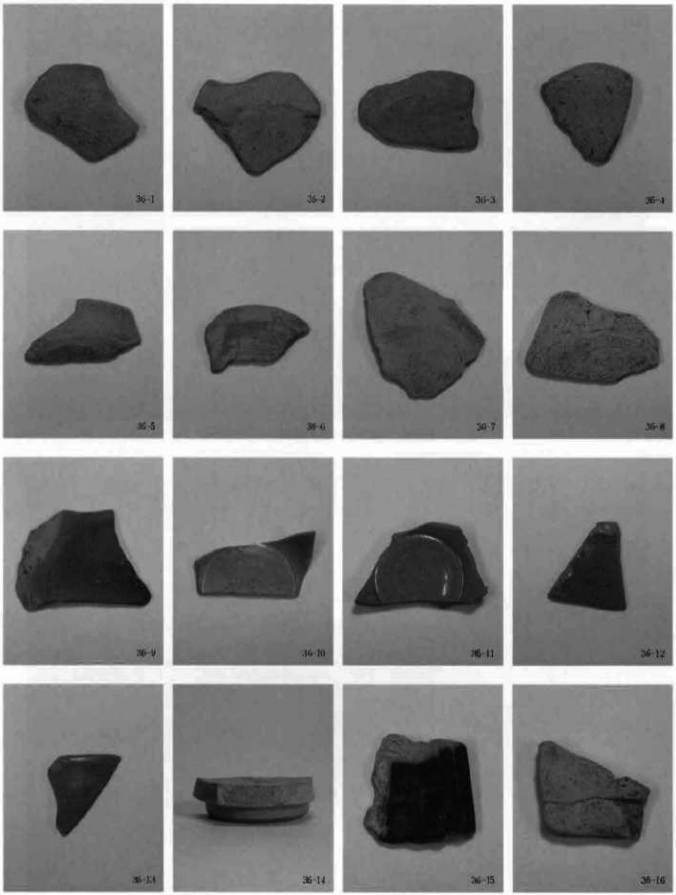
1　熊野宮ノ後遺跡　B調査区：1SK02土層断面状況（南西から）

2　熊野宮ノ後遺跡　B調査区：不明痕跡①

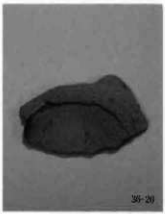


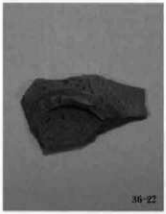
1　熊野宮ノ後遺跡　B調査区：不明痕跡②

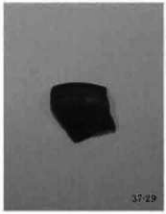
2　熊野宮ノ後遺跡　B調査区：不明痕跡③



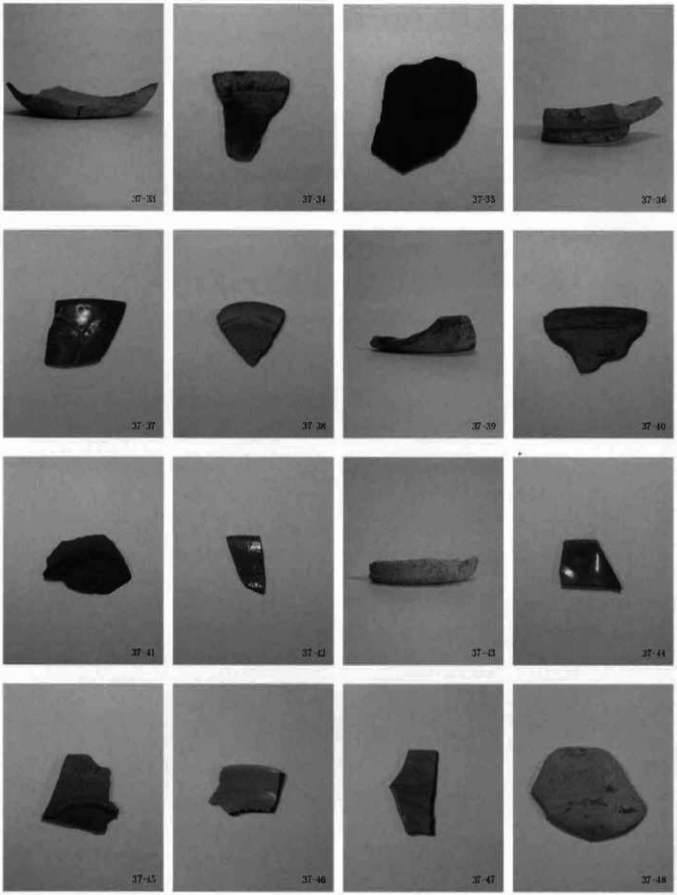
1　熊野宮ノ後遺跡　出土遺物①



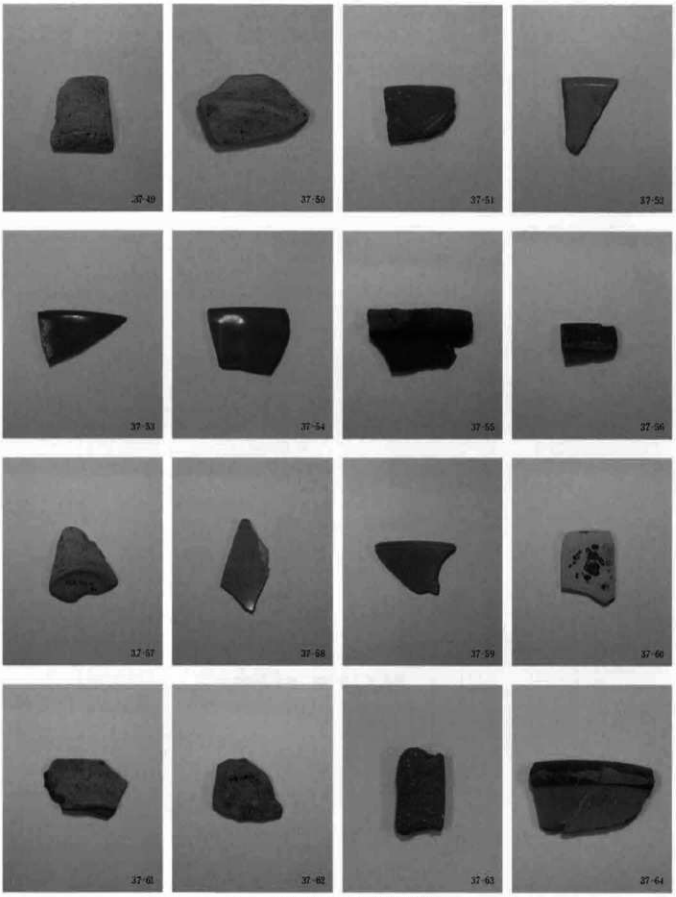




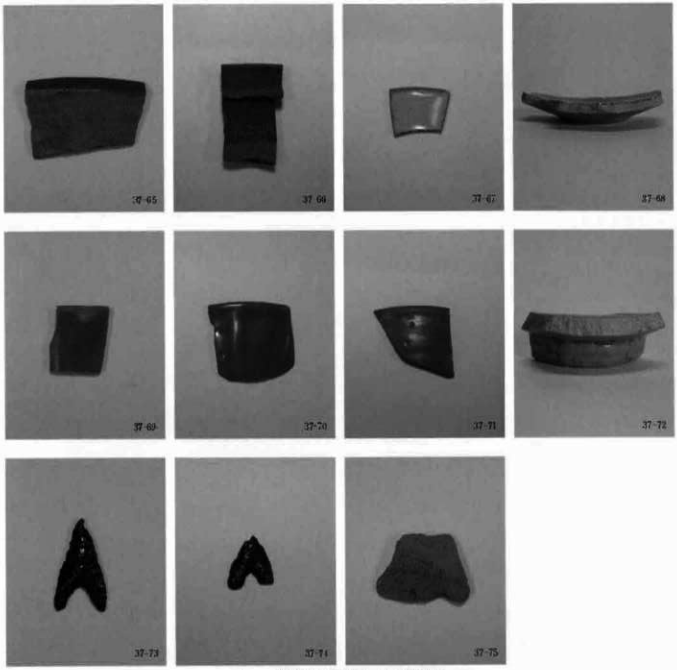
1　熊野宮ノ後遺跡　出土遺物②



1　熊野宮ノ後遺跡　出土遺物③



1　熊野宮ノ後遺跡　出土遺物④



1　熊野宮ノ後遺跡　出土遺物⑤

1　蔵数島崎田遺跡　全景（上から）

2　調査区より蔵数集落を見る（西から）

1　蔵数島崎田遺跡　調査区南側足跡群（上から）

2　蔵数島崎田遺跡　1SX10完掘状況（上から）

1　　蔵数島崎田遺跡　1SX10土層断面①（東から）

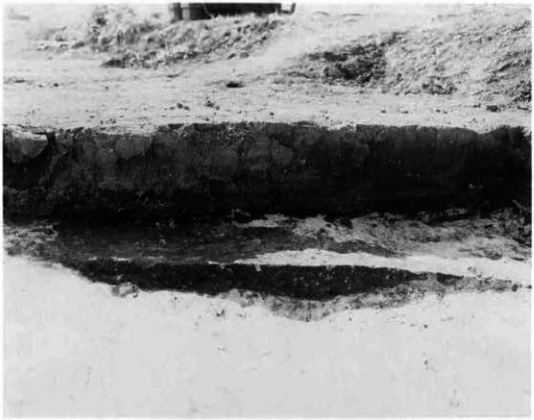
2　　蔵数島崎田遺跡　1SX10土層断面②（東から）

1　蔵数島崎田遺跡　1SX10土層断面③（東から）

2　蔵数島崎田遺跡　1SX10土層断面④（東から）

1　　蔵数島崎田遺跡　1SK01土層断面（東から）

2　　蔵数島崎田遺跡　1SK01完掘状況（南から）



1　　藏数島崎田遺跡　1SK02土層断面（東から）

2　　藏数島崎田遺跡　1SK02完掘状況（北から）

1　　蔵数島崎田遺跡　1SK11東側土層断面（北から）

2　　蔵数島崎田遺跡　1SK11南側土層断面（西から）

1　　蔵数島崎田遺跡　1SK11西側土層断面（南から）

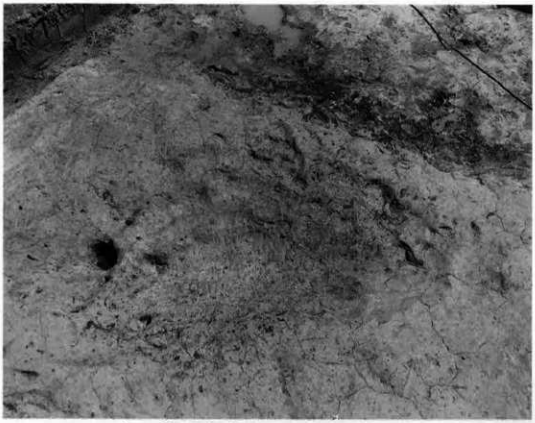
2　　蔵数島崎田遺跡　1SK11北側土層断面（東から）

1　蔵数島崎田遺跡　1SK05東側土層断面（南から）

2　蔵数島崎田遺跡　1SK05南側土層断面（東から）

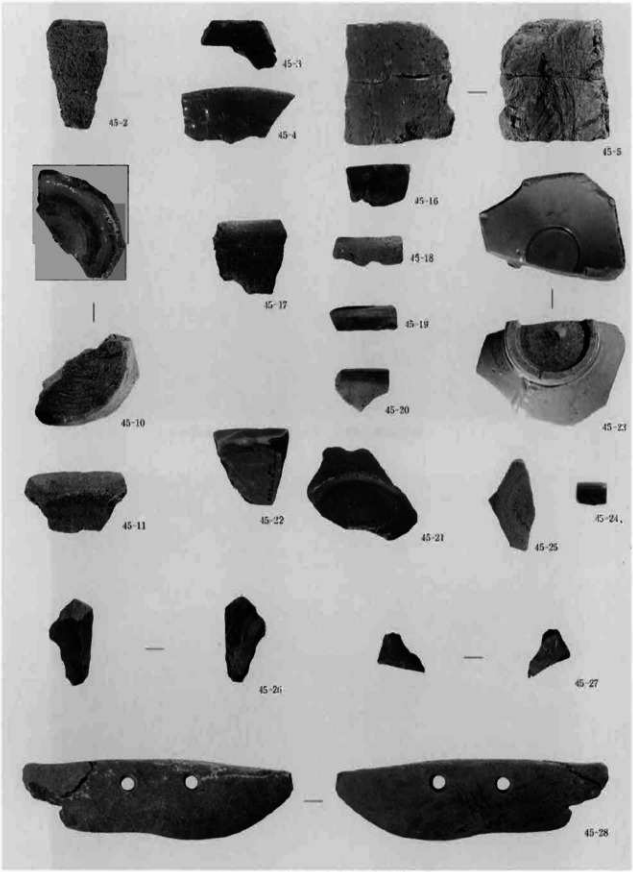
1　　蔵数島崎田遺跡　1SK05西側土層断面（北から）

2　　蔵数島崎田遺跡　1SK05北側土層断面（西から）



1　蔵数島崎田遺跡　1SK05完掘状況（北から）

2　蔵数島崎田遺跡　1SD06完掘状況（北から）



1　蔵敷島崎田遺跡　出土遺物

筑後北部地区遺跡群Ⅰ

筑後市文化財調査報告書

第61集

平成17年3月31日　刊行

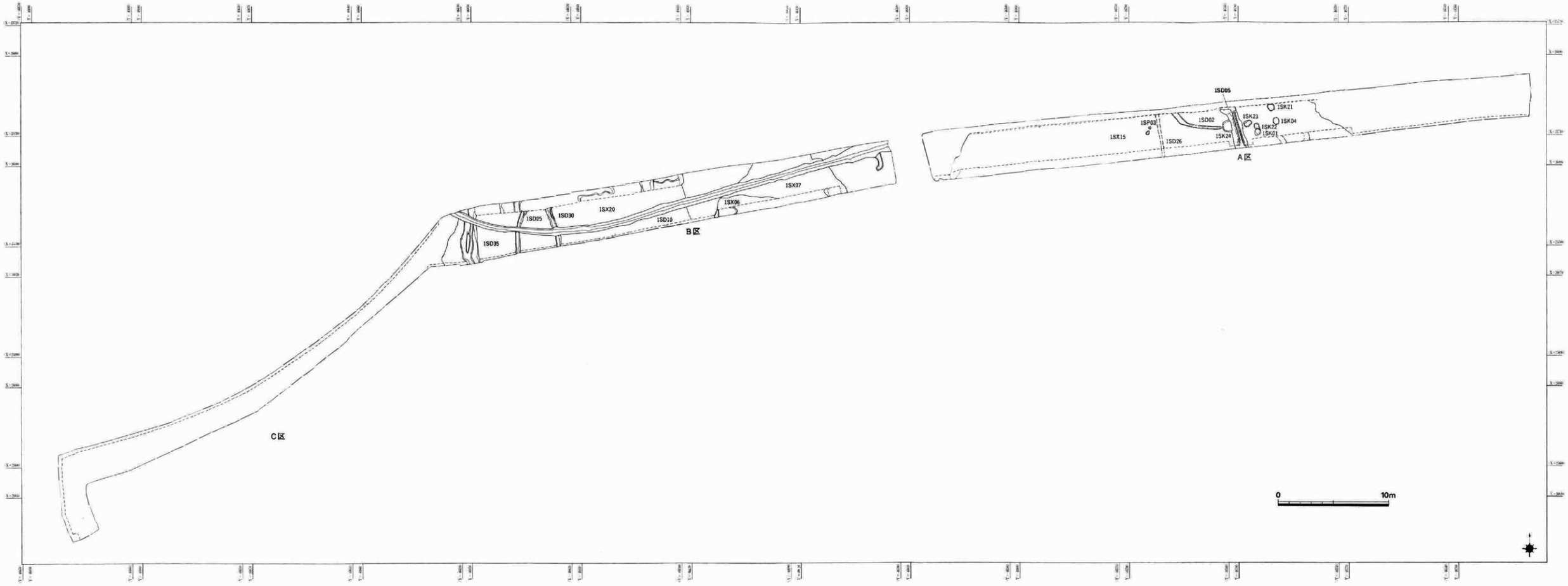
発行　筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

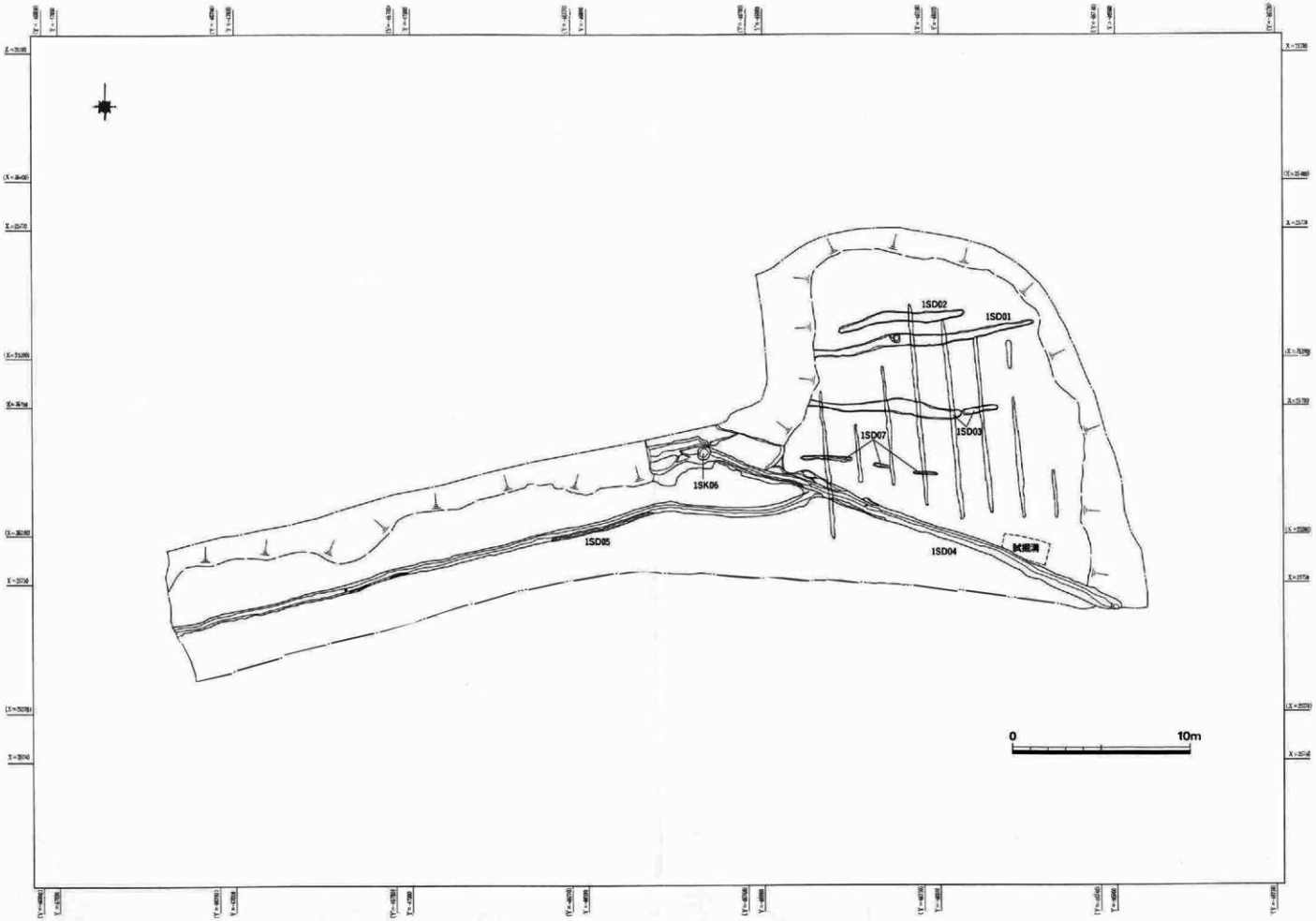
印刷　大同印刷株式会社

佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20

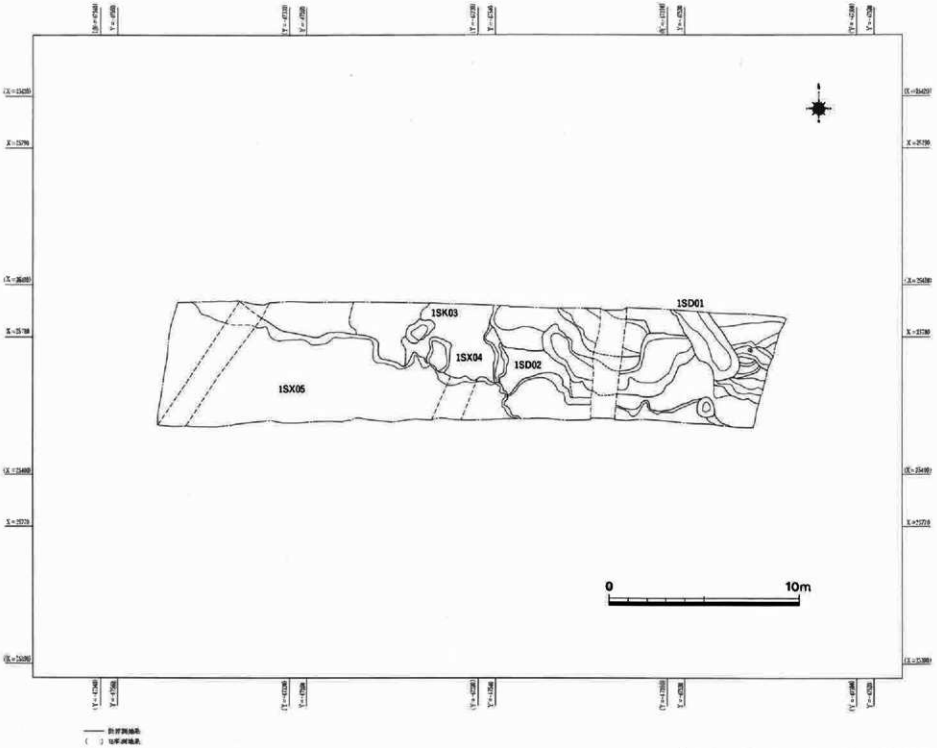
TEL 0952-71-8520



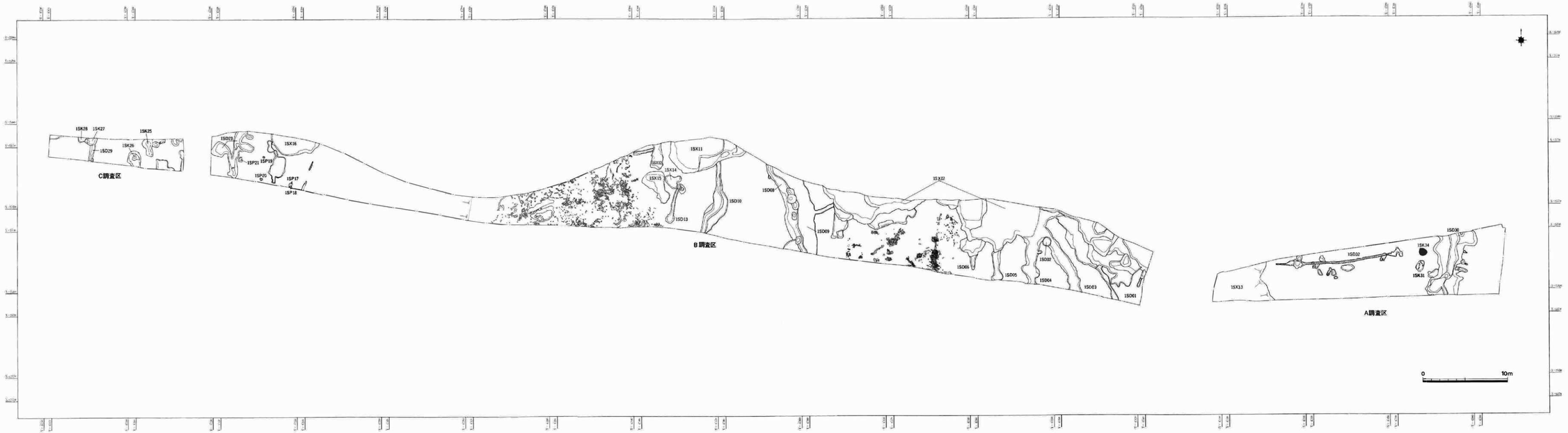
付図1　熊野水町遺跡　全体図（S＝1/200）



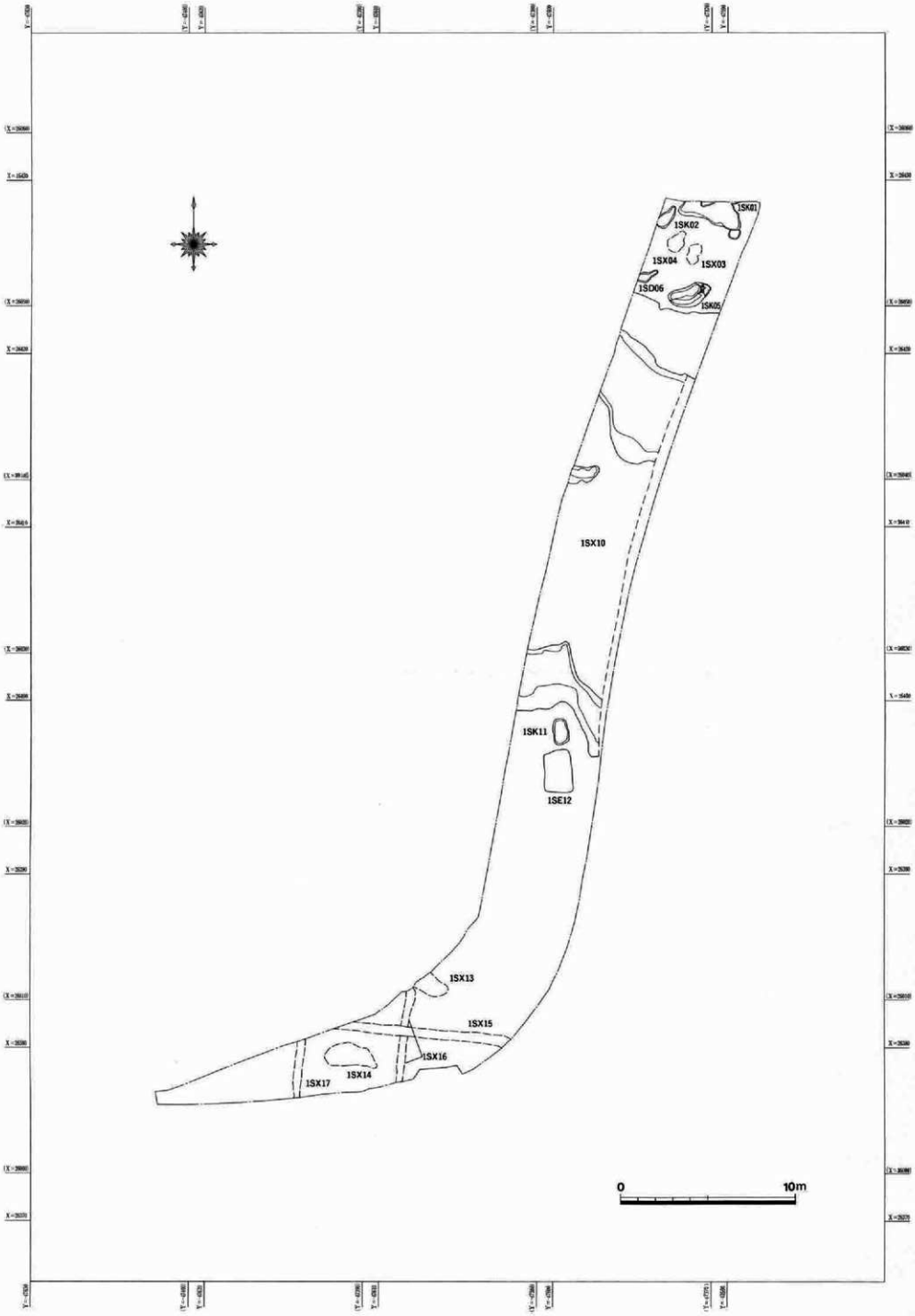
付図２　熊野松ノ下遺跡　全体図（Ｓ＝1/200）



付図3　雉野五反田遺跡　全体図（S＝1/200）



付図4　熊野宮ノ後遺跡　全体図（S＝1/200）



付図5　蔵数島崎田遺跡　全体図（S＝1/200）